

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第60集

# 岳美遺跡 I

## (遺構編)

平成4・5年度静清バイパス(岳美地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第60集  
岳美遺跡 I (遺構編)

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますよう  
お願ひいたします。

正 誤 表

	誤	正
4頁本文下から2行目	官衝的	官衙的
報告書抄録の副書名	(岳美遺跡)	(岳美地区)

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第60集

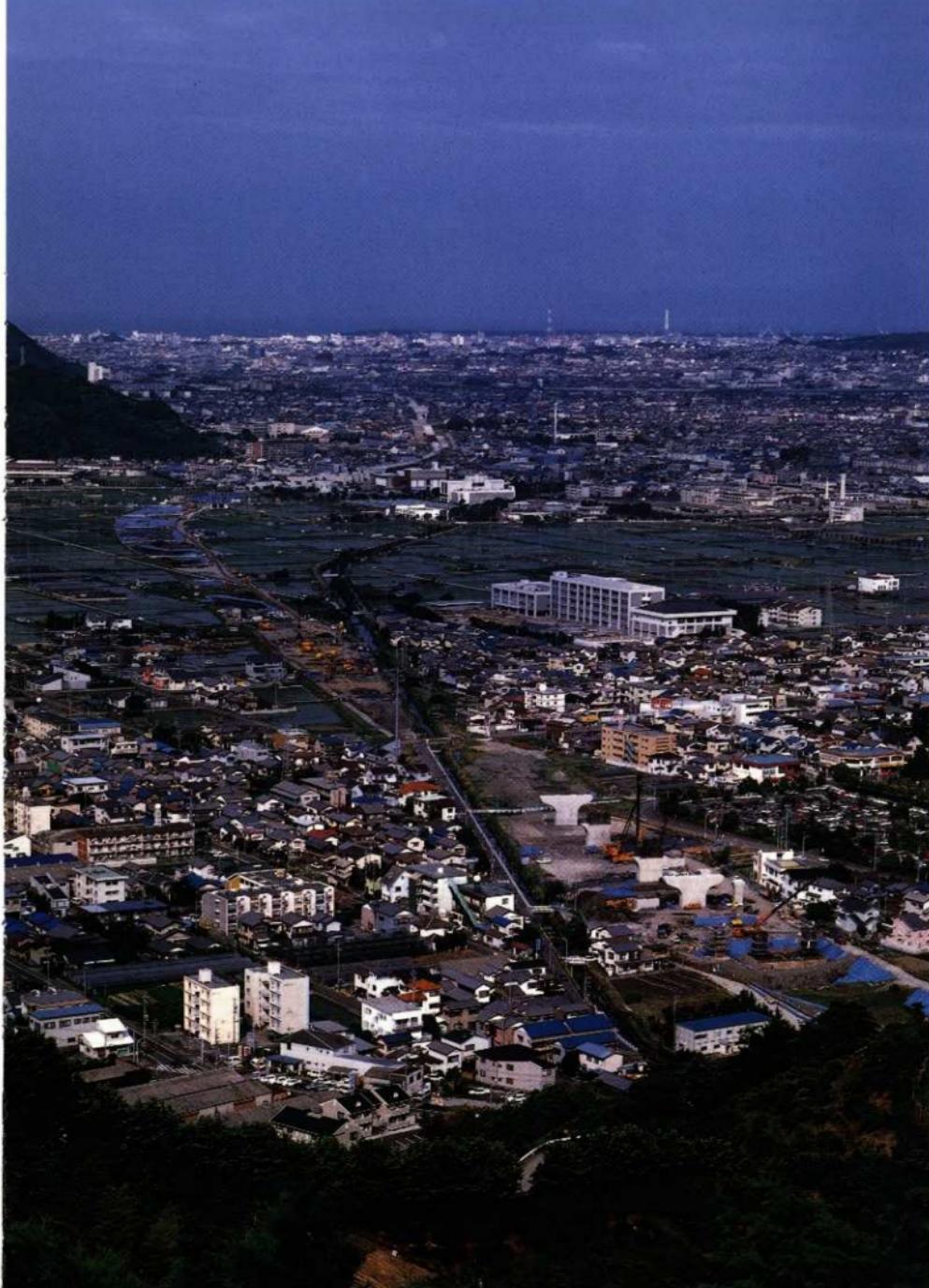
# 岳美遺跡 I

## (遺構編)

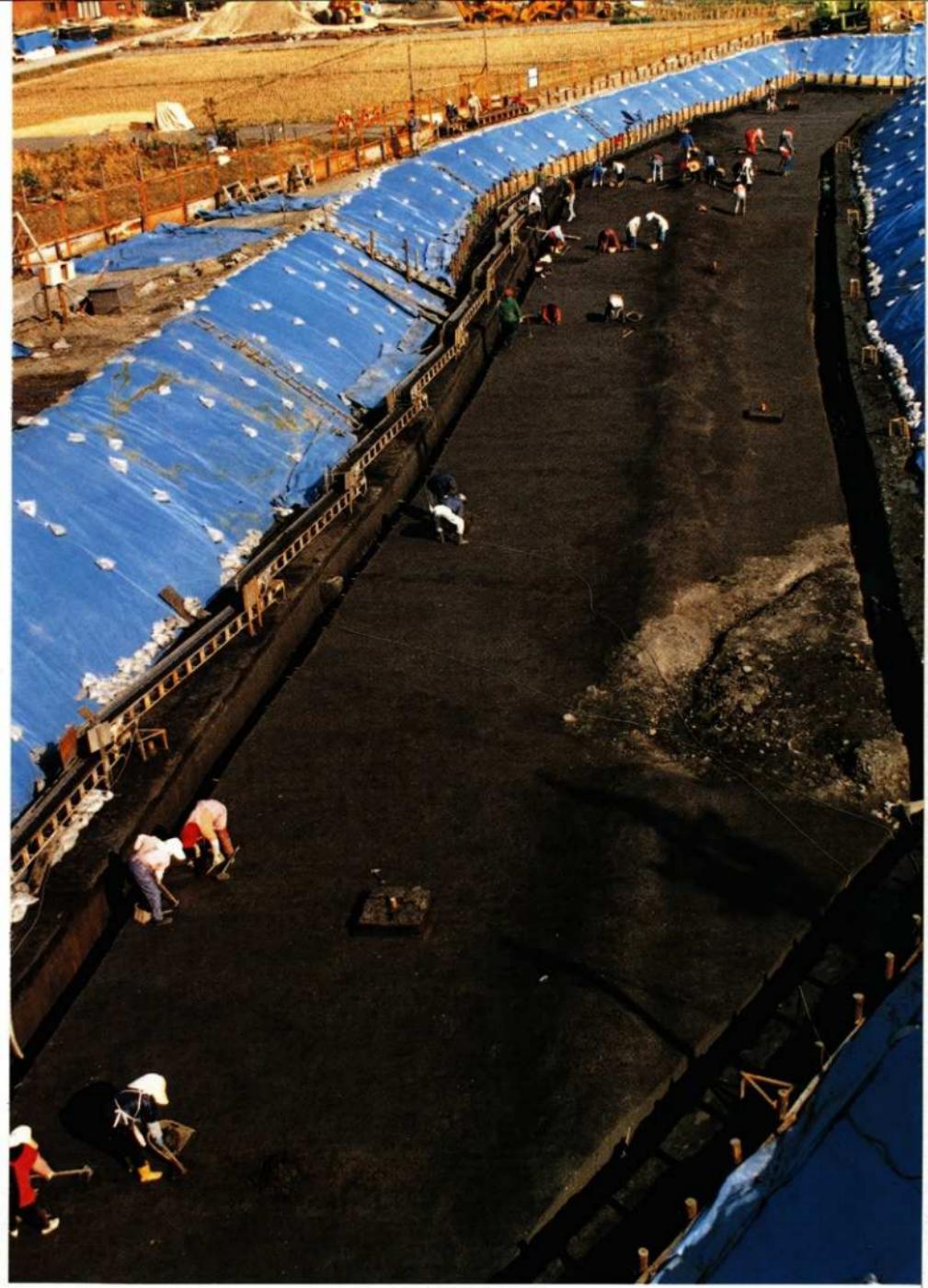
平成4・5年度静清バイパス(岳美地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



I. 賤機山より岳美遺跡を望む



2. 6区造構検出作業風景

## 序

岳美遺跡は、古代の条里型水田遺構を中心とした遺跡である。

近年、静岡・清水地域における低地遺跡の発掘調査が盛んに行われている。とりわけ、水田跡の発掘が相次いでおり、登呂遺跡などにみられる稻作生産の実態がより具体的に明らかにされつつある。

当研究所では、静清バイパス建設に伴う発掘調査を実施してきたが、これまでに、静岡市池ヶ谷遺跡・川合地区の遺跡群・瀬名遺跡、清水市長崎遺跡などで、それぞれ特色のある成果を得ている。

岳美遺跡は、遺物こそ希少であったが、古代の坪界線の確認を中心として大きな成果をあげることができた。本遺跡は、浅畠沼に近く、沼域の拡大・縮小の影響が強い地域と推定されるが、それが条里制の施工に、どのように影響を与えているかなど学的に興味深い所である。

本書は、その調査報告書の遺構編であり、岳美遺跡の調査報告書の第1冊目にあたるものである。

なお調査や本書作成にあたっては、建設省、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼を申し上げる次第である。また、資料整理にあたった研究所職員、作業に参加された多くの方々、多くの助言・指導をいただいた方々に、この機会に深くお礼申し上げたい。

平成7年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　　言

1. 本書は、静岡県静岡市北安東4丁目・岳美1丁目・立石に所在する岳美遺跡の調査報告書の第1分冊である。
2. 調査は、平成4年度から平成5年度まで静清バイパス（岳美地区）埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関 静岡県教育委員会、調査実施機関 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 現地発掘調査は、平成4年4月1日から平成5年10月31日まで行った。整理作業は、現地発掘調査と並行して、現地で基礎的作業を行い、平成5年11月より、資料整理、図版作成等、本格的整理作業を開始、平成7年度には第2分冊（遺物編）を作成する予定である。
4. 調査体制は以下の通りである。

平成4年度	所長 斎藤忠、調査研究部長 山下晃、調査研究部第二課長 栗野克巳、主任調査研究員 亀山雅弘、調査研究員 池ヶ谷清、一杉高徳、岩崎直巳、厚地淳司、鈴木正悟
平成5年度	所長 斎藤忠、調査研究部長 植松章八、調査研究部第二課長 栗野克巳、主任調査研究員 亀山雅弘、調査研究員 青野好身、厚地淳司
平成6年度	所長 斎藤忠、調査研究部長 小崎章男、調査研究部次長兼調査研究部第一課長 栗野克巳、主任調査研究員 池ヶ谷清
5. 本書の作成は、調査研究部次長兼調査研究第一課長 栗野克巳と発掘調査および整理に参加した職員が行った。執筆は、主任調査研究員 池ヶ谷清、技術職員 竹下寿之が行った。
6. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

## 凡　　例

- 本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。
1. 調査区の座標軸は、平面直角座標VII系を用いた。
  2. 使用した方位は、上記の座標系の方位（座標北）である。
  3. 遺構の表記は次の通りである。

S K ……畦畔	S R ……自然流路	S X ……不明遺構
----------	------------	------------

# 目 次

序	
例言・凡例	
はじめに	1
第1章 位置と環境	2
第1節 位置と自然環境	2
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の概要	5
第1節 調査の方法	5
第2節 基本土層	5
第3節 調査の経過	7
第3章 各調査区の概要（遺構と遺物）	9
第1節 1区	9
第2節 2・3区	12
第3節 4区	12
第4節 5区	20
第5節 6区	24
第6節 7区	24
第7節 8区	34
第8節 9～11区	40
第9節 12区	40
第10節 14区	45
第11節 15・16区	53
第4章 まとめ	55
1. 大畦畔の検出状況	55
2. 大畦畔の補強状況	55
3. 火山灰の検出状況	56
4. 地盤の高さと地質の関係	56

## 挿図目次

第1図	遺跡周辺地形図	3
第2図	グリッド配置図	6
第3図	1区D I層上面地形図	9
第4図	1区D III層上面遺構全体図	10
第5図	1区D III層内遺物出土状態図	11
第6図	2・3区D I層上面地形図	13
第7図	2・3区D III層上面遺構全体図	15
第8図	2・3区D III層内遺物出土状態図	16
第9図	4区D I層上面地形図	19
第10図	4区D III層上面遺構全体図	19
第11図	4区D III層内遺物出土状態図	20
第12図	5区D I層上面地形図	21
第13図	5区D III層上面遺構全体図	21
第14図	5区D III層内遺物出土状態図	22
第15図	S R - 1 実測図	23
第16図	6区D I層上面地形図	25
第17図	6区D III層上面遺構全体図	27
第18図	6区D III層内遺物出土状態図	29
第19図	7区D I層上面地形図	31
第20図	7区D III層上面遺構全体図	32
第21図	7区D III層内遺物出土状態図	33
第22図	8区D I層上面地形図	34
第23図	8区D III層上面遺構全体図	35
第24図	8区D III層内遺物出土状態図	36
第25図	9~11区D I層上面地形図	37
第26図	9~11区D III層上面遺構全体図	39
第27図	9~11区D III層内遺物出土状態図	41
第28図	12区D I層上面地形図	43
第29図	12区D III層上面遺構全体図	43
第30図	12区D III層内遺物出土状態図	44
第31図	14区D I層上面地形図	44
第32図	14区D III層上面遺構全体図	45
第33図	14区D III層内遺物出土状態図	46
第34図	15・16区D I層上面地形図	47
第35図	15・16区D III層上面遺構全体図	49
第36図	15・16区D III層内遺物出土状態図	51
第37図	S R - 5 実測図	53
第38図	埋没条型地割りの復元図および土層柱状模式図	57
第39図	地質断面図	59

## 挿表目次

第1表	現地調査工程表	1
第2表	坪界線の交点座標一覧表	54

## 図版目次

### 巻頭カラー図版

1. 賤機山より岳美遺跡を望む
2. 6区遺構検出作業風景

図版1	1区D I層	
	1. 全景	
	2. 遠景（南東より）	
	3. 同上（北西より）	
図版2	1区D III層 1	
	1. 遠景（南西より）	
	2. 全景	
図版3	1区D III層 2	
	1. SK-1検出状況（南東より）	
	2. SK-1解体状況	
	3. SK-1土層断面（南壁）	
図版4	1区D III層 3	
	1. SK-1補強状況	
	2. SK-1解体状況（細部）	
	3. 同上	
	4. 輪カンジキ型田下駄出土状況	
	5. 輪カンジキ型田下駄出土状況	
	6. 輪カンジキ型田下駄出土状況	
	7. 田下駄出土状況	
図版5	2・3区D I層	
	1. 全景	
	2. 2区遠景（北より）	
	3. 3区遠景（北より）	
図版6	2・3区D III層 1	
	1. 遠景（北東より）	
	2. 全景	
図版7	2・3区D III層 2	
	1. SK-2検出状況（北より）	

2. 同上（西より）  
3. SK-3 検出状況（南より）
- 図版8 2・3区DⅢ層 3  
1. SK-2 土層断面  
2. 同上  
3. SK-3 土層断面  
4. SK-3 解体状況
- 図版9 2・3区DⅢ層 4  
1. SK-3 杖列検出状況  
2. 同上  
3. 輪カンジキ型田下駄出土状況  
4. 下駄出土状況  
5. 輪カンジキ型田下駄出土状況  
6. 須恵器出土状況
- 図版10 4区DⅠ層  
1. 全景  
2. 遠景（西より）  
3. 同上（東より）
- 図版11 4区DⅢ層 1  
1. 全景  
2. 遠景（東より）  
3. 同上（北西より）
- 図版12 4区DⅢ層 2  
1. SK-4 検出状況（南東より）  
2. 同上（南西より）  
3. SK-4 解体・湧水施設（SX-2）検出状況（北西より）
- 図版13 5区DⅠ層  
1. 遠景（南西より）  
2. 全景
- 図版14 5区DⅢ層 1  
1. 遠景（西より）  
2. 全景
- 図版15 5区DⅢ層 2  
1. SK-5 検出状況（南東より）  
2. SK-5 解体状況  
3. SK-5 土層断面（北壁）
- 図版16 5区 SR-1  
1. 検出状況（西より）  
2. 同上（東より）  
3. 土層断面（西壁）
- 図版17 6・7区DⅠ層

1. 6区全景
  2. 7区全景
  3. 6区遠景（南西より）
  4. 7区遠景（北西より）
- 図版18 6区DⅢ層 1
1. 遠景（南西より）
  2. 全景
- 図版19 6区DⅢ層 2
1. SK-6土層断面（西壁）
  2. SK-6解体状況
  3. SR-2検出状況（南東より）
- 図版20 7区DⅢ層 1
1. 全景
  2. 遠景（北西より）
- 図版21 7区DⅢ層 2
1. SK-7土層断面（南壁）
  2. SK-7解体状況（南東より）
  3. 同上（北西より）
  4. 輸カンジキ型田下駄出土状況
  5. 真状木製品出土状況
- 図版22 8区D I層
1. 全景
  2. 遠景（南西より）
  3. 同上（南東より）
- 図版23 8区DⅢ層 1
1. 遠景（南東より）
  2. 全景
  3. SK-8土層断面（南壁）
- 図版24 8区DⅢ層 2
1. SK-8解体状況（南東より）
  2. 同上（北西より）
  3. 馬銚出土状況
  4. 灰釉陶器出土状況
  5. 下駄出土状況
- 図版25 9~11区D I層
1. 全景
  2. 遠景（北東より）
  3. 同上（北西より）
- 図版26 9~11区DⅢ層 1
1. 遠景（南西より）
  2. 全景

- 図版27 9～11区DⅢ層 2
1. SK-10検出状況（北西より）
  2. SK-11検出状況（北東より）
  3. SK-9～11解体状況（南西より）
  4. SK-10解体状況（南東より）
  5. SK-10'解体状況（南東より）
- 図版28 12区DⅠ層
1. 遠景（南西より）
  2. 全景
- 図版29 12区DⅢ層
1. 全景
  2. SK-12検出状況（北より）
  3. SK-12解体状況（北西より）
- 図版30 14区DⅠ層
1. 全景
  2. 遠景（北東より）
  3. 同上（南西より）
- 図版31 14区DⅢ層
1. 全景
  2. SR-3検出状況（北東より）
  3. 同上（南西より）
- 図版32 15・16区DⅠ層
1. 全景
  2. 遠景（南西より）
  3. SR-4検出状況（南より）
- 図版33 15・16区DⅢ層 1
1. 遠景（南西より）
  2. 全景
- 図版34 15・16区DⅢ層 2
1. SK-14検出状況（南西より）
  2. SK-15検出状況（北西より）
- 図版35 15・16区DⅢ層 3
1. SK-15検出状況（南東より）
  2. SK-15解体状況（南東より）
  3. 同上（南端、南東より）
- 図版36 15・16区DⅢ層 4
1. SR-5検出状況（南東より）
  2. SR-4検出状況（北より）
  3. SR-5土層断面
  4. 大足出土状況（SR-5）

# はじめに

一般国道1号静清バイパスは清水市興津東町から静岡市丸子二軒家までの延長24.2kmにわたるものである。既に清水市興津東町一長崎間、静岡市昭府町一丸子二軒家間の部分が開通し、使用されている。計画された路線には数多くの埋蔵文化財が存在しており、昭和59年に本研究所が設立されて以来発掘調査が行われてきたが、この岳美遺跡と、隣接する上土遺跡、池ヶ谷遺跡の調査をもって完了となった。

静清バイパスの概要

当遺跡の発掘調査は、建設省の委託を受け財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたることとなり、平成4年4月から平成5年10月まで現地調査、引き続き平成7年度まで資料整理、平成8年度以降に保存処理・収納等の計画が立てられ発掘調査に入った。

調査の計画

本調査は、近年静清平野北部で確認された古代の条里制関係遺構の根幹をなす、坪界線の確認を主体とした調査である。

調査の目的

既に静清バイパス建設に伴って調査された瀬名遺跡・川合遺跡・池ヶ谷遺跡等からは、およそN39°Wの方向性をもつ条里型水田遺構等が確認されている。いずれも平安時代及びそれ以降も踏襲される傾向をもつて一町単位の坪界線に該当する部分で、幅2~6m以上の大きな畦畔や溝、道路状遺構が検出されている。隣接地域では他に、県営住宅建て替えに伴う川合遺跡八反田地区や県立中央高等学校建設に伴う城北永ヶ島遺跡においても同様の条里制遺構が確認されている。

条里制遺構

池ヶ谷地区と川合・瀬名地区は約2km離れており、同一規格による施工なのかどうかを追求するために、両地区の中間である岳美遺跡や隣接する上土遺跡での埋没条里制遺構の確認と精度の高い測量調査が必要とされた。

報告書の作成計画

本書はその成果を報告するものである。

また、報告書の各年度における作成計画は、以下のとおりである。

平成6年度 岳美遺跡I(遺構編)

平成7年度 岳美遺跡II(遺物編)

本書は、静清バイパス(岳美地区)埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊目にあたるものである。

第1表 現地調査工程表

調査区	平成4年度												平成5年度									
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
1 区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
2・3区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4 区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
5 区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
6・7区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
8 区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
9~11区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
12 区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
14 区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
15・16区	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

# 第1章 位置と環境

## 第1節 位置と自然環境

- 遺跡の位置** 岳美遺跡は、静岡平野の北西部、賤機丘陵の東側から南沼上丘陵西側の間の中西部に位置している。この付近一帯は、安倍川の氾濫・洪水などによる大量の土砂によって形成された扇状地の北端で麻機低湿地の南西部から中央部にあたる。
- 周辺の地形** ここで麻機地域の地形を概観してみたい。麻機地域は、静岡市街地の北方、巴川上流部にあたり、周縁部より低い広汎な低湿地帯が広がっている。その上、排水不良の湿田が卓越している。特に長尾川の扇状地性押出しと、北街道沿いの自然堤防・微高地などと相まって、微地形的に閉塞され、台風・集中豪雨に見舞われると大小幾多の用排水路の水が溢れ、いわゆる常習湛水地域の一翼をなしている。
- 常冠水地域** 麻機低湿地は、古来、常冠水地域として特異な地域的性格を呈していた。とくに巴川と七曲川に挟まれた三角状の低湿地は、その表層位の堆積土層から、泥炭質の特徴が見受けられる。低湿地には、標高7m以下で凹状の低湿地と中小河川の旧河道、湖沼地の痕跡などが窺われる。これら微凹地の表土は、大部分が有機質シルト・粘土・泥混じりの互層から成っている。これらの低湿地は洪水期には、遊水池の役割を果たしてきた。その後、洪水のたびに山地、賤機山東麓から土石・砂礫・山砂が押し出され、その堆積の繰り返しで次第に陸化された。したがって、河川沿いや沼、沢周縁の陸化された微高地に、しだいに土地開発が行われたと考えられる。
- 谷底平野** また、麻機低湿地は、糸魚川-静岡構造線沿いにあり、盆地状の谷底平野の特性を示している。一時的に海水が入り込み浅海と化した。海退後、巴川上流部の中小河川や安倍川の分流によって、土石・砂礫・粘土が運び込まれ、かつ埋積されたものといえる。一方、巴川水系流域の中で、麻機のような閉じられた水域は往々にして、泥質堆積物の量が多いものである。したがって、河川の流路は、移動しにくいが、その流路移動が少なければ、氾濫の際、泥炭や泥質堆積物が多量に堆積される。その加重圧は、一層河川の固定化を促すことにもなる。しかも巴川自体の河状は、川幅が狭く、分流も少ない。土砂の運搬量は、安倍川と比較して少なく、河床は後背湿地より低い。それが却って後背湿地への粗粒物質（砂礫・砂土）の供給を少なくしている。特に、低湿地の土壤構成は、泥炭質の堆積物質が多く、その面積範囲も広汎である。また、氾濫の後の冠水・塩水の期間が長いことにより、後背湿地に泥炭のみ厚く堆積し、地下水位の上昇と相まって軟弱地盤が形成されたものと推測される。
- 近年の状況** 低湿地は、旧来近郊農村として、静岡市街地からはむしろ偏在的位置付けを成していくが、最近、巴川の改修・耕地の区画整理の完成、それに伴う道路整備の促進で市街地との時間距離が短縮化した。その上、一般住宅や団地群造成と相まって、急激に静岡市北郊のベッドタウンの一翼を成し、独自な地域的性格をかたちづくってきている。

### 参考文献

・細井淳志郎 「あさはた地区の自然的及び人文的環境基盤」『麻機誌』1979年

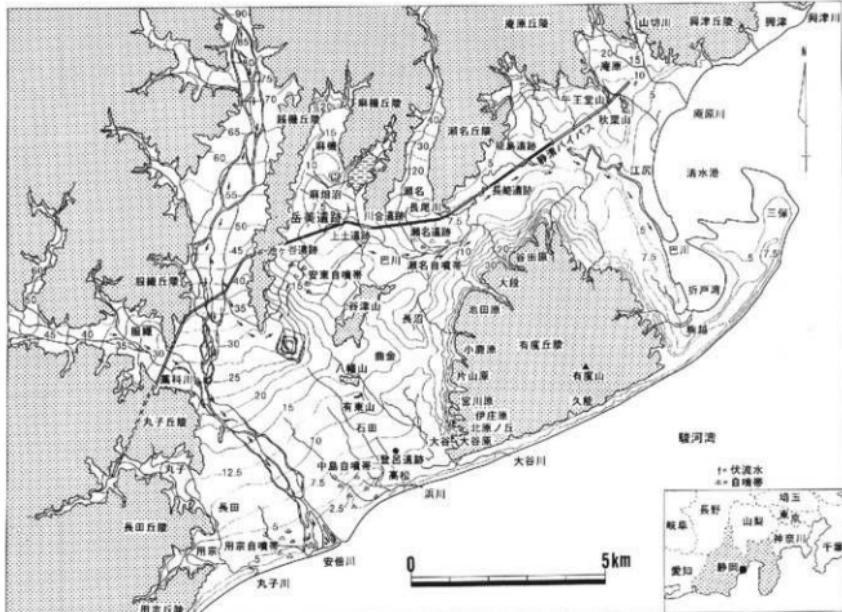
## 第2節 歷史的環境

岳美遺跡の調査の主な対象となる築合期の条里型本田を中心として概観してみたい。

条里とは、田令に基づく耕地管理を行うために8世紀に全国に施行された地割り制度である。当時の田地は条里制によって1里を36町、1町を10反、1反を360坪に分けて方形に整然と土地を区画していた。

まず条里というと班田収授との関連が想起される。しかし、最近ではこの関連において新説も出てきている。「条里」「坪」などの条里呼称法による土地表示の具体例は、現在のところ743年の山背国久世郡弘福寺領の例が初見である。ところが班田収授のほうは、最初の実施が652年であり、692年には6年ごとに班田を行うシステムが開始されていた。つまり、班田収授は、90年ないし50年もの間条里呼称法なしで実施されていたことになる。したがって、班田収授と条里呼称法は、本来別々の起源と契機ないし目的を有したものであったことになる。条里地割りや条里呼称法の両者、あるいはそれが一体となった現実的、もしくは現実にあるべき実態を金田章裕氏のように「条里プラン」と呼ぶとすると、条里プランが完成する直接の契機となったのは、723年の三世一身法、743年の整田永年私財法の施行により、私有地である整田が急増したことによると考えられている。というのは、6年ごとの班田の際にすべての田を再確認・再配分することが原則であった時期においては、

条里プラン



第1図 遺跡周辺地形図（「静岡・清水平野の弥生時代」1988年　登呂博物館に加筆）

行政上の大きな混乱は発生しなかったものであろうが、墾田を認可するとなると、それが従前の口分田でないことを確認しなければならず、また一旦認めた以上、それを正確に記録して、次の班田と混同しないように明確な峻別が必要となる。このような状況に対応して完成したのが「条里プラン」であったと考えられている。

**条里の分類** 次に、条里を分類してみると施工時期、施工領域、遺存状態などにより4つの類型に分けられる。第1は、現代まで表土として残されている近世・近代の条里型地割りと、地下に隠されている近世・中世あるいは古代の条里型地割りとに分けるものである。前者を表層条里、後者を埋没条里と称する。第2は、一郡あるいは複数郡を貫通する基準線により施工される広域条里と、一郡内の狭小な地域ごとに施工される狭域条里とに分けるものである。第3は、8~10世紀ごろまでに施工された古代条里と、11世紀ごろに莊園の開発により施工・再施工された莊園制期の条里、中世以降にそれらを踏襲して、施工・再施工された中世・近世条里がある。第4は、東海道などの古代直線道を基準線として測設され、さらには直線郡境も条里界線と一体に設定される条里がある。

**静岡の条里** これらの諸類型に従い静岡の条里をながめてみると、静岡平野では耕地整理以前に、広域条里が表層条里として残されていたことがわかる。この広域条里は、静岡平野北部の静清平野地区では南北方向の大畦畔の主軸方位がN38°~39°Wの方向性を持っている。そして同じような方向性を持つ埋没条里が瀬名遺跡、川合遺跡、城北永ヶ島遺跡、池ヶ谷遺跡で次々と発見されている。この地割りの方位は静岡から清水へ貫通する東海道を基準線として設定されたものと推定される。条里型水田である池ヶ谷遺跡1/2区DⅢ層水田では、南北方向の大畦畔中から838年噴火の神津島天山上山火山灰が発見された。この火山灰と出土土器により1/2区DⅢ層水田は9世紀まで遡ることが明らかになった。ところで川合、瀬名地区では表層条里のほぼ直下に埋没条里が発見されたのに対して、池ヶ谷地区では、埋没条里の方向が表層条里より15°程ズレて検出された。つまり、池ヶ谷地区的表層条里は安倍川扇状地を北流する安東川が形成した池ヶ谷自然堤防上に立地し、N36°Eに方格線の長軸をもつ2列配置の条里地割りである。この理由は次のように考えられている。平安期に条里型地割りが施工された後に洪水により約2m埋没し、池ヶ谷自然堤防ができると、条里型水田の復旧方法として直上復旧が容易な地域と困難な地域とに区分されたと考えられる。安東川からの灌漑水路を復元するには、池ヶ谷自然堤防の起伏は障害となり、実際には、自然堤防の長軸に坪界線の方向を一致させた坪配列を施工し、その他の部分では直上復旧が原則として行われたと考えられている。

**池ヶ谷地区の埋没条里** 最後に、川合遺跡内荒地区から発見された掘立柱建物群や、これを区画している杭列・柵列などの官術的遺構も条里型地割りの方向にのっている。なお、この内荒地区からは9世紀の直交する古道遺構が発見されているが里界線を利用したものと推定されている。

**川合遺跡内荒地区** 最後に、川合遺跡内荒地区から発見された掘立柱建物群や、これを区画している杭列・柵列などの官術的遺構も条里型地割りの方向にのっている。なお、この内荒地区からは9世紀の直交する古道遺構が発見されているが里界線を利用したものと推定されている。

#### 参考文献

- ・矢田 勝 「静岡平野北部の条里型地割りの復原と静清バイパス関連の池ヶ谷遺跡の発掘調査」『条里制研究第6号』1990
- ・栗野克巳 「条里型水田の確認と検討」『瀬名遺跡－平成元年度・平成2年度静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査概報－まとめ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991
- ・金田章裕 「条里地割りはいつできたか」『新視点日本の歴史古代編II』1993
- ・石上英一 「条里」『静岡県史・通史編I 原始・古代』1994

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

本調査は、昭和63年度から平成2年度に調査された池ヶ谷遺跡の東端を起点として、東へ延長約1,200mの範囲を調査対象としている。調査の目的が、条里型水田の坪界線の確認を主体としているため、あらかじめ周辺遺跡の調査で確認されている坪界鞋群から、調査対象地域内にかかるそれらの位置を推定し、トレンチ調査により確認した上で、調査区を設定している。そのため、D層上面・D層下面で延べ15,680m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

調査区は、坪界線の軸線を単位として16区画に分割し、西より1区・2区……の名称を付した。また、調査区には10m×10mのグリッドを設定し、それらの呼称は、池ヶ谷遺跡の調査で用いた国土方眼座標のX=-110,950、Y=-10,600を基準に南から北にA・B・C……のアルファベット、西から東に1・2・3……の数字を付し、この組合せによってA1グリッド、B2グリッドとした。ただし南北方向については、Zのあとには、再びAを用いている。

検出した遺構は、大畦畔、流路、湧水施設等であるが、このうち大畦畔は遺構記号+調査区番号、流路・湧水施設は遺構記号に検出順位を付して登録した。図面記録は、遺構平面図、土壠断面図を1:20縮尺で作成した。遺構平面図は、原則として航空写真測量で行い、それを基に1:100縮尺の遺構全体図・地形図も作成した。写真記録は、6×7判・35mmモノクロ、35mmカラースライドの他、必要に応じて4×5判モノクロ、6×7判カラーネガ等を使用した。また調査工程記録用として35mmカラーネガを使用した。

なお、調査にあたってはプラント・オパール分析、花粉分析などの自然科学的調査を各専門分野の機関・先生方に依頼して実施した。

### 第2節 基本土層(第38図)

調査では、現地表面からE層までの土層堆積を確認した。

A層は灰褐色粘土層で、近世以後の水田を包括する。

A 層

B層は河川の氾濫による堆積層で、1~3区では砂または砂礫層で、東の調査区に行くに従ってシルトから粘土へと粒度が小さくなる傾向がある。

B 層

C層は灰白色シルト層で、粘性が弱く、下層では泥炭がラミナ状に見られる。B層同様、河川の氾濫による自然堆積層と思われる。なお、A~C層については観察が充分に成されおらず、表土として一括している調査区もある。

C 層

D層は大きく2層に分層している。D I・D II層は泥炭層で20~30cmの層厚を測る。上面では、D III層水田の擬似畦畔の高まりや、C層に伴う溝の痕跡と思われる凹みを検出している。D III層は灰褐色粘土層で1区寄りで下層に砂粒が見られる。条里型水田に伴う南北方向の大畦畔を9本、東西方向の大畦畔を6本検出している。E層との境では水田耕作土の根摺となる巻き揚げ痕跡が確認された。また、泥炭層あるいは耕作土中より伊豆神津島天上山の火山灰が確認された。

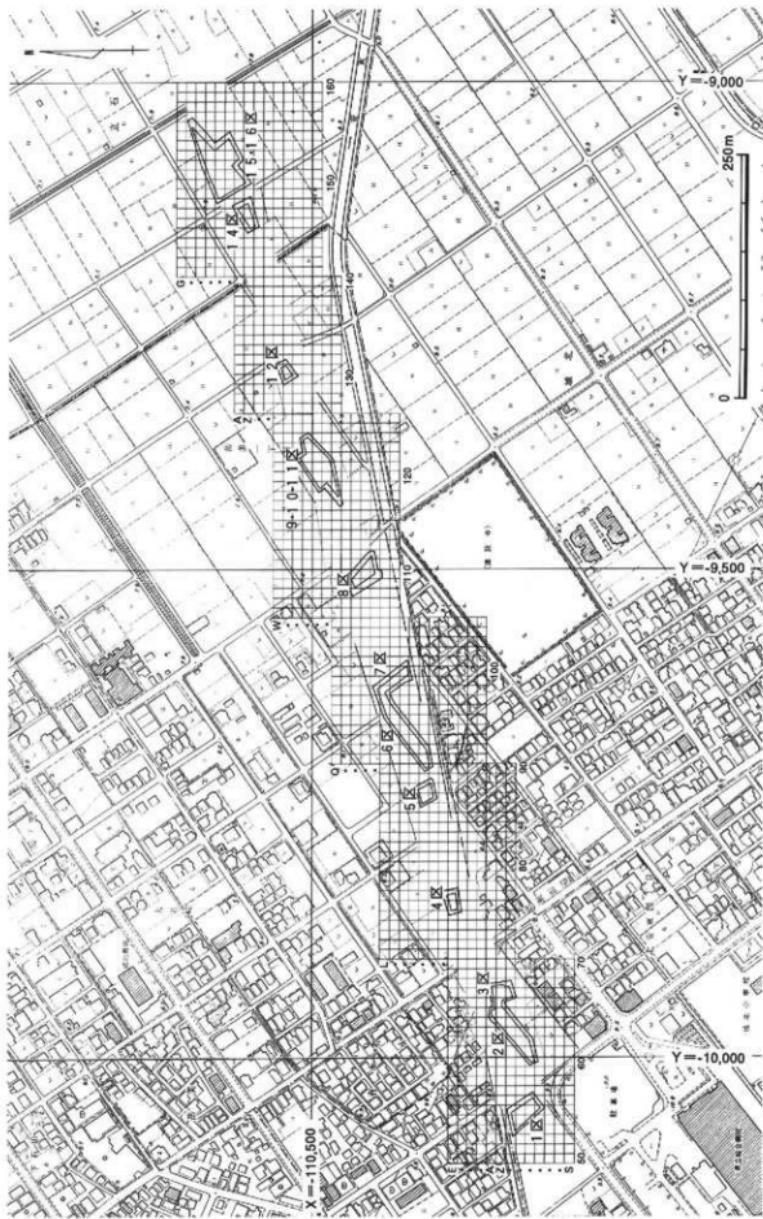
D I・II 層

D III 層

E層は自然堆積による砂~シルト~粘質土層である。細かく見ると1区寄りでは砂層であり、東に行くに従い粘性の度合いが増し6区以東では粘土層となっている。

E 層

第2図 グリッド地図



### 第3節 調査の経過（第1表）

岳美遺跡の発掘調査は、平成4年4月1日から平成5年10月31日まで2年次にわたって行われた。

以下年次ごとに調査の経過を述べることにする。

#### 平成4年度の調査

4月に入り、発掘準備を始めた。ベルトコンベヤー及び水中ポンプ等の発掘器材の調達・搬入、作業員棟の設営、ガードフェンスの点検及び補修、水路・側溝等の清掃、発掘補助員の面接などを行った。なお、本部棟は、池ヶ谷遺跡事務所を使用することとした。

静清バイパス建設工事の関係上、1～4区の調査を早めに完了しなければならない時間的制約があるため、4区画の調査を一括して行う事になり、4月20日に掘削を開始した。排土の搬出工程上、3区からトレーナーにより大畦畔の位置を確認して、調査区を設定し、表土除去を開始した。5月中旬までに2・3区の表土除去を終了した。引き続き、D I層検出に入り、5月下旬に終了し6月からD III層検出に入った。7月に入り、大畦畔解体、E層検出を行い、9月下旬に調査を終了した。

4区は、5月に入り表土除去を開始した。調査区全体に厚さ1m強にもおよぶコンクリート基礎が存在するため、ジャイアントブレーカによる除去作業に5月中旬まで要した。5月下旬に表土除去が終了し、D I層検出に入った。6月中旬からD III層検出に入り、6月下旬から大畦畔解体、E層検出を行い、9月下旬には調査を終了した。

1区は、5月中旬に北端と南端に東西方向のトレーナー2本を設定し、大畦畔の位置を確認して調査区を設定し、5月下旬に表土除去を開始した。6月初旬に表土除去を終了しD I層検出に入った。6月中旬からはD III層検出に入り、7月上旬には大畦畔解体、E層検出に入っていた。そして9月上旬に調査を終了した。

このように1～4区は、6月から7月にかけての長雨にたたられ、工程はやや延滞気味になってしまったが、9月中には、無事調査を終了した。

5～8区の掘削作業は、8月中旬より行った。この地域は、約3mの盛土により覆われていたため、安全を考慮し、まず盛土を除去し、引き続き表土除去を行うという2段階の工程で行った。排土処分地が富士市の為、やや掘削に時間を要した。

8区の盛土・表土除去は、8月中旬より開始され、10月中旬に終了しD I層検出に入った。10月下旬にはD III層検出に入り、11月上旬に大畦畔解体、E層検出に入った。最終的に遺物平面実測及び土層セクション図の実測を含め作業が終了したのは1月中旬であった。

7区は9月上旬に盛土・表土除去を開始し、10月中旬に終了した。そして、D I層検出、D III層検出、大畦畔解体へと進み、12月上旬で終了した。なお6区の東西方向の大畦畔との交点を検出するため、北側拡張部分の調査を12月より開始した。



ガードフェンスの補修



表土除去



遺構検出



航空写真測量



トータル・ステーションによる記録



現地見学会



水路整備



土層断面剥ぎ取り



ウレタン細包による遺物取り上げ

5区、6区は10月中旬から盛土・表土除去を開始し、11月下旬に終了した。12月に入り本格的な調査に入り、2月に調査を終了した。

なお、12月より、9～16区の表土除去、工事用道路の造成、フェンス仮設を始めた。そこで、本部棟である池ヶ谷事務所は、現場から遠く調査に支障をきたすことが多いため、岳美9区北側に建設した。9～16区は3月までに表土除去を終え、法面養生等を行った。

#### 平成5年度の調査

平成5年度の調査は、現地調査とあわせて、整理作業を本格的に実施する体制をとった。9～16区における表土除去は、既に前年度に完了しており、14～16区は法面養生及びトレンチ掘削まで完了している。また、14～16区では地盤が非常に軟弱な状況に加え、4～8区の工事用車両が頻繁に通過するためか、15・16区の西側法面や14区東側法面が4月下旬に相次いで崩落したため、バックフォーによる法面養生を行った。

14区の調査は、4月上旬から中旬にかけD I層検出を行った。5月上旬から6月初旬にかけD III層検出を行い、7月中旬から8月中旬を中心に自然流路の解体が行われた。実測は、9月中旬から下旬にかけて行われた。

15・16区は、やはり4月上旬から中旬にかけD I層検出を行った。5月上旬から6月上旬にかけD III層検出を行い、7月中旬から8月上旬にかけ大畦畔を解体し、その後10月いっぱいまで実測がかかった。

9～11区は、4月中旬から下旬にかけD I層検出を行い、5月下旬から6月初旬にかけD III層検出を行った。盆休み明けの8月中旬から9月の初旬にかけ大畦畔の解体を行い、引き続き実測は10月中旬に終了した。

12区は、4月中旬から下旬にかけD I層検出を行い、5月下旬から6月初旬にかけD III層検出を行った。大畦畔の解体及び実測は9月中をかけて行われた。結局、解体作業は5月中旬から7月中旬の天候不順と9月上旬の台風の影響で長引き、作業完了は10月下旬まで要してしまった。この間、雨天時には、草刈り、水路整備など各調査区周辺環境整備も実施した。

10月15日より岳美事務所の下野整理事務所への引っ越し作業に入り、10月20日にプレハブを撤去した。下野整理事務所においては、航空写真測量による図面の校正、遺構の検討などを行い、本報告書の作成に向けての整理作業を開始した。

## 第3章 各調査区の概要（遺構と遺物）

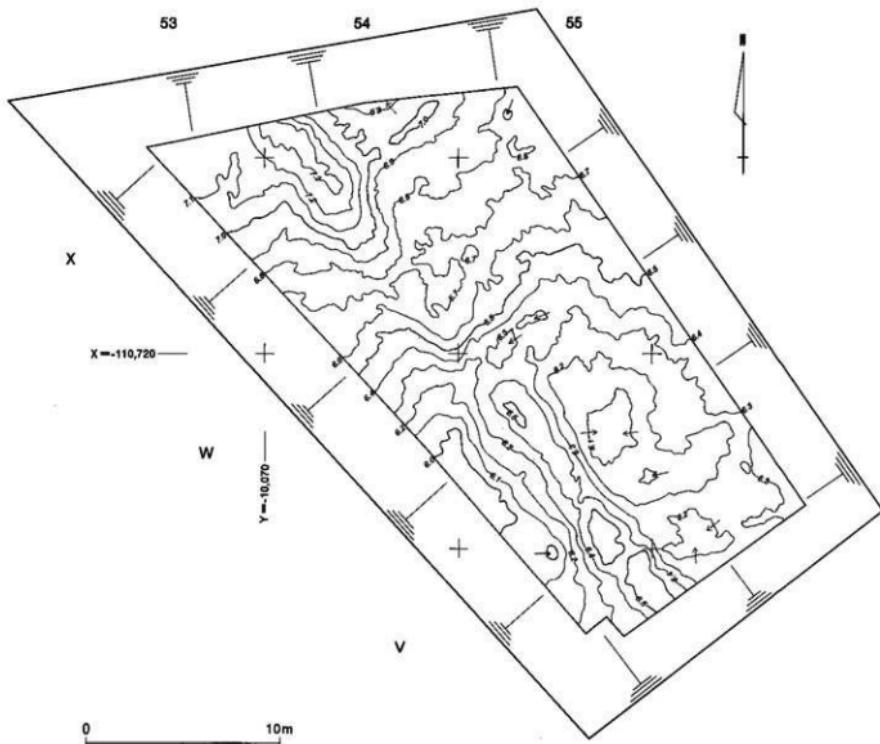
### 第1節 1区（第3～5図、図版1～4）

調査途中、中近世から近現代にかけての複数の河道の存在が土層断面より確認され、著しい湧水が見られた。

D III層水田は、標高6.9～5.8mで北西から南東へ傾斜している。細かく観察すると、Y 53グリッドが約6.9mと高く、W 55グリッドの西部が約5.8mと低くなっている。SK-1はN39°Wの南北方向の大畦畔で、検出長約31.0m、下端幅2.5～4.5m、上端幅1.1～2.5mで、田面との比高差は20～45cmを測る。調査区北東部にあたるY 55グリッド付近は、6.6～6.7mとまわりより比較的高くなってしまっており、大畦畔と連結し、直交する小畦畔の存在が確認できた。

D III層水田

小 畦 畔

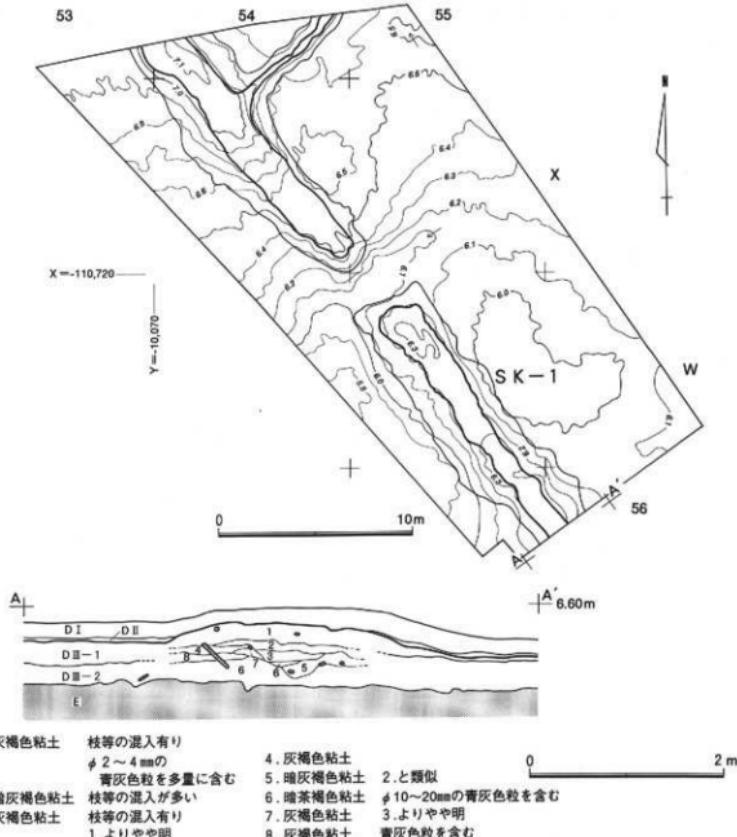


第3図 1区 D I層上面地形図

水 口 さて、大畦畔の中央部にあたるX55グリッド杭付近は、畦畔が約2m切られており、標高も約6.1mと落ち込んでいる。この部分からは大きめの木の枝などが出土していることから、北東側から南西側にかけての供給を主とした用水の関係が考えられる。ただし、水路などの灌漑・排水施設は検出されていない。

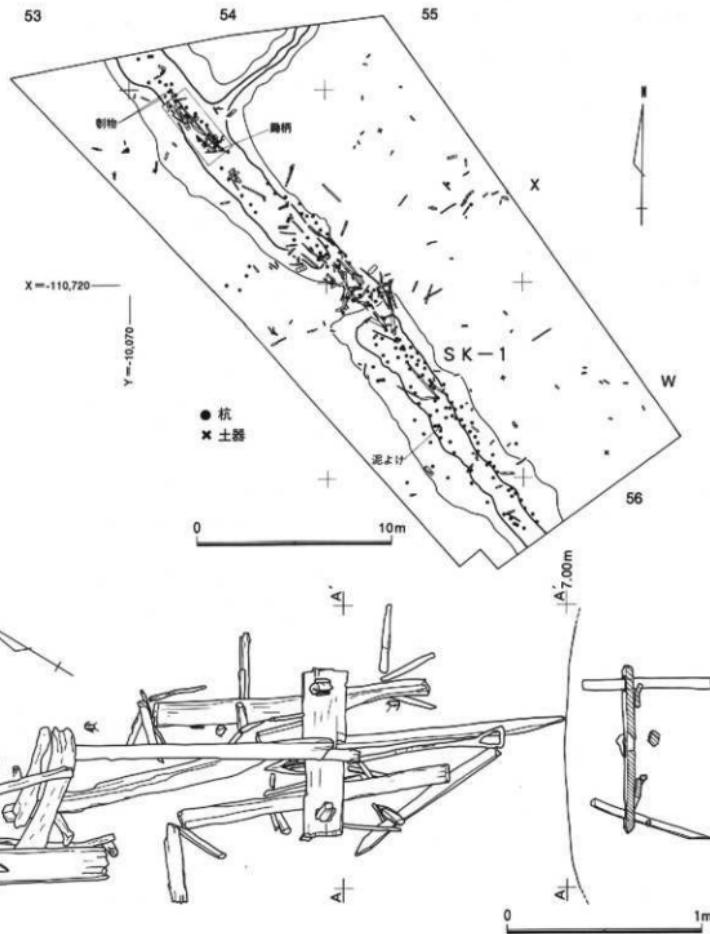
**畦畔の補強** 大畦畔の解体に伴って、杭列が検出された。針葉樹と広葉樹の2種類の杭によって密になって補強されているのが確認されたが、どちらかというと北部より南部に多い。杭列の間に、田下駄・鍬の泥除け・鋤等の農具や建築部材が補強材として組み合った状態で確認

**強固な補強** された。なかでも、北側の一部には、縦約20cm、横約90cm、厚さ約5cmの板材に2ヶ所の枘孔を穿孔し、そこに杭を打ち込み大畦畔をより強固に補強する工夫が成されていた。補強材として使用されたものは田下駄・鍬の泥除け・鋤等の農具類を含め500点程出土し、当



第4図 1区D III層上面構造全体図

時の農耕生活の一端を確認できる資料といえる。また、出土した農具の中で注目されるものは、田下駄である。他の調査区と比べ最も出土が多く目を引く。また、杭の数も他の調査区と比べ突出して多く、頑強に補強されている。これは、特に軟弱な地盤の部分に畦畔が構築されたためであると思われる。



第5図 1区口III層内遺物出土状態図

## 第2節 2・3区(第6~8図、図版5~9)

**2区DⅢ層水田** 2区におけるDⅢ層水田は、標高6.6~6.0mで概ね北東から南西に傾斜している。細かく観察するとSK-2を挟んで北側と南側では若干の段差があり、盛土部分も何ヶ所かで切れている部分が認められる。これらの箇所は北西から南東への水口の可能性がある。SK-2はE40°Nの東西方向の大畦畔で、検出長約63.0m、下端幅1.8~4.0m、上端幅1.2~2.7mで、田面との比高差は21~39cmを測る。

**畦畔の補強** 大畦畔の解体作業の結果、杭列等の補強材は殆ど見られず、盛土内からも、田下駄・えぶり等の農具は数える程しか出土しなかった。しかし、南北方向の大畦畔との交差点に近い3区寄りのZ65グリッドでは杭による補強が若干見られる。

**3区DⅢ層水田** 3区におけるDⅢ層水田は、標高6.8~6.4mで北東から南西に傾斜している。SK-3はN38°Wの南北方向の大畦畔で、検出長約19.8m、下端幅2.5~6.3m、上端幅1.4~5.2mで、田面との比高差は15~39cmを測る。Z66・67グリッドでは、盛土の中央部が10~20cm陥没している状況が見られる。この部分は後述する湧水施設の上層部にあたり、その影響によるものと思われる。また、Z67グリッドでは大畦畔と連結して北東方向に延びる小畦畔を検出している。

**畦畔の補強** 大畦畔は、針葉樹と広葉樹の2種類の杭によって二条に補強が成され、杭列の間には田下駄や板材、矢板等の補強材が確認された。しかし、SK-1に比べ杭間が広く、殆どが50cm前後で1mを越える杭は数える程しかない。

**杭列** Y67グリッドでは大畦畔の主軸とは異なりほぼ東西方向に延びる二条の杭列が検出された。12本の杭が確認され、うち9本は1mを越えている。大畦畔と小畦畔の接合部分を強化するための杭か、あるいは条里型水田以前の水田畦畔の補強材として使用されたのではないかと考えられる。

**湧水施設** Z66グリッドでは大畦畔盛土下で湧水施設と思われる落ち込み(SX-1)を確認した。SX-1はE層を掘り込み、辺長は約4m×6m、深さ50cm程の隅丸長方形を呈する。覆土の土層観察から、この落ち込みを埋めてから大畦畔を構築したのではないかと思われる。自噴湧水構造とも考えられるが、条里型水田以前の水利施設の可能性も考慮される。なお、この部分の杭頭が他より低くなってしまっており、軟弱地盤のため沈降したものと思われる。

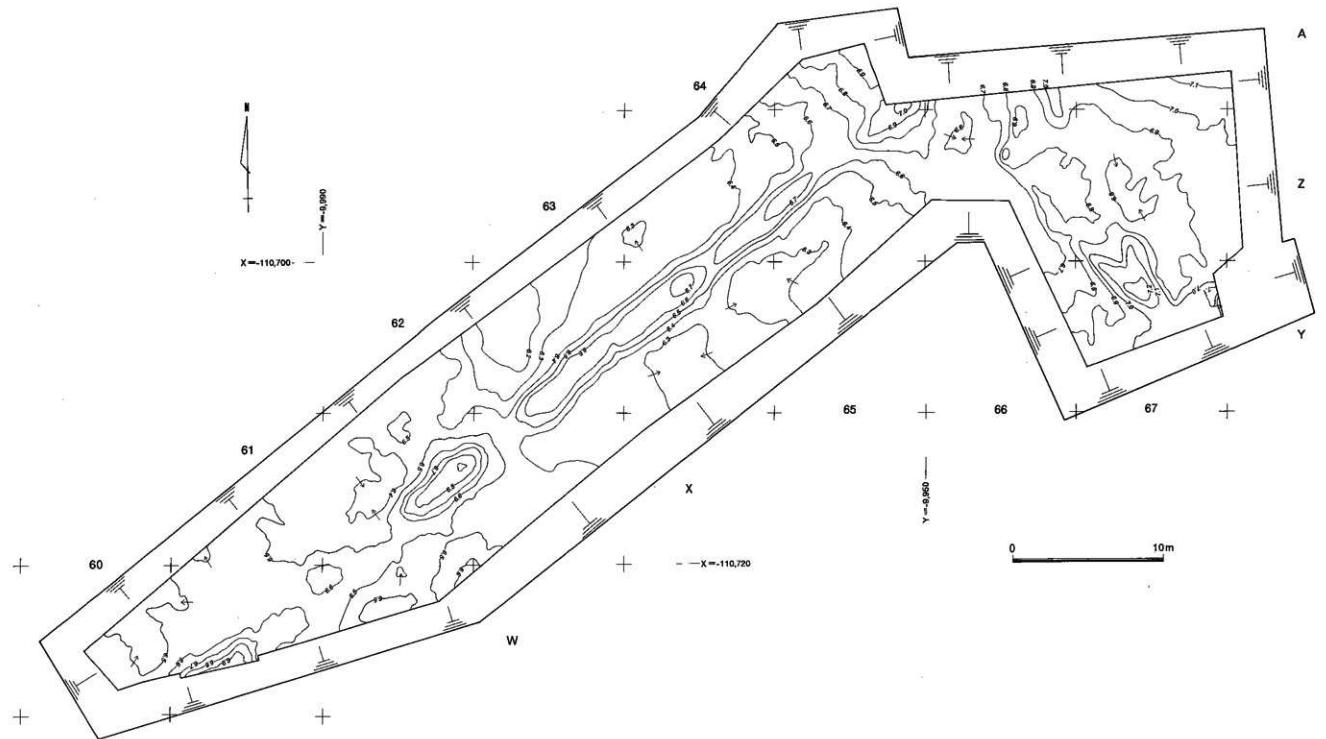
## 第3節 4区(第9~11図、図版10~12)

**擾乱の影響** 本調査区は、調査区全体に厚さ1m強にもおよぶコンクリート基礎が存在しており、表土から作土中にも産業廃棄物が著しく混入していたため、北東部とほぼ中央部の2ヶ所に擾乱坑があった。そのため調査の支障となり、遺構の把握が困難であった。

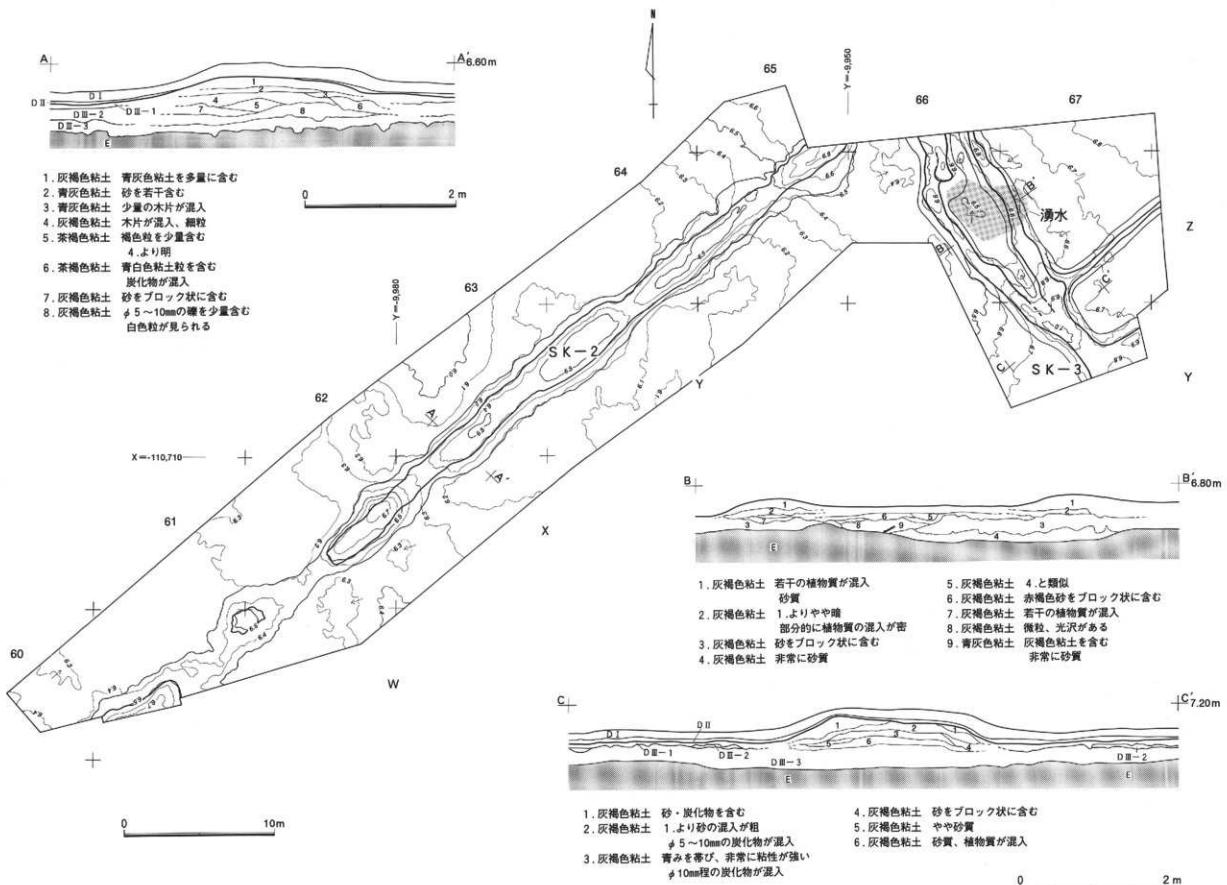
**DⅢ層水田** DⅢ層水田は、標高6.8~6.5mであり、全体的に南西から北東に向って緩傾斜している。SK-4はN32°Wの南北方向の大畦畔で検出長約3.5m、下端幅1.4~2.3m、上端幅0.6~1.2mで、田面との比高差は7~15cmを測る。中央部分は擾乱と土壤によって著しく破壊されている。

**畦畔の補強** 大畦畔解体の結果、杭列は僅かしか検出されなかった。木製品も、他の調査区と比べ比較的少なく、農具類も殆ど出土しなかった。

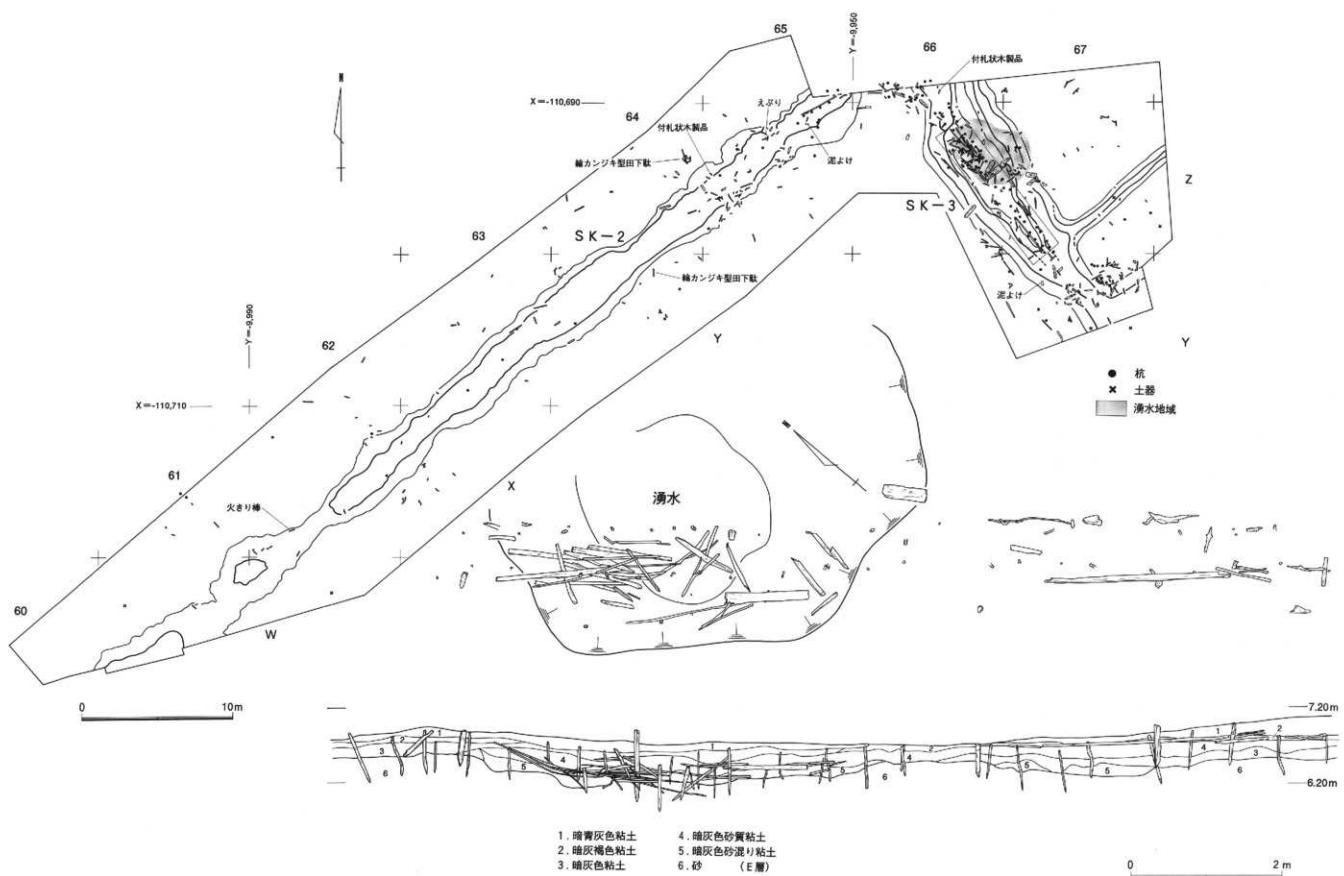
北側トレンチの土層観察では、大畦畔西側のDⅢ層上面下部で、植物繊維の混入が目立ち、この部分より火山灰も検出されている。一方、大畦畔の東側では見られない。これは、



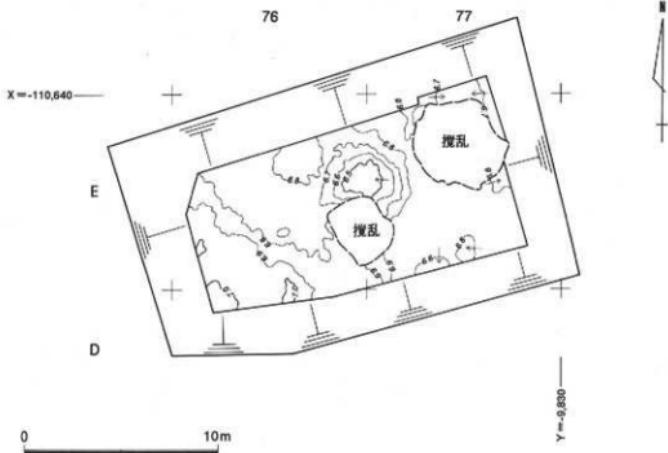
第6図 2・3区D I層上面地形図



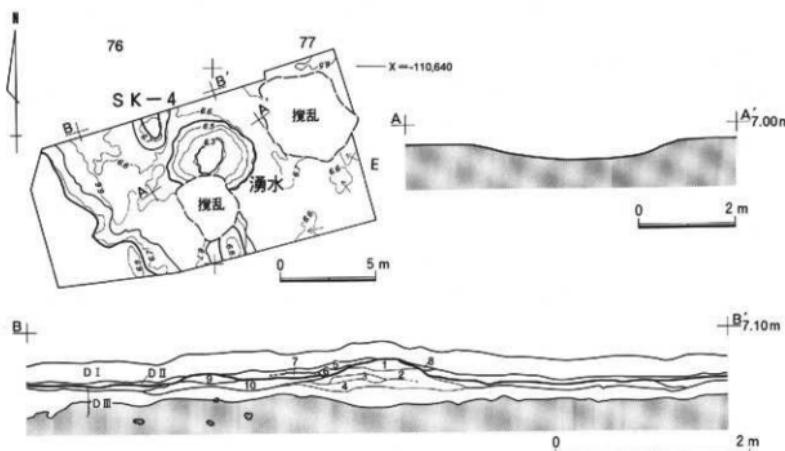
第7図 2・3区D III層上面遺構全体図



第8図 2・3区D III層内遺物出土状態図



第9図 4区D I層上面地形図



- |                                    |                                  |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1. 青灰色粘土 灰オリーブ色粘土を含む<br>木片・植物質が混入  | 6. 青灰色粘土<br>暗灰オリーブ色粒を含む<br>木片が混入 |
| 2. 灰オリーブ色粘土                        | 7. 緑灰色粘土                         |
| 3. 灰オリーブ色粘土 やや砂質                   | 8. 灰オリーブ色・暗青灰色粘土の混層<br>有機質を多量に含む |
| 4. 灰オリーブ色粘土 砂を多量に含む<br>2.よりやや明     | 9. 緑灰色粘土<br>砂粒を含む                |
| 5. 灰オリーブ色粘土 暗緑灰～緑黒色粘土を含む<br>植物質が混入 | 10. 暗青灰色粘土<br>砂を均一に含む            |

第10図 4区D III層上面造構全体図

東側では洪水により一気に粘土層の堆積で覆われたが、西側では一旦湿地化し植物纖維が堆積したものと考えられる。また湿地化した植物纖維の間に火山灰が残ったと考えられる。

なお調査区西側において、南北方向に田面の高まりが見られる。畦畔の一部である可能性も考えられる。

**湧水施設** また、E76・77グリッドの大畦畔盛土下から3区と同様な湧水施設と考えられる土壤（S X-2）を確認したが、やはりE層を掘り込み、一辺が約4m、深さ50cm程の隅丸方形で、覆土の状態等から、大畦畔構築前に人為的に埋められたのではないかと考えられる。自噴湧水施設とも考えられるが、条里型水田以前において水利施設としての役割を果たしたものとも考えられる。

#### 第4節 5区 (第12~15図、図版13~16)

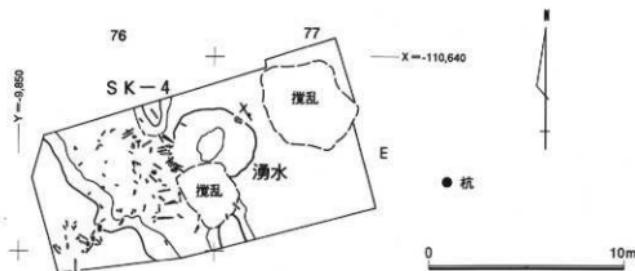
**D I 層上面** D I 層上面では、C層に伴うと考えられる7条の溝状遺構の痕跡が確認されたが、部分的にしか確認されなかったため、性格は明確にできなかった。これらの溝状遺構のうち、5条は擬似畦畔を切るかたちで検出され、切り合い関係から少なくとも2時期の溝の存在が明らかとなった。

**D III 層水田** D III 層水田は、標高5.5~5.3mである。北東隅と南西隅が低くなっている、中央の大畦畔部より緩傾斜している。SK-5はN39°Wの南北方向の大畦畔で、検出長約14.5m、下端幅2.1~2.4m、上端幅0.7~1.1mで、田面との比高差は19~29cmを測る。

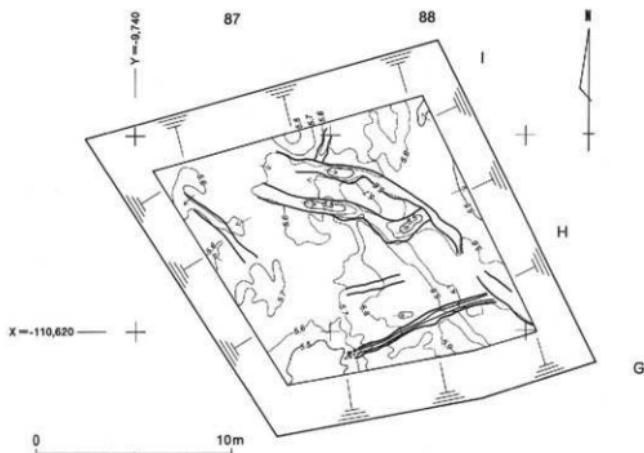
**水 口** H87グリッド北都付近に水口と考えられる畦畔の切り込みがある。この部分は、後述する流路の上層部にあたり、低い軟弱層であったため、水口として使用したと思われる。また、大畦畔中央付近より、南北方向に直交する小畦畔が検出された。

**小 畦 畔** 畦畔の解体 大畦畔解体の結果、調査区南端から約6.5mの範囲で補強材が多く確認された。杭は殆ど見られず、田下駄などの農具類や板材などが芯材として用いられている。これらの出土位置は盛土の検出位置より南西方向に若干ズレ、方向もN47°WとやはりSK-5とは異なっている。また、杭頭や芯材の標高が盛土上面より20~30cmも低いことを考え合わせると、当該時期よりも古い時期の畦畔に伴う補強材である可能性も考えられる。

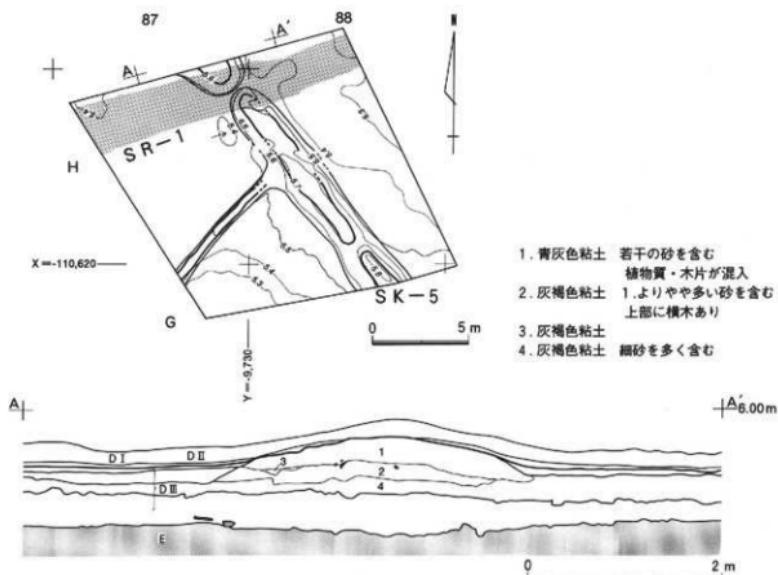
**S R - 1** トレンチの土層観察により、調査区北側のD III 層下部で砂混じりの層がレンズ状に落ち込んだ部分が明確になったが、調査の結果、流路（S R - 1）であることが確認された。S R - 1は、調査区北側に位置する東西方向の流路で、検出長約14.4m、上端幅2.0~2.5m



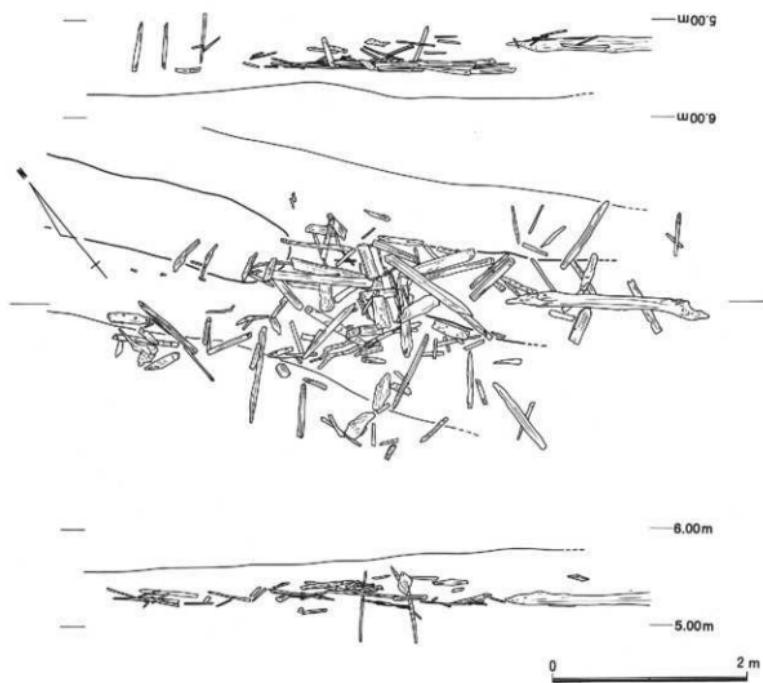
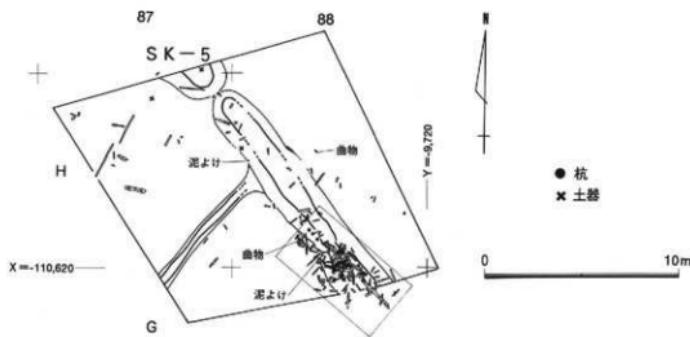
第11図 4区D III層内遺物出土状況図



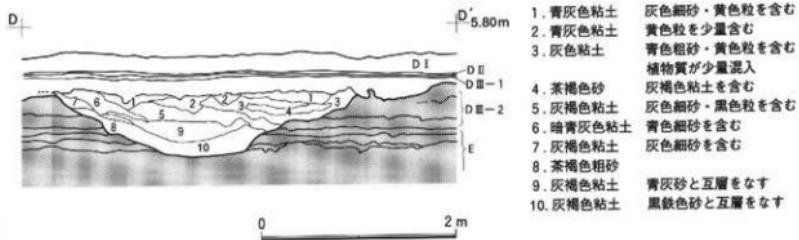
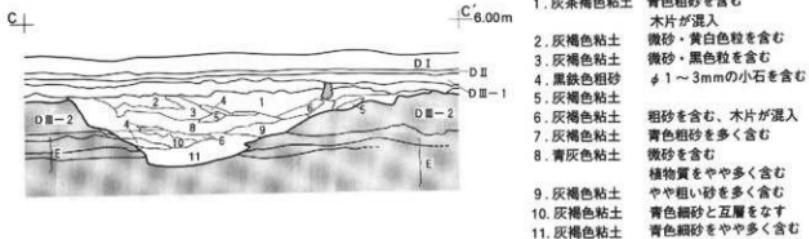
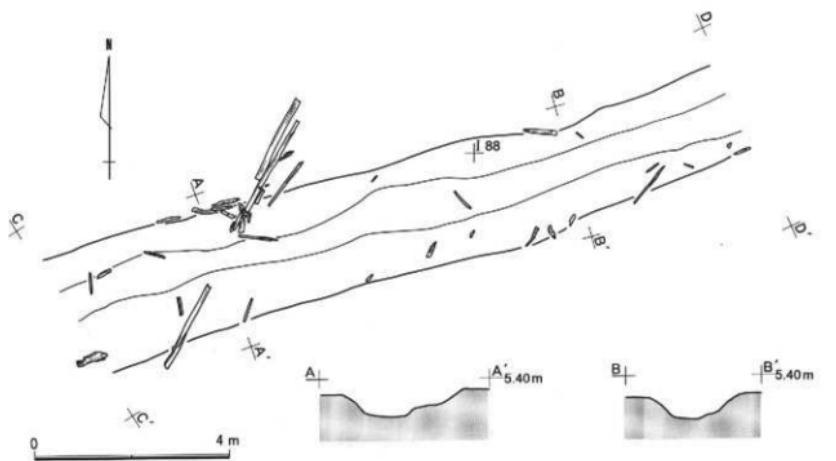
第12図 5区D I層上面地形図



第13図 5区D III層上面造構全体



第14図 5区D III層内遺物出土状態図



第15図 SR-1 実測図

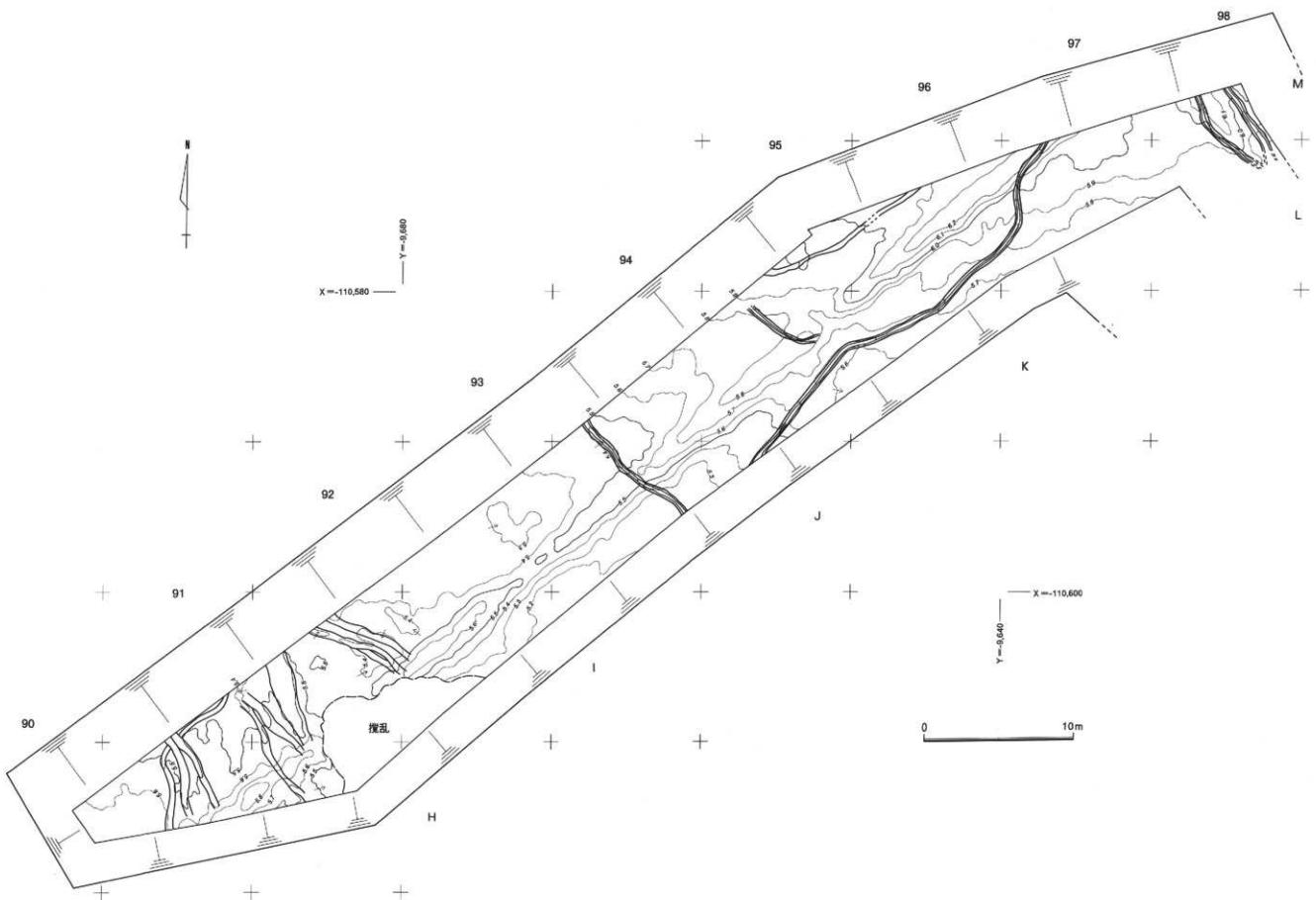
で、深さは40~50cmを測る。D III層下層で確認されており、下刻面は耕作土の攪拌により明確にはできないが、D III層水田より古い時期の流路と考えられる。その他の性格については伴出遺物が希少なため不明である。

## 第5節 6区 (第16~18図、図版17~19)

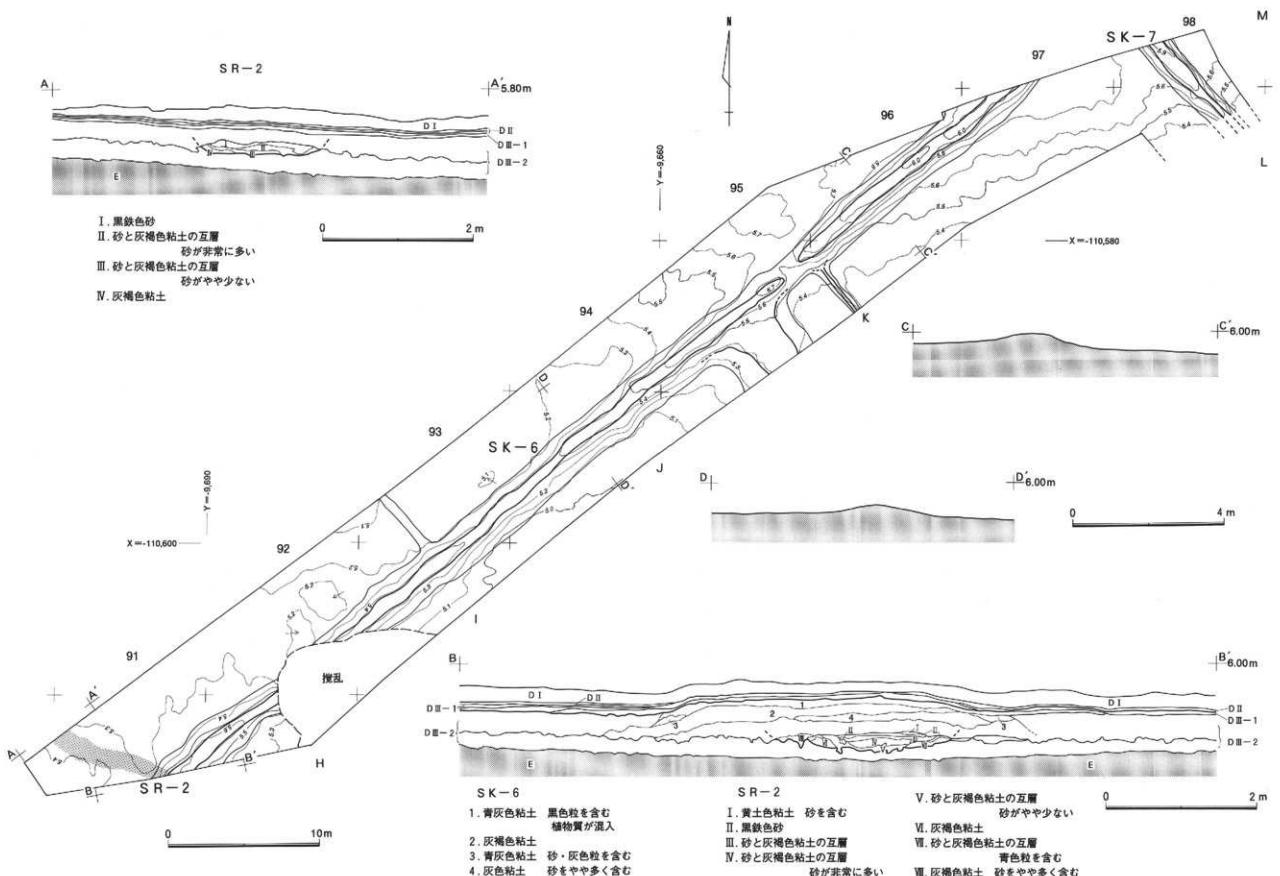
- D I層上面 D I層上面では、C層に伴うと考えられる溝状遺構の痕跡が13条確認された。このうち10条は擬似畦畔を切っており、調査区の南西においては溝どうしが複雑に切り合っている。いずれの溝も伴出遺物が確認されていないため、性格は明らかではない。
- D III層水田 D III層水田は標高5.7~5.0mで、調査区北東側が高くなっている。SK-6は、E40°Nの東西方向の大畦畔で、検出長約61.5m、下端幅1.8~3.0m、上端幅0.5~1.1mで、田面との比高差は18~51cmを測る。北東部のL97グリッドでは、二条の杭列とそれらの間に數き詰められた木の枝による補強の状況が確認された。このような状況は、他には隣接する7区の北側部分で見られるのみであり、他の畦畔の補強状態とは異なった在り方を示すものである。L96グリッド杭のやや南で畦畔が切れているが、水口かと考えられる。田面の標高をみると、SK-6の北西側が南東側に比べて若干高いことから北西から南東に向って水の供給が行われていたと思われる。
- 小 畦 畦 大畦畔と直交する小畦畔がJ93グリッドから北西方向に、K96グリッドから南東方向にそれぞれ1本ずつ検出された。また、K95グリッドではSK-6と直交し南東方向に延びる下端幅約5.5m、高さ約10cmで上面が比較的平坦な畦畔状の高まりを検出したが、性格など詳細は不明である。
- 火 山 灰 の 検 出 状 況 神津島火山灰が5区寄りの部分では、D II層あるいはD III層中及びD III層直上で、7区寄りの部分では、D I層あるいはD II層直上で確認されていることから6区のどこかで変換点が存在することは確かである。土層観察ではI93グリッド付近で入り乱れており、攪乱が存在するため明確にはできないが、ほぼこの部分と考えられる。
- S R - 2 また、調査区西端のH91グリッドでは南北方向の流路(SR-2)が検出された。SR-2は検出長約7.3m、上端幅1.0~1.4m、深さ16~26cmで、D III層下層から確認されており、下刻面は耕作土の攪拌により明確にはできないがD III層水田より古い時期の流路と考えられる。調査区の関係上、一部分のみの検出で伴出遺物も殆どないため性格は不明である。

## 第6節 7区 (第19~21図、図版17・20・21)

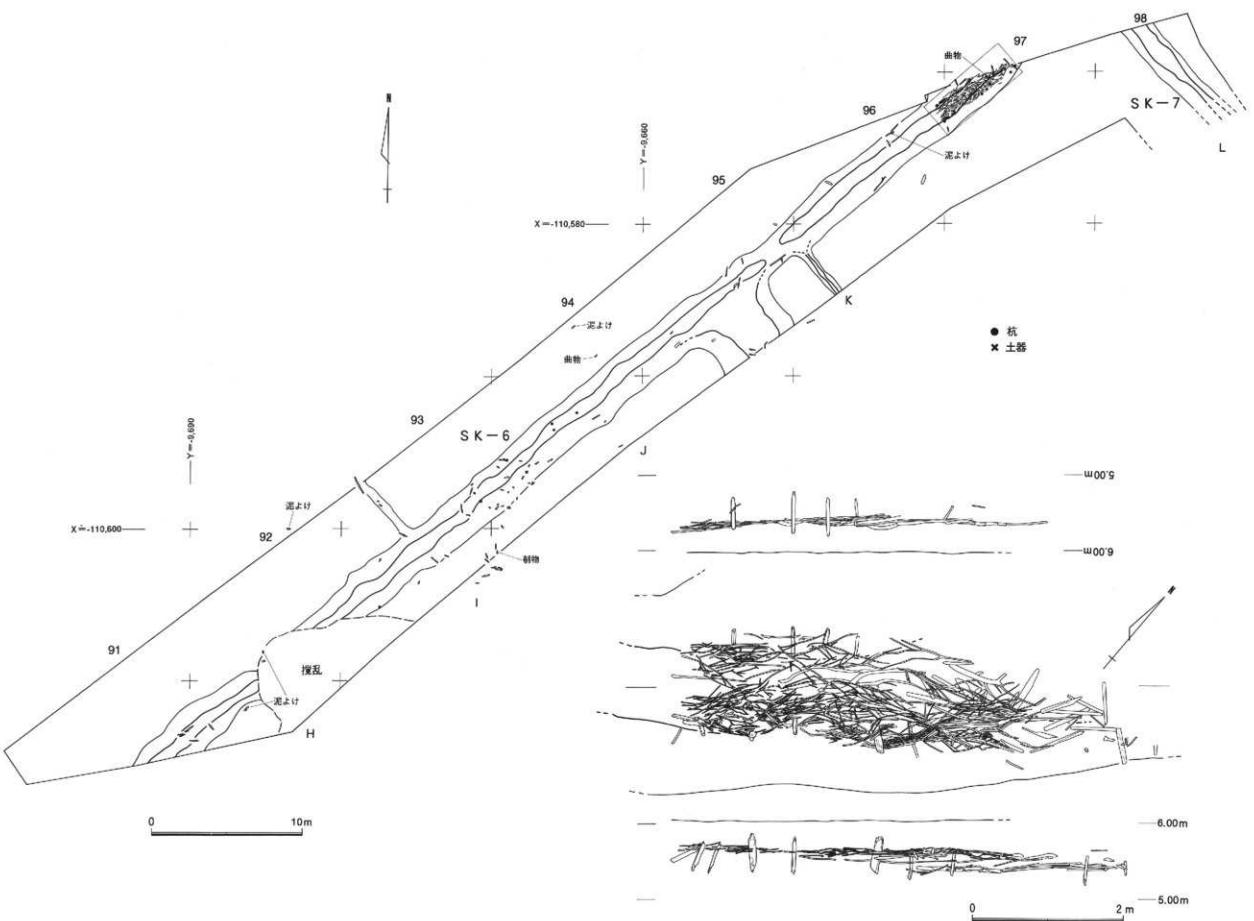
- D I層上面 D I層上面では、C層の溝の痕跡と思われる溝状遺構が擬似畦畔を切るかたちで10条検出された。これらの溝は複雑に切り合っており、少なくとも4時期のものを確認している。このうちL98・99グリッドで検出された溝は杭列を伴っている。これは、水路として使用されたのではないかと考えられる。
- D III層水田 D III層水田の標高は5.7~5.0mである。SK-7はN38°Wの南北方向の大畦畔で、検出長約28.7m、下端幅1.9~2.5m、上端幅0.4~0.9mで、田面との比高差は20~31cmを測る。
- 水 口 畦畔上面は北側が弱冠高く、北から南へ緩傾斜している。調査区中央部にあたるK99グリッドで盛土が切られており、水口と考えられる。
- 畦畔の補強 大畦畔解体の結果、補強状況にムラがみられ、調査区南側と北側で密になっている。細かく観察すると、南端より10m程は二条の杭列の間に田下駄や板材、矢板等を補強材として用いた状況が確認された。杭列はD III層上面に杭頭が出ているものが多い。それより北



第16図 6区D I層上面地形図



第17図 6区D III層上面造構全体図



第18図 6区D III層内遺物出土状態図

側は、二条の杭列も疎らになり、長さ2m程の細い棒状の割板材を密集させて補強した部分や、長さ3m程の横板のみの部分、補強材を殆ど使わず土盛のみで構築している部分となっている。最も北側の部分の杭列はDIII層内より検出され、杭の間にはSK-6と同様に木の枝が敷き詰められた状況が確認された。

J100グリッドで大畦畔の盛土の中より、翼状木製品が出土した。これは、もぐら骨しではないかと考えられるもので、羽の部分が軸木に着装された状態で発見された。羽根の片側の一部は欠損しているものの、ほぼ完形品である。羽根の部分の復元長約38cm、軸木の全長42.8cmである。また、K99グリッドの大畦畔の盛土中からは、輪カンジキ型田下駄の輪の部分と、横板・足板がセットで出土している。

翼状木製品

輪カンジキ  
型田下駄

97

+

98

+

M

+

L

K

J

$X = -110,580$

● 杭

$Y = -9,650$

0

10m

99

100

101

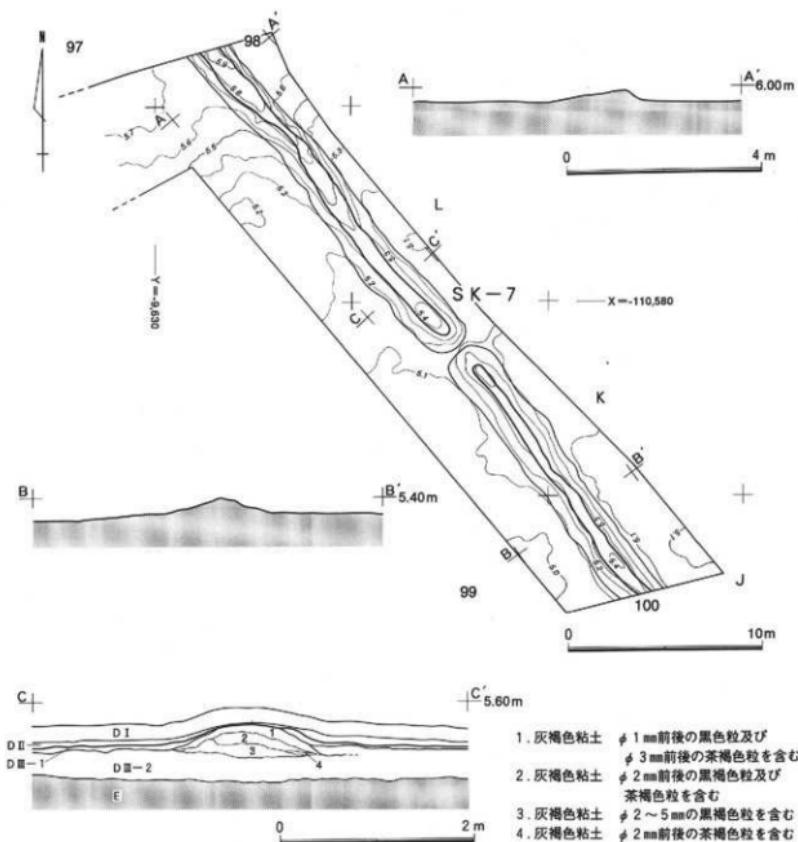
第19図 7区D I層上面地形図

## 火山灰の検出状況

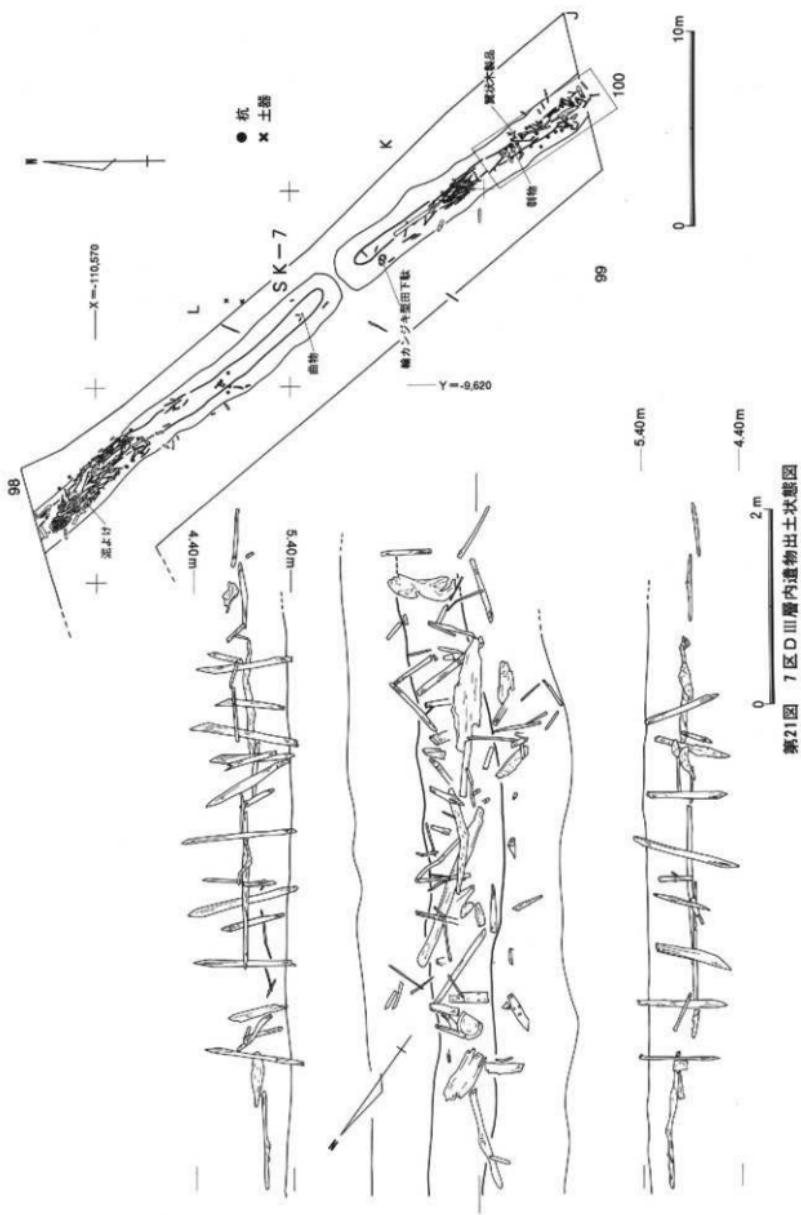
D I・D II層の泥炭層下部より大量の火山灰（層厚約5mm）が検出された。火山灰は調査区全面より検出されたもので、池ヶ谷遺跡や岳美遺跡の他の調査区では、畦畔の盛土の中等に、ほんの僅か検出されただけだったのに比べて、極めて特徴的な検出であった。また、水田耕作土の上の泥炭層の中から火山灰が検出されたことは、興味深い資料である。これは、7区付近が、当該時期においては湿地化が進み、泥炭が充分に発達していたと考えられる。つまり、838年の火山灰が降った段階において、既に水田が廃絶していたと考えられるものである。

## 拡張部分の調査

なお、北側拡張部分の調査で、D I層上面で南北方向の溝状遺構2条が、D III層上面ではSK-7の延長部分が確認された。



第20図 7区D III層上面遺構全体図



第21図 7区 D III層内出土物出土状態図

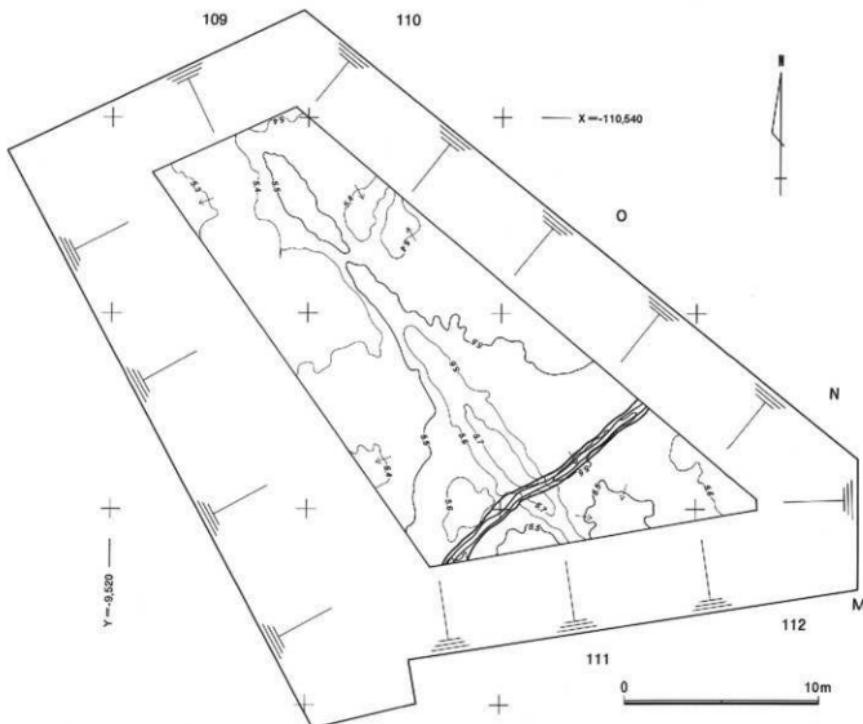
## 第7節 8区(第22~24図、図版22~24)

**D I 層上面** D I 層上面では、C層の溝の痕跡と考えられる凹みを検出した。この痕跡は調査区の南端に位置し、検出長約13.5m、上端幅約50cmで、深さは10~15cmを測り、擬似畦畔の高まりを乗り越えるかたちで存在していた。

**火山灰の検出状況** D III層水田検出途中、7区同様に泥炭層下部より火山灰が検出されたが、層厚は2~3mm程で、量的には7区よりもやや少ないが、他の調査区よりはるかに多い。やはり、7区同様泥炭の発達が進んでいたものと考えられる。

**D III層水田** D III層水田は標高5.4~5.0mであり、南東から北西に傾斜している。SK-8はN39°Wの南北方向の大畦畔で、検出長約26.9m、下端幅1.3~2.2m、上端幅0.5~1.0mで、田面との比高差は12~28cmを測る。大畦畔を挟んで西側と東側にそれぞれ1本ずつ、ほぼ直交するかたちで小畦畔の痕跡を検出した。西側で検出された小畦畔は、検出長約5.0m、下端幅約50cm、田面との比高差約5cmで大畦畔との連結部分は検出されなかった。大畦畔と切

**水 口** れているということは、水口の可能性がある。一方、東側の小畦畔は、検出長約3.0m、下



第22図 8区D I層上面地形図

端幅約30cm、田面との比高差約4cmで、こちらも大畦畔との連結部分は検出されなかった。やはり、水口になっているものと考えられる。

なお、D III層検出の過程で、下駄などの木製品数点が出土している。トレンチの土層観察では、D III層の下部には、10cm以上にわたって水田耕作の痕跡であるE層の土塊や粒子の巻き揚げが見られ、これは、大畦畔や小畦畔の直下においても観察された。このことは、これらの付近でも、条里型水田以前にも水田耕作が行われており、条里制に基づいて、大畦畔として作り換えた証拠といえる。

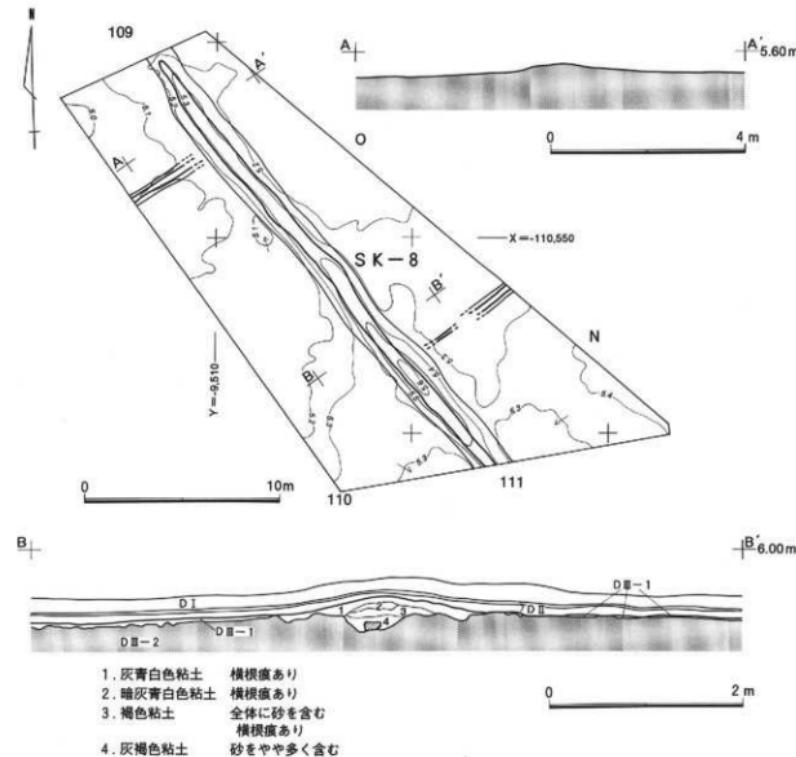
D III層水田の解体では、南北方向の大畦畔の杭列は、北側部分の約10mで二条に打ち込まれ、杭列の間には、馬鍬・田下駄・板材及び矢板等を補強材とした状況が確認されたが、南側は杭列及び補強材を殆ど使用せず、粘土を盛り上げた状態で構築されていた。

O 110グリッドの大畦畔の盛土中から出土した馬鍬は、長さ1.2mの横木（台木）を南北方向に置き、刃を西に向かって杭列の間に置かれていた。長さ15cmから25cmの木齒11本を約10cm間隔に穿けられた台木の納孔に差しこみ、横木の両端には、牛馬に引かせるた

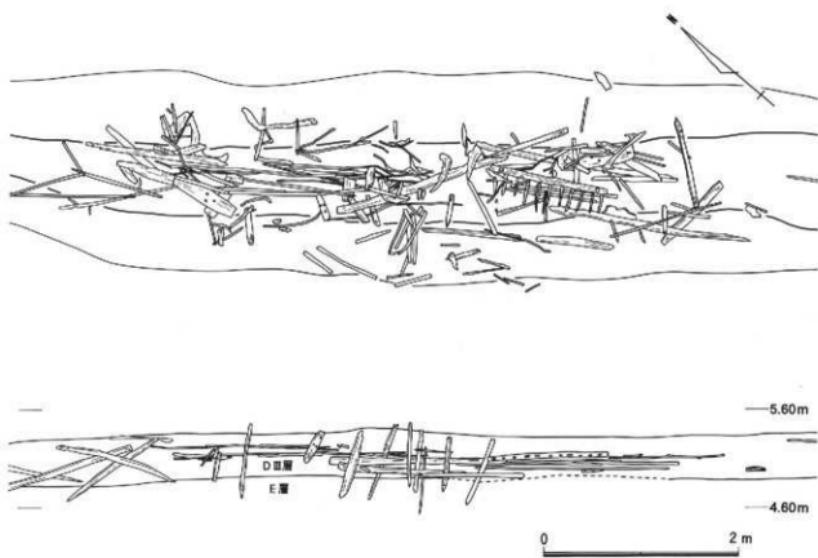
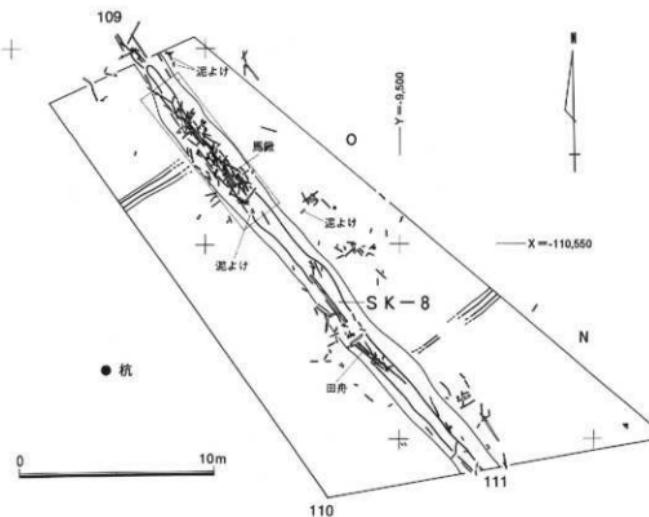
### E層の巻き揚げ

### 畦畔の補強

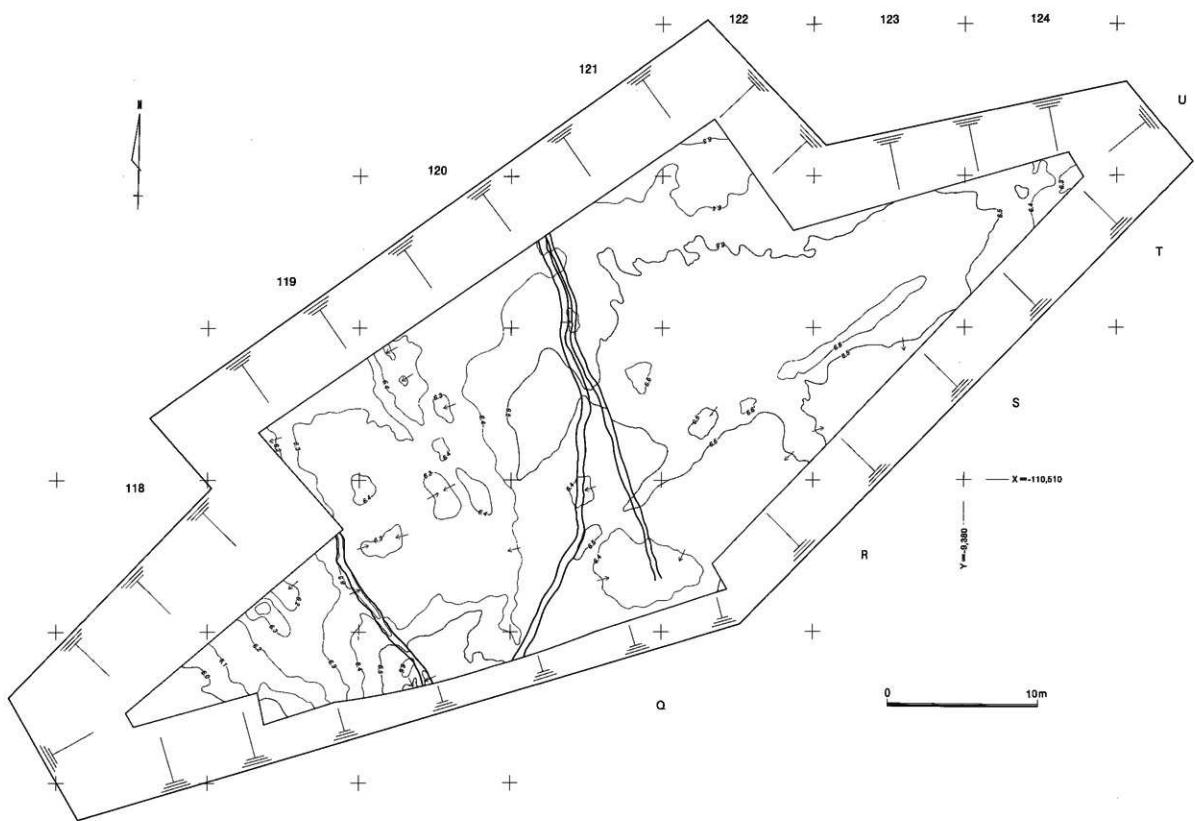
### 馬 鍬



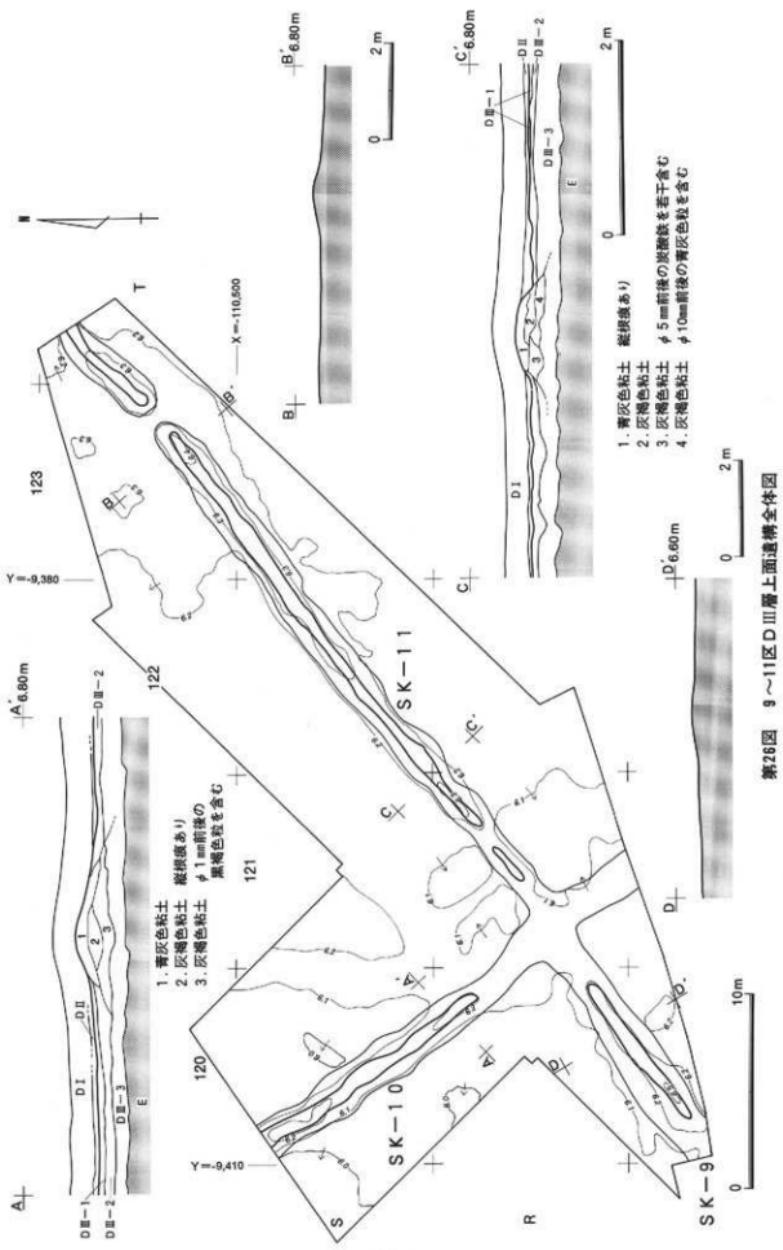
第23図 8区D III層上面造構全体図



第24図 8区DⅢ層内遺物出土状態図



第25図 9~11区D I層上面地形図



第26図 9~11区D III層上面・連続全体図

めの軸（引棒）受けと考えられる一辺が3cm程の方角の枘孔が穿孔されていたが、引棒は出土していない。9世紀前半にはこの地域で牛馬という畜力を利用し、農耕が営まれていたことを裏付ける貴重な資料といえる。

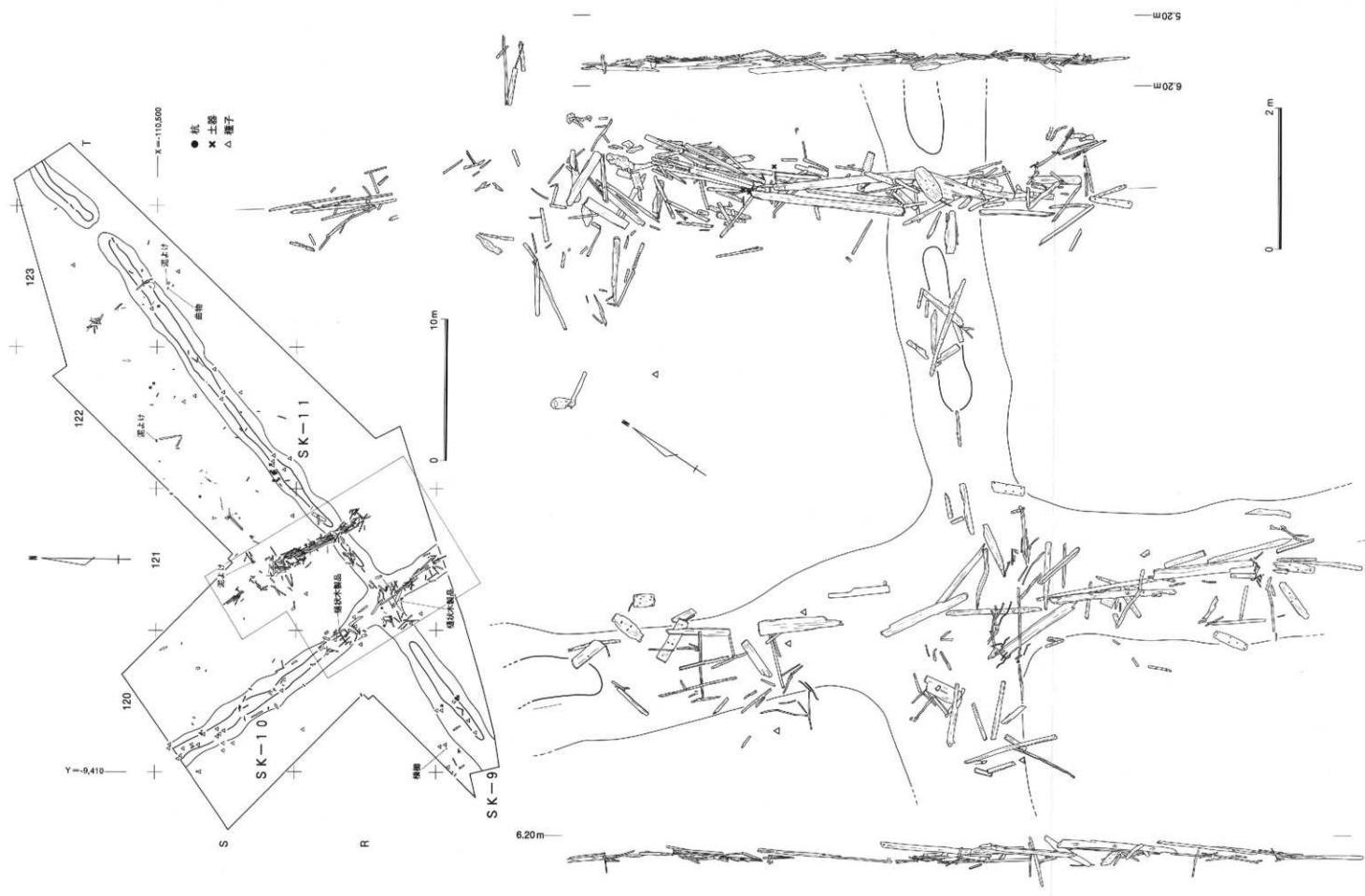
## 第8節 9～11区（第25～27図、図版25～27）

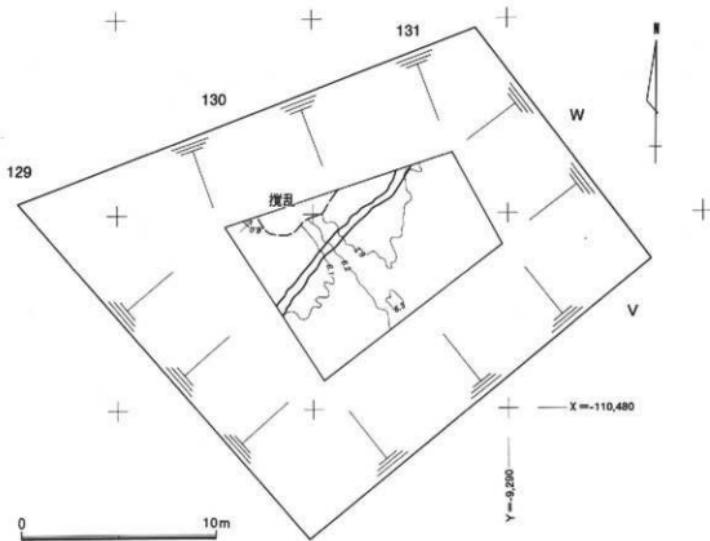
- D I 層上面 D I 層上面では、3条の溝状遺構が検出された。いずれも、ほぼ南北の方向に延び擬似畦畔を切っている。検出面での深さは2～10cm程で、上層に伴う溝の痕跡と思われる。
- D III 層水田 D III 層水田の標高は、6.3～6.0mで、東から西へ傾斜している。本調査区には東西方向の大畦畔（SK-9、SK-11）と南北方向の大畦畔（SK-10）が存在する。SK-9は、E37°Nの方向性を持ち、検出長約12.7m、下端幅1.8～2.6m、上端幅0.4～0.8mで、田面との比高差は12～20cmを測る。またSK-11は、E39°Nの方向性を持ち、検出長約49.3m、下端幅1.2～2.0m、上端幅0.4～1.0mで、田面との比高差は13～24cmを測る。さらにSK-10は、N37°Wの方向性を持ち、検出長約23.0m、下端幅1.4～2.4m、上端幅0.4～1.0mで、田面との比高差は4～19cmを測る。
- 交差部水口 これらの大畦畔は、調査区内のR121グリッドで交差している。交差部分は畦畔の盛り上がりが判然とせず水口になっているものと考えられる。また、T123グリッドにおいてもSK-11が約80cm切られており水口になっていると思われる。なお、小畦畔は検出されていない。
- 畦畔の補強 大畦畔解体の結果、SK-9、SK-11では、R121グリッドで若干の補強材が確認されたほかは、土盛のみで構築されていた。一方、SK-10は、東西方向の大畦畔との交差付近を中心に約10mの範囲で補強材として使用された板材等が検出されたが、それより北側では、ほぼ土盛のみの畦畔であった。
- SK-10' また、SK-10から東側に約7mのD III層下層からE層直上で補強材と考えられる多量の板材の列が検出された（SK-10'）。主軸方向は、SK-10よりやや北に向いておりN30°Wを測る。土層観察の結果、SK-10'では畦畔の盛土は見られず、板材の上にはSK-10に伴う耕作土が載った状態が確認された。さらに、S121グリッドではこの列と直交し北東方向に延びる板材の列も検出された。これらのことより、条里型水田において何らかの原因で畦畔の作り換えが行われたものと考えられる。
- 祭祀の痕跡 なお、本調査区では植物の種子が集中して出土している場所が何箇所かあり、祭祀が行われた痕跡とも考えられる。このような状況は後述する15・16区でも見られる。

## 第9節 12区（第28～30図、図版28・29）

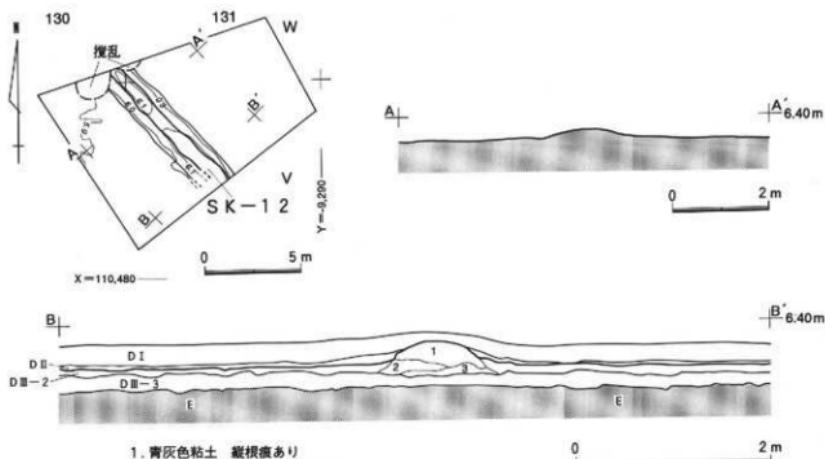
- D I 層上面 D I 層上面では上層の溝の痕跡と考えられる凹みを検出した。擬似畦畔を乗り越えるかたちで存在し、検出長は約10.0m、上端幅40～50cmで深さは数cm程度の浅いものである。
- D III 層水田 D III 層水田は、標高6.0～5.9mで東から西へ向って緩傾斜している。SK-12は、調査区中央よりやや西側で北西から南東に位置する南北方向の大畦畔である。N42°Wの方向性を持ち、検出長約7.5m、下端幅1.7～1.9m、上端幅0.5～0.9mで、田面との比高差は13～21cmを測る。畦畔上面の高さは、標高6.1mでほぼ平坦である。畦畔北部に擾乱坑が若干見られる。
- 畦畔の補強 大畦畔解体の結果、補強材は畦畔北側に集中しており、その他の部分では、殆ど補強材のない、土盛畦畔となっていることが確認された。なお杭はまったく検出されなかった。

第27图 9~11区DIII墓内遗物出土状态图

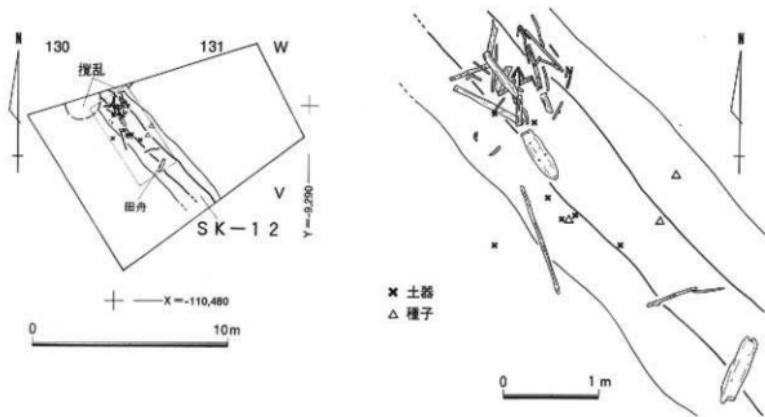




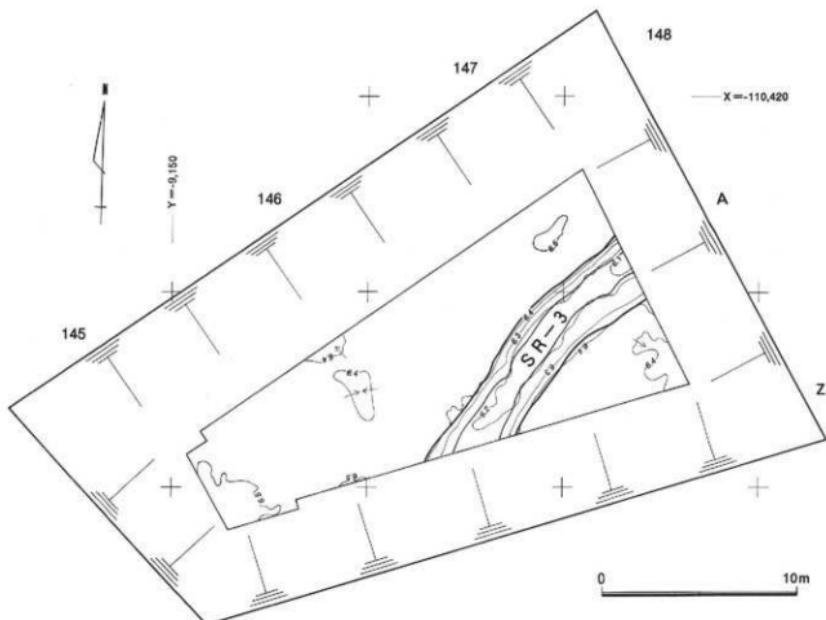
第28図 12区D I層上面地形図



第29図 12区D III層上面造構全体図



第30図 12区D III層内造物出土状態図



第31図 14区D I層上面地形図

このように本製品の出土は、他の調査区と比べ少ないが、畦畔北側で輪カンジキ型田下駄の足板が1点、大畦畔解体中に出土した。また、土層観察の結果、大畦畔部分以外は、小畦畔の起伏など、殆ど掌握できなかった。

### 第10節 14区 (第31~33図、図版30・31)

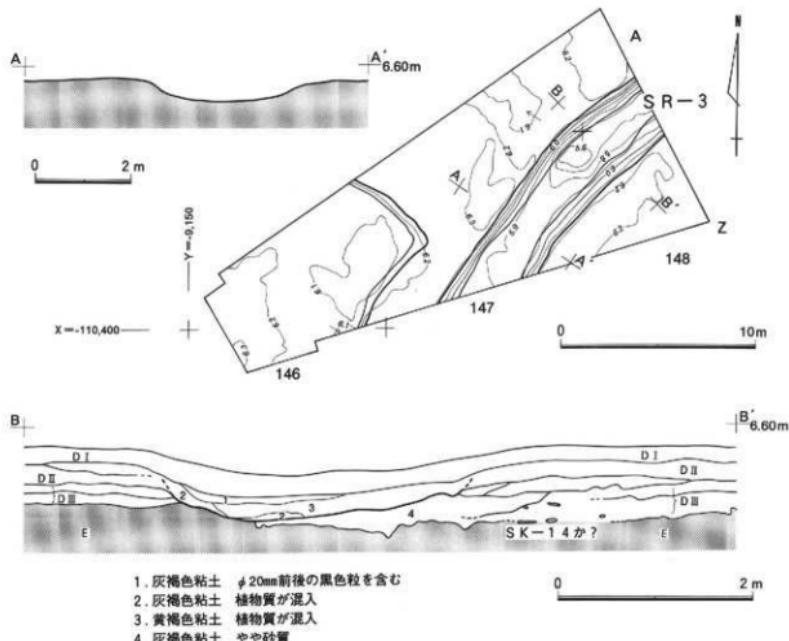
D III層水田の標高は6.3~6.1mで、比較的平坦な地形である。本調査区で確認されたS R - 3は、調査区の南東に位置している。規模は、検出長約15.5m、下端幅1.6~2.4m、上端幅3.0~3.6mで、深さは35~61cmを測る。D II層から下刻され、条里型水田より新しい流路と考えられるが、年代を推定できる伴出遺物がないため詳細な性格などは把握できなかった。攻撃斜面が確認できるのは、A148グリッド付近の左岸である。流れの方向であるが、河床勾配がやや北東に傾斜する傾向がある点から、南西から北東に直線的ではあるがごく僅かに弧を描いて流れたと推定している。なお、15・16区の西端で検出されたS R - 4とは覆土の状態などから察するに、同一の流路である可能性も考えられる。

また、14区において、東西方向の大畦畔そのものは検出できなかったが、この原因としてSR - 3により浸食された可能性が考えられる。しかし、SR - 3の右岸付近で大畦畔

D III層水田

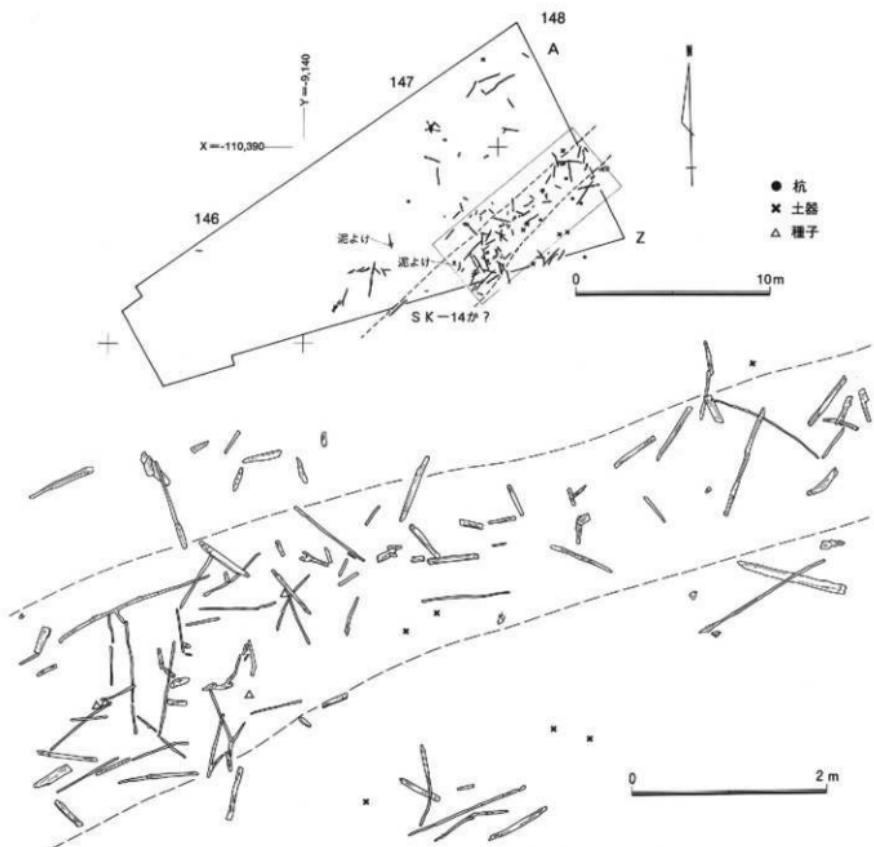
S R - 3

SK-14の  
痕跡

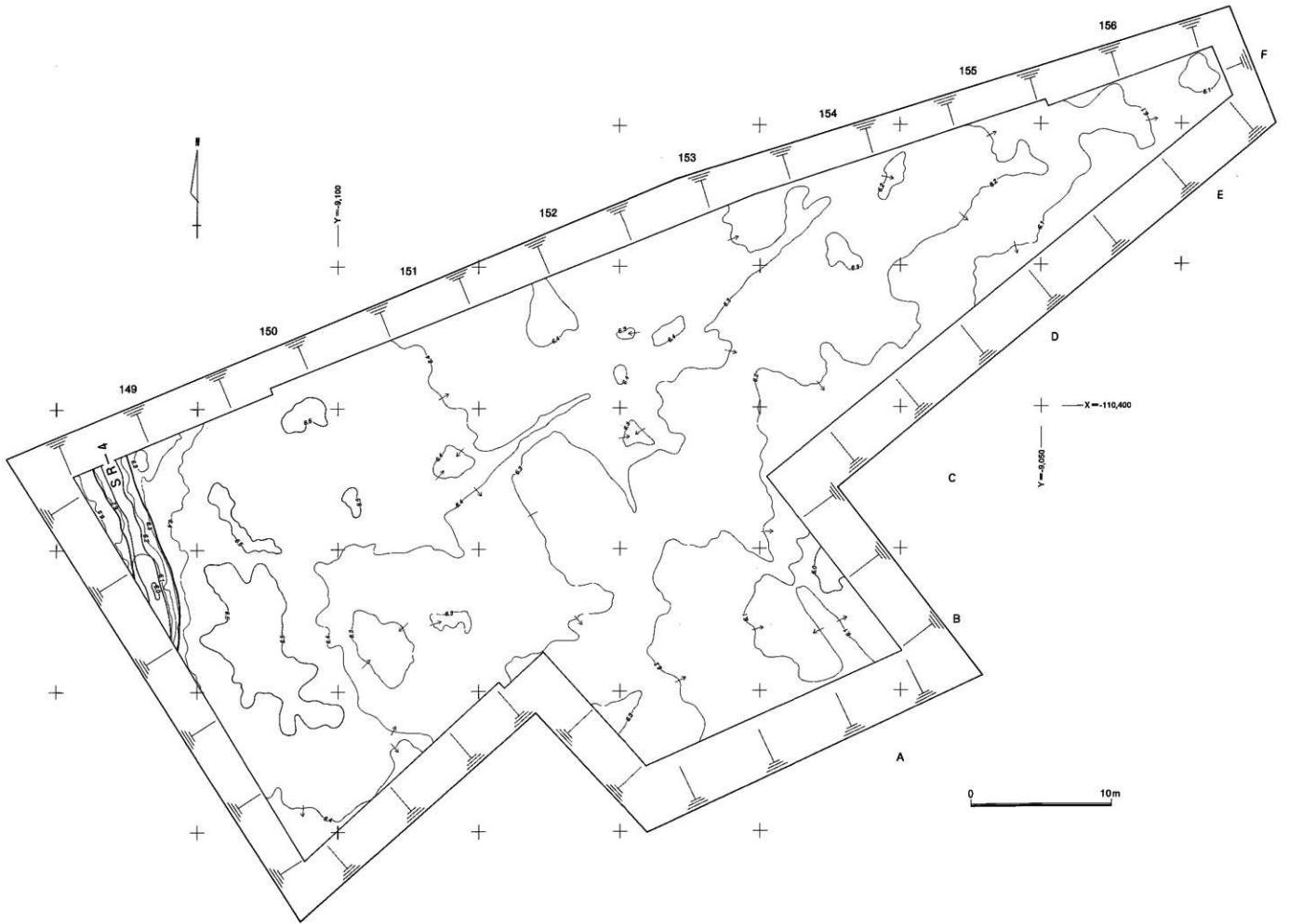


第32図 14区 D III層上面構造全体図

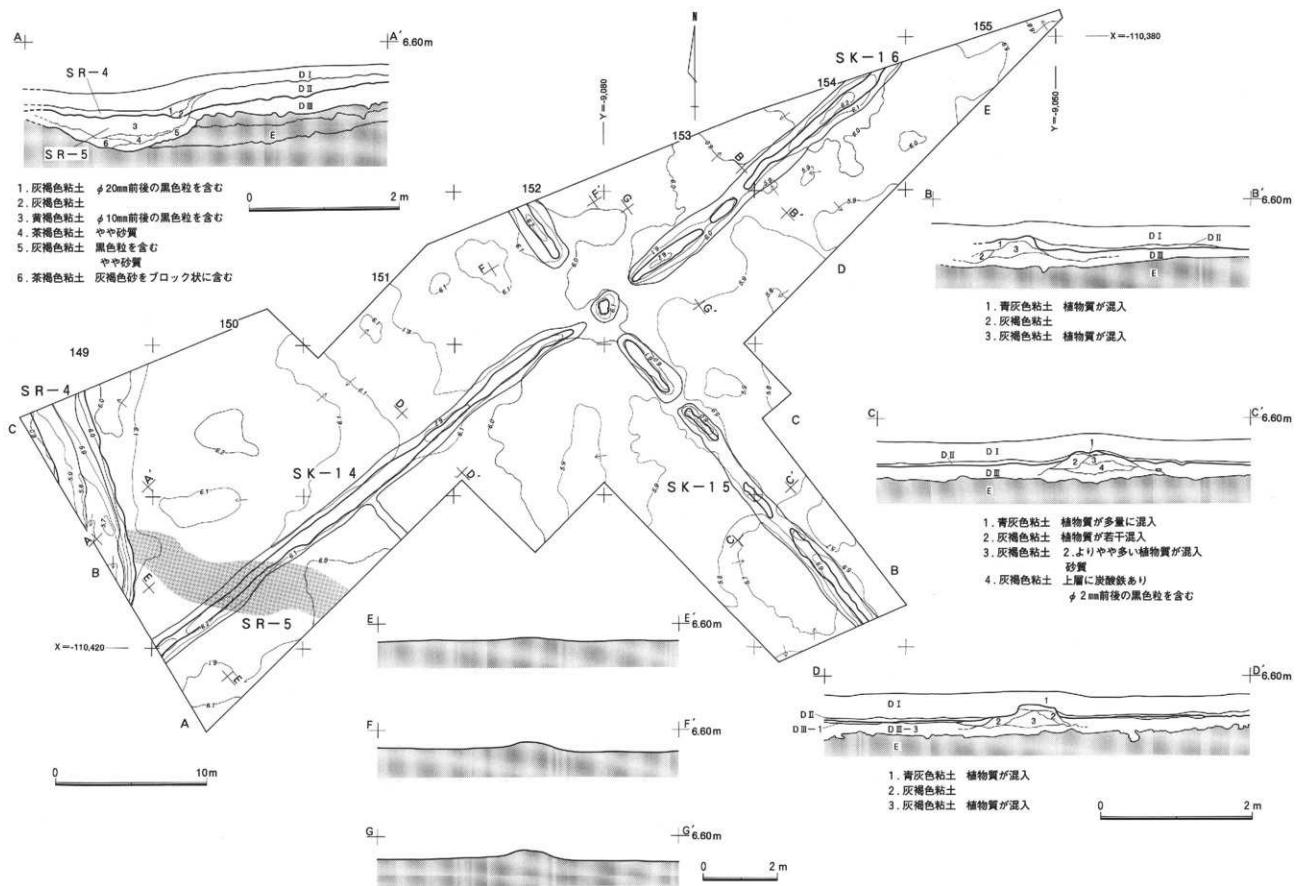
の痕跡であると思われる杭列や板材などの補強材が確認されている。土層観察においても盛り上がりが確認でき、これらの位置は、15・16区の東西方向の大畦畔のほぼ延長線上に存在している。よってSK-14と認識してもよいのではないかと考えられる。ただ、標高が若干低いことから、9~11区のE層上面で検出されたSK-10'のように作り換え以前の大畦畔の痕跡である可能性も考慮される。



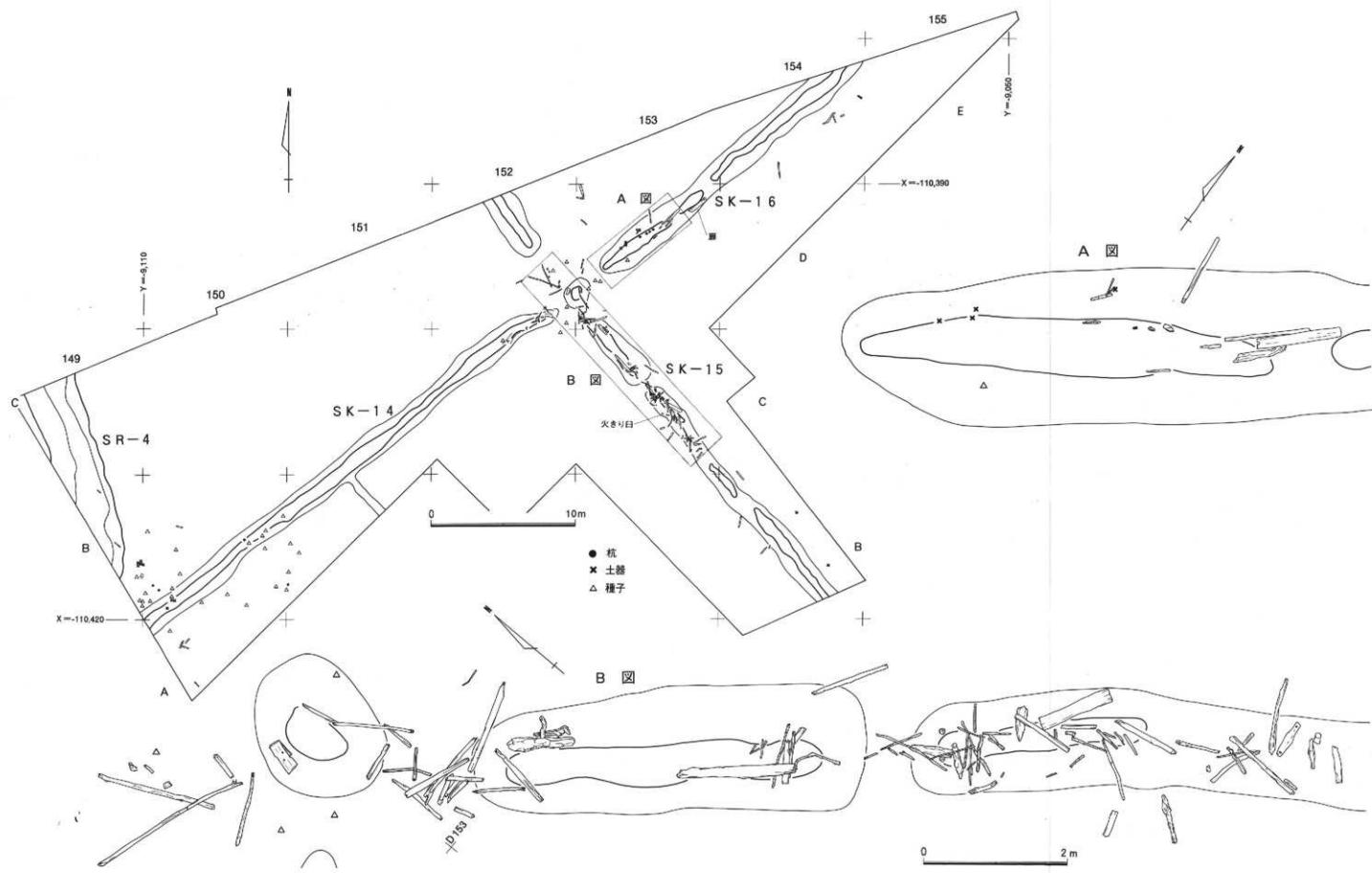
第33図 14区D III層内遺物出土状態図



第34図 15・16区D I層上面地形図



第35図 15・16区D III層上面造構全体図



第36図 15・16区D III層内遺物出土状態図

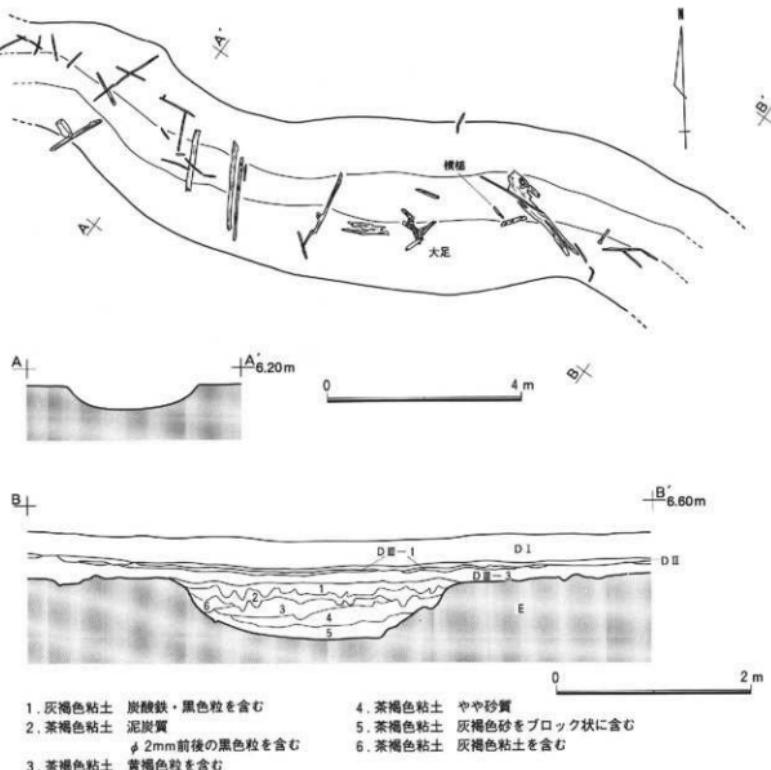
## 第11節 15・16区 (第34~37図、第32~36)

本調査区では、流路が2本 (S R - 4, S R - 5) 検出された。S R - 4 は、ほぼ北から南に流れB149グリッドでやや西に蛇行している。検出長約14.7m、上端幅3.5~3.7mで、深さは14~35cmを測り底面は若干の凸凹が見られる。D II層から下刻され、条里型水田より新しい流路であると考えられるが、伴出遺物が殆どないため性格は不明である。

S R - 5 は、下刻はE層上面で条里型水田より古い流路で、やや蛇行しながら東西に向きをもつ。検出長約14.8m、上端幅2.1~3.4mで深さは約50cmを測る。この流路が埋まつた後に条里型水田の大畦畔が施工された様子が土層観察より確認できる。B150グリッドの覆土最下層からは、大足が出土している。足板はないが、梯子型に組み合わされた棒が出土している。この付近一帯に、条里型水田以前の水田が存在していたことが考えられる。

S R - 5

大 足



第37図 S R - 5 実測図

- D III層水田** D III層水田は、標高6.2~5.7mである。本調査区では、南北方向の大畦畔（SK-15）と東西方向の大畦畔（SK-14、SK-16）が検出された。SK-14は、E 39°Nの方向を示し、検出長約37.8m、下端幅1.2~2.0m、上端幅0.4~1.0mで、田面との比高差は5~16cmを測る。SK-16は、E 40°Nの方向を示し、検出長約23.3m、下端幅1.5~2.2m、上端幅0.5~0.9mで、田面との比高差は14~24cmを測る。SK-15は、N 40°Wの方向を示し、検出長約31.3m、下端幅1.1~2.2m、上端幅0.3~0.9mで、田面との比高差は12~28cmを測る。9~11区と同様に調査区内で交差し、交差部分では盛土が確認されていないことから水口ではないかと考えられる。
- 小 哉 畔** B151グリッドでは、SK-14と連結して南東方向に延びる小畦畔1本を検出した。
- 畦畔の補強** 今まで調査した大畦畔の特徴は、一般に南北方向は補強材を用い、東西方向は補強材を殆ど使用しない土盛畦畔であったが、15・16区では両方向の大畦畔とも殆ど補強材を用いていない。解体の当初、盛土内からは補強材と考えられる遺物は殆ど検出されなかった。しかし、SK-15を解体していく過程で、D III層下部からE層直上にかけ、C153グリッドを中心に補強材が確認された。このように補強材が下部で出土した点については、補強材が土圧で沈下したか、あるいは、同じ場所に畦畔の作り換えが行われたのではないかと考えられる。
- 祭祀の痕跡** なお、15・16区に特徴的な事として、9~11区と同様に植物の種子が數十個も出土している。やはり、祭祀が営まれていたのではないかと推察される。

第2表 坪界線の交点座標一覧表

地点	X 座 標	Y 座 標	地点	X 座 標	Y 座 標
①	-110,739.00	-10,182.00	⑧	-110,563.75	-9,629.70
②	-110,665.50	-10,103.50	⑨	-110,495.95	-9,550.00
③	-110,755.50	-10,031.30	⑩	-110,578.75	-9,481.90
④	-110,685.95	-9,947.20	⑪	-110,515.95	-9,398.20
⑤	-110,614.05	-9,860.50	⑫	-110,450.85	-9,317.05
⑥	-110,701.45	-9,803.75	⑬	-110,529.25	-9,246.10
⑦	-110,633.25	-9,713.20	⑭	-110,397.15	-9,080.30

①は池ヶ谷遺跡で検出された交点の座標  
②~⑬、⑭は復元交点の座標

## 第4章 まとめ

### 1. 大畦畔の検出状況（第38図）

既述のように、静清バイパス建設に伴って調査された、瀬名遺跡・川合遺跡・池ヶ谷遺跡等や、県営住宅建て替えに伴う川合遺跡八反田地区、県立中央高等学校建設に伴う城北永ヶ島遺跡等から、主軸方位が約N39°W、1坪の辺長が約107mの条里型水田遺構が確認されている。

岳美遺跡では、池ヶ谷遺跡と上土遺跡の間の約1,200mの範囲で、南北方向の大畦畔を9本検出することができた。個々の主軸方位を列挙してみると、SK-1 N39°W、SK-3 N38°W、SK-4 N32°W、SK-5 N39°W、SK-7 N38°W、SK-8 N39°W、SK-10 N37°W、SK-12 N42°W、SK-15 N40°Wという結果が得られた。一方6本が検出された東西方向の大畦畔では、SK-2 E40°N、SK-6 E40°N、SK-9 E37°N、SK-11 E39°N、SK-14 E39°N、SK-16 E40°Nという結果を得ている。

それぞれの坪区画の辺長をみてみよう。本調査においては、大畦畔の交差部が確認できたのは9~11区、15~16区の2ヶ所のみである。そこで、他の区では、検出できた大畦畔を延長することにより坪界線の交点を復元し、それらの座標（第2表）から1坪の辺長を求める。東西間に西から107.5m、109.1m、112.6m、117.8m、108.6m、104.6m、104.6m、104.0m、212.0m（2坪分）となり平均すると108.1mとなる。また南北間は北から順に115.4m、110.2m、107.2m、105.7mで平均では109.6mとなる。

これらの結果においては若干のバラツキは見られるが、検出範囲が狭小であることや、計測点の求め方による誤差も考えられ、ほぼ、他遺跡での調査と同様な結果が得られたと考えてよいのではないか。このように主軸方位約N39°W、辺長約107mの条里制区画が静清平野北部の広範囲で施工されていることが改めて確認されたといえる。

### 2. 大畦畔の補強状況

今回の調査で、検出された大畦畔15本（南北方向9本、東西方向6本）の構築方法について気が付いた点について述べてみたい。まず第1は、東西方向の大畦畔が杭列や板材などによる補強が殆ど成されていない反面、南北方向の大畦畔には、調査区によりバラツキはあるものの、何らかの補強が施されている事である。南北方向の大畦畔は扇状地地形の傾斜方向に対しほぼ直角、つまり等高線と平行（第1図）であり、柵田状水田の段差に該当するため補強が必要であったと思われる。

第2には、南北方向の大畦畔について細かく観察すると、SK-1、SK-3では、杭列及びおびただしい量の補強材を用いて構築しているのに対して、それより東側の地区においては、杭列は殆ど見られず、補強材も東西方向の畦畔との交差点付近で見られる程度である。補強材の密度が薄いこれらの地区は、地盤も低く、軟弱であると思われ、このような構築方法がとられているのは不合理ではないだろうか。

この点を考察するにあたり、DⅢ層及びE層の地質の状況が重要なカギのひとつになると考えられる。つまり、大畦畔を構築するにあたっては耕作土であるDⅢ層と下層のE層の影響を強く受けると考えられるのである。基本的にDⅢ層は粘土質であり、E層は砂質あるいは粘土質である。もう少し細かく観察していくと、微妙な差異が見られる。まず、

他遺跡での  
成 索

主 軸 方 位

1坪の辺長

本遺跡での  
成 索

南北畦畔と  
東西畦畔の  
相 异 点

南北畦畔の  
補 強

地質の状況

1～3区では、DⅢ層が砂粒を全体に含んでおり、E層は砂層である。4区では、DⅢ層に砂粒が混入しており、E層は砂質層になっている。5区のE層は細砂を含んでいるもののやや粘土質に変わり、6区では、完全に粘土層になっている。9～11区では、DⅢ層、E層とも粘土層であり、それ以東でもほぼ同様の状況を呈している。つまり、4～5区を境にして、西の池ヶ谷地区寄りに行くに従い、砂質の度合いが強くなり、東の上土地区寄りに行くに従い粘土質の度合いが強くなっている。そして、砂質の強い地域では、杭列を含め補強が頑強に成されており、粘土質の強い地域では、土盛り畦畔となる傾向がある。常識的に考えて、砂質の強い地域では乾田化しやすく、補強材は希少ですむと考えられ、逆に粘土質の強い地域では湿地化が進み、多くの補強材が必要とされるものと考えられる。

**今後の課題** しかし、実態はこの逆となっており、なぜこのような事になるのか理解し難く今後の検討課題といえる。

### 3. 火山灰の検出（第38図）

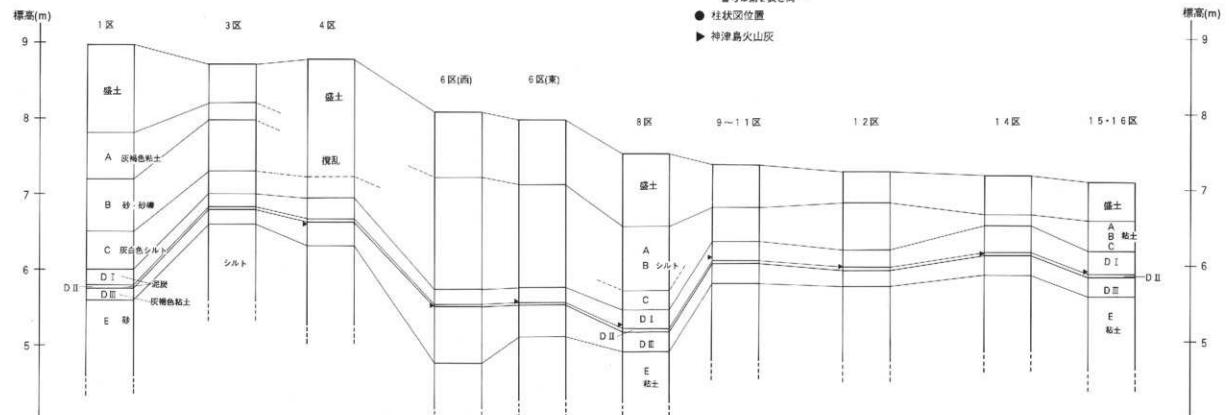
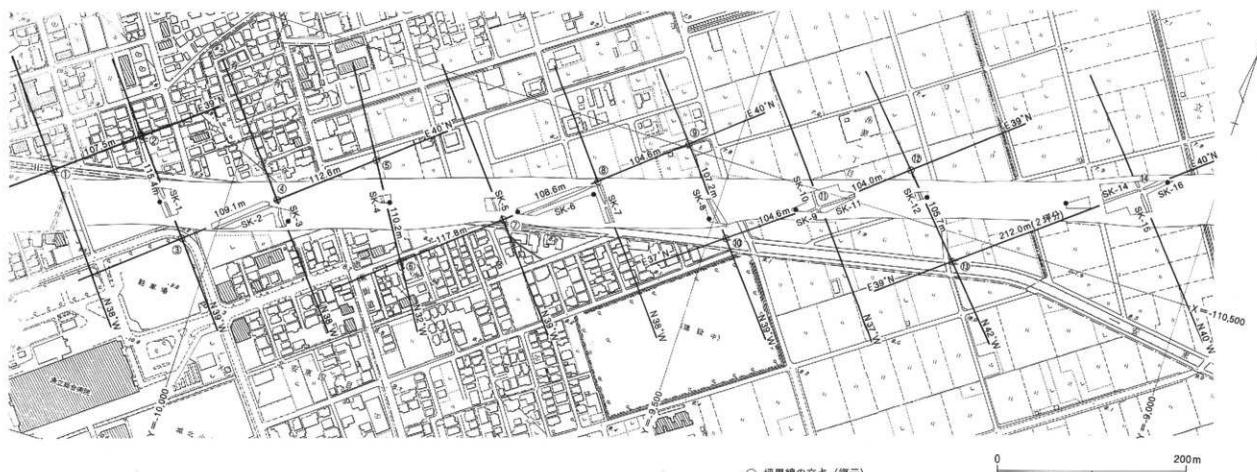
**神津島の火山灰** 岳美遺跡では、広範囲にわたって平安時代の神津島の噴火（838年）によるものと考えられる火山灰が検出された。

**検出層位  
6区変換点** 池ヶ谷地区に近い地域では、DⅢ層耕作土中より確認され、上土地区に近い地域では、DⅠ・DⅡ層の泥炭層内より確認されている。その変換点は6区に求められ、6区において5区寄りの部分では、DⅡ層あるいはDⅢ層中及びDⅢ層直上で確認されているが、7区寄りの部分ではDⅠ層あるいはDⅡ層直上で確認されている。これは、池ヶ谷地区寄りの地域は、噴火当時、DⅢ層水田が耕作されており、上土地区寄りの地域は、既に水田が廃絶され、湿地化していた所に噴火が起ったと考えられる。現地表面から類推するに、当時の地表面は1区寄りが高く、東に向って緩傾斜していたと思われる。そして6区付近が変換点となり、東側が湿地化していたのではないかと考えられる。なお、7・8区では、水田經營廃絶後の耕作土を被覆する泥炭層（DⅠ・DⅡ層）からやや厚めの火山灰（最大厚約5mm）が検出された。

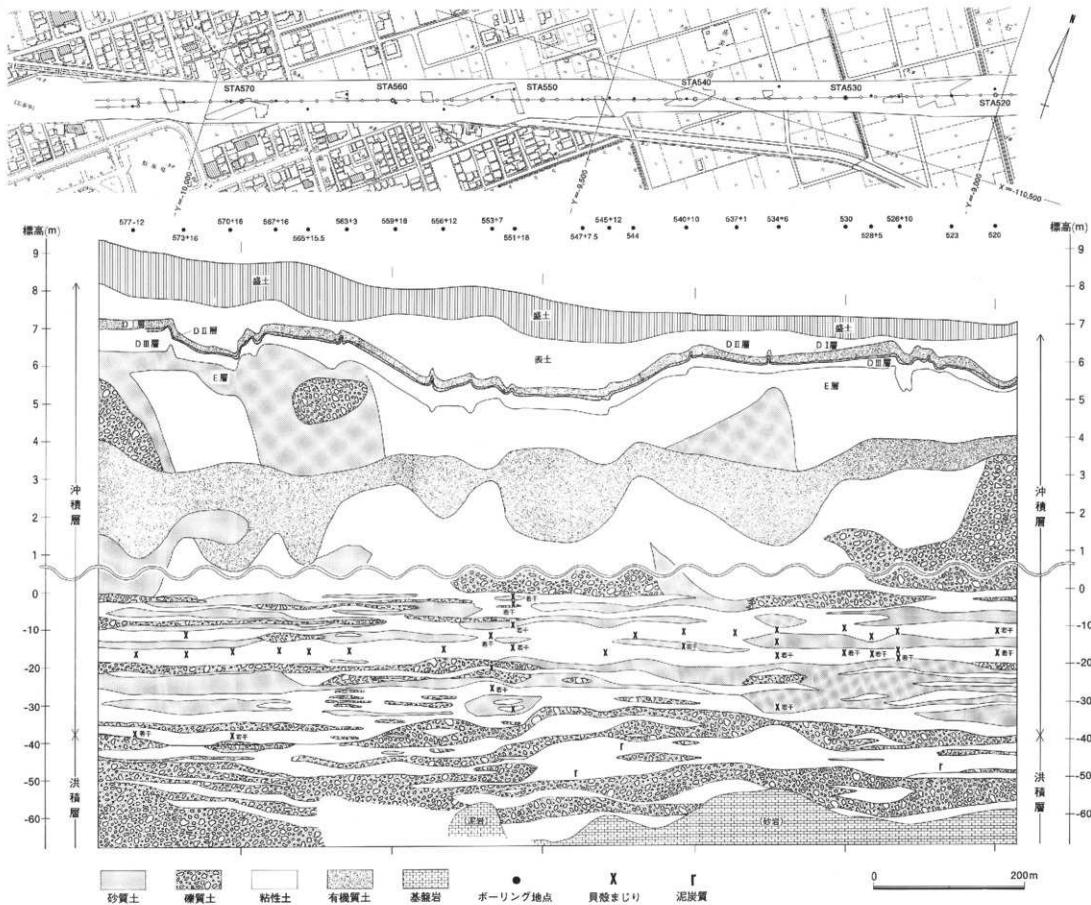
### 4. 地盤の高さと地質の関係（第39図）

**標高の推移** DⅢ層水田の地盤の標高を西から追っていくと、4～5区あたりを境に落ち込み始め、7～8区付近が最も低くなり、9～11区からまた高くなるという推移を示している。勿論、後世の沈下 当時の地盤がこのように沈下していたとは考えにくく、何らかの原因で後世に沈下してしまったと考えられる。なぜ、このような現象が起つたのであろうか。

**地質の状況** この点を考察するに、DⅢ層以下の地質の状況が影響していると思われる。沈下の見られる付近のE層は粘土層であり、その下層は2m前後の腐植土層を挟んで再び粘土層の堆積がみられる。一方、その西側ではDⅢ層直下は砂層であり、間に疊を挟んで砂・腐植土層となっている。東側の直下は粘土層であるが、その層厚は薄く、腐植土層との間には約2mの砂層が見られる。腐植土・粘土は、砂・疊に比べて圧密化の影響を受けやすい。したがってこの部分の粘土・腐植土層が圧縮されたことが、沈下の1つの原因と考えられる。規模の違いはあるが、それより西の1～2区の付近でもこのような現象は見られる。



第38図 埋没条里型地割りの復元図および土層柱状模式図



第39図 地質断面図（建設省資料より作成）

## 写真図版

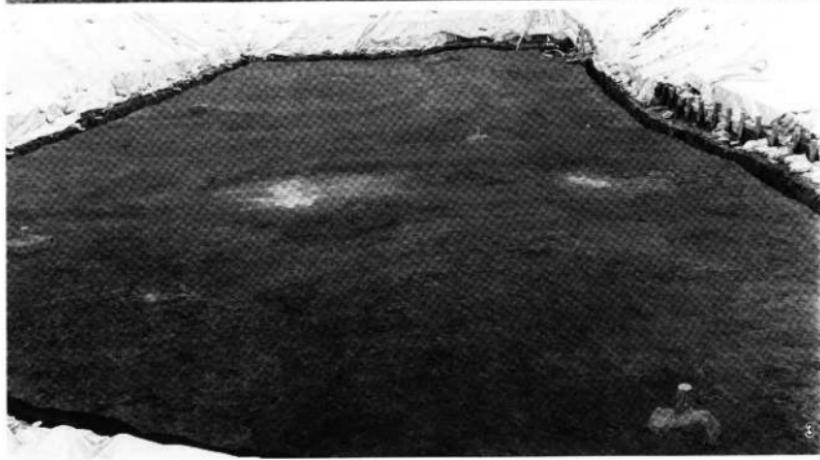
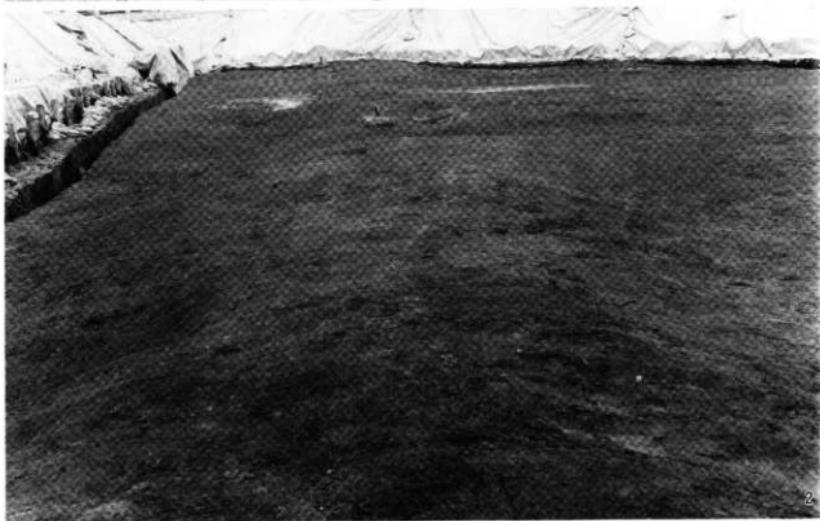
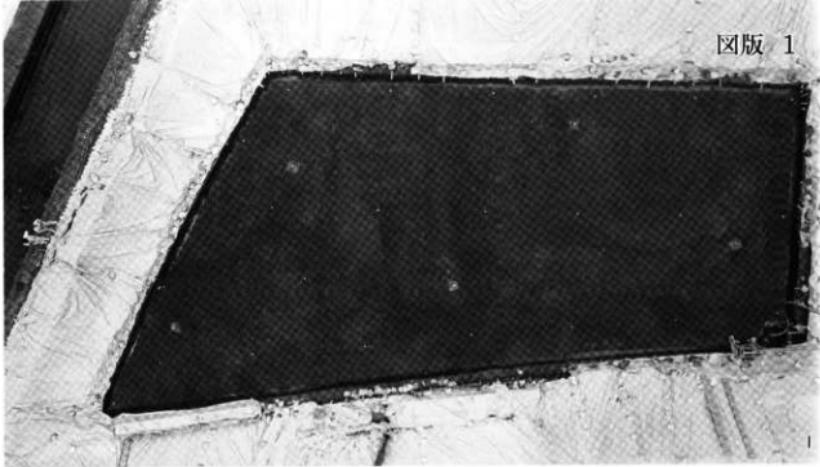
図版 I

I 区 D I 層

1. 全景

2. 速景（南東より）

3. 同上（北西より）

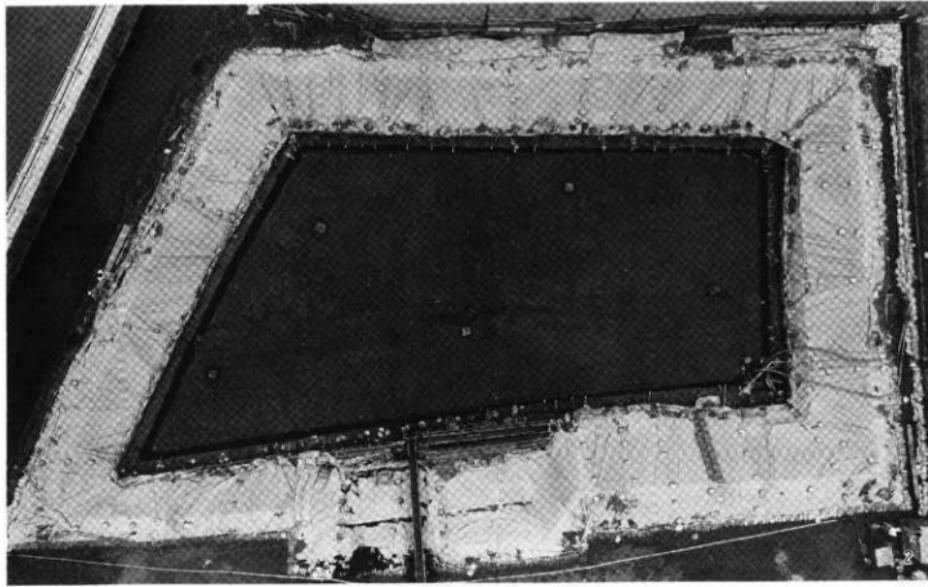


図版 2

I 区 D III 層 1

1. 遠景 (南西より)

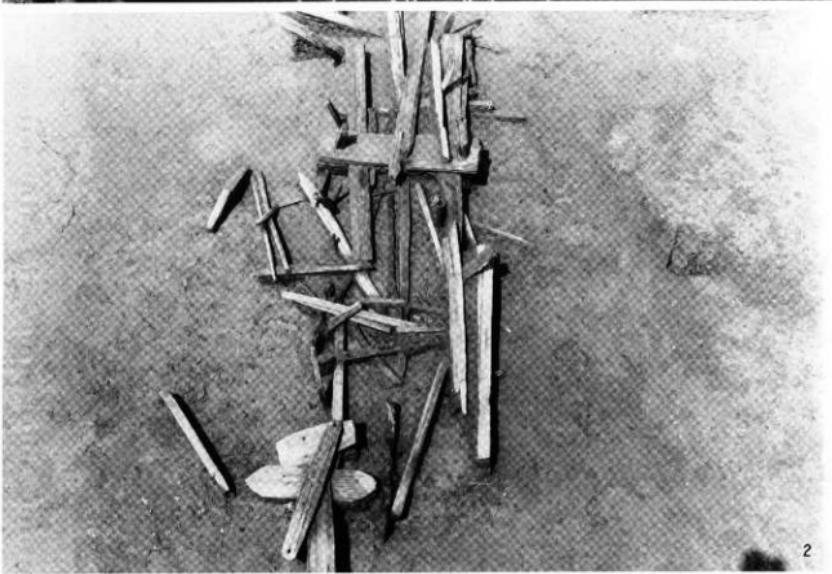
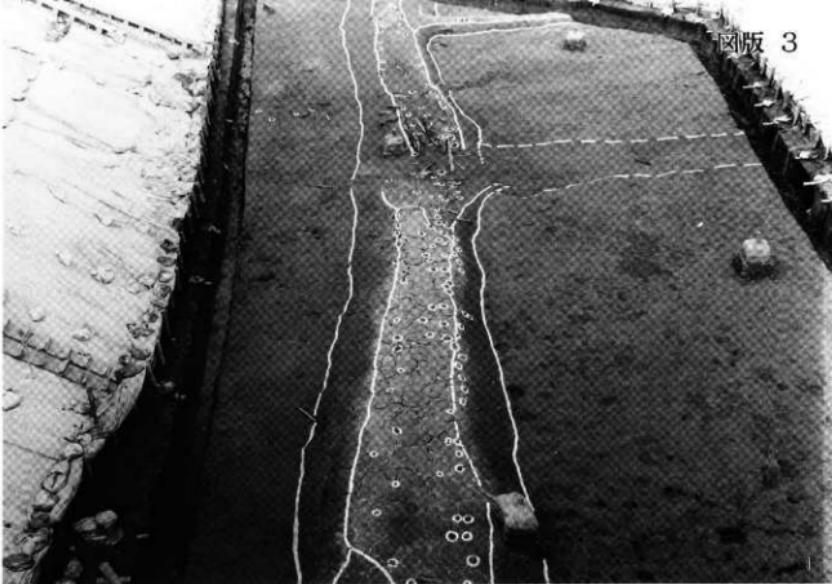
2. 全景



図版 3

I 区 D III 層 2

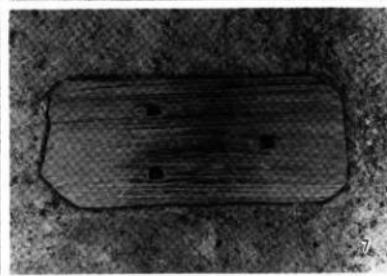
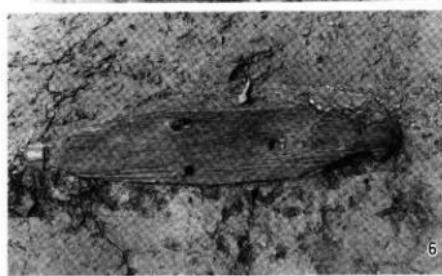
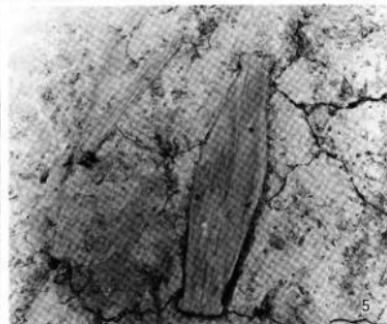
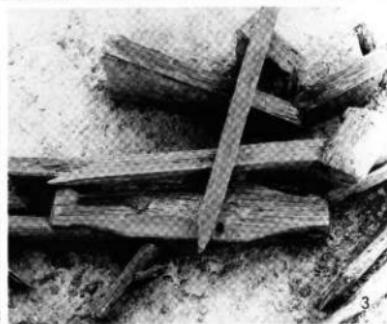
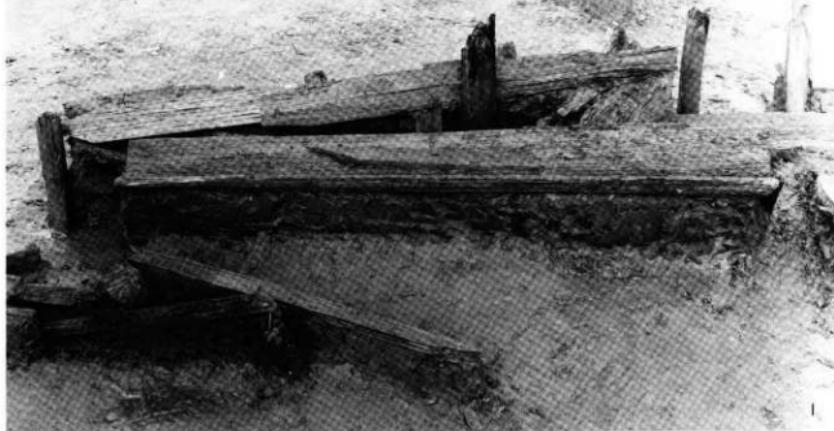
1. SK-I 梱出状況 (南東より)
2. SK-I 解体状況
3. SK-I 土層断面 (南壁)



図版 4

I 区 D III層 3

1. SK-I 捕獲状況
2. SK-I 解体状況(細部)
3. 同上
4. 輪カンジキ型田下駄出土状況
5. 輪カンジキ型田下駄出土状況
6. 輪カンジキ型田下駄出土状況
7. 田下駄出土状況



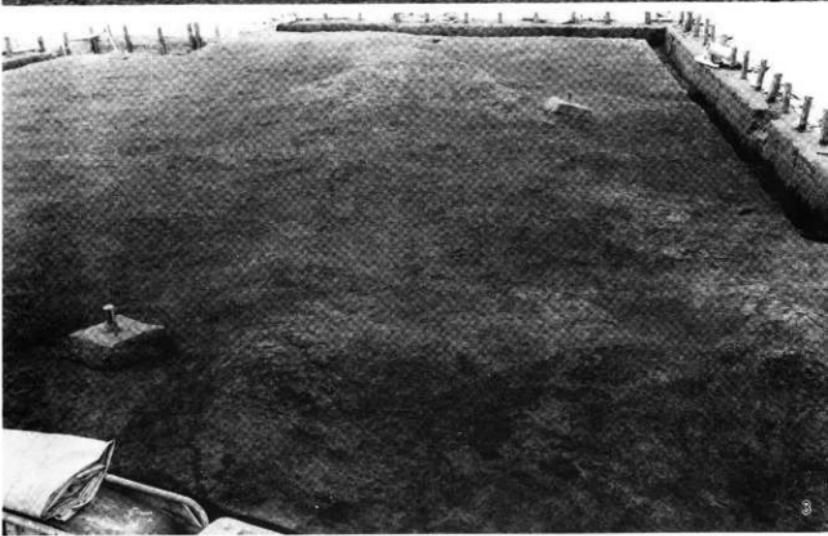
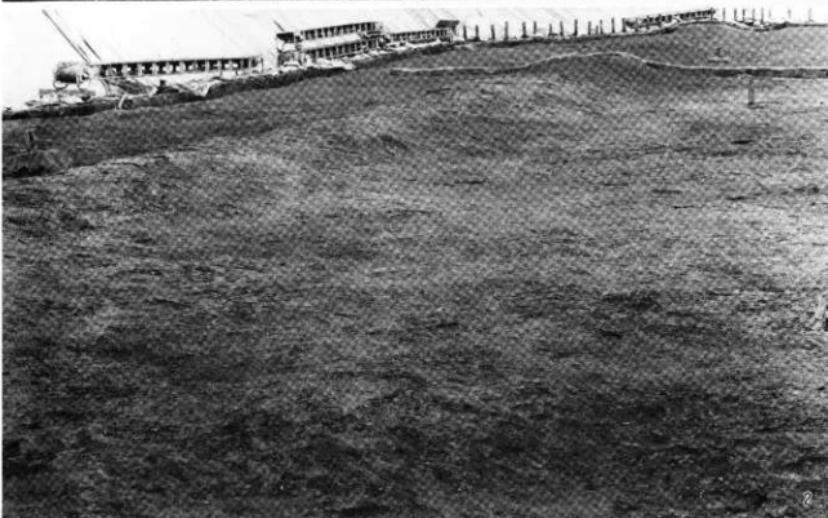
図版5

2・3区D I層

1. 全景

2. 2区遠景（北より）

3. 3区遠景（北より）



図版 6

2・3区D III層 1

1. 速景(北東より)

2. 全景



図版 7

2・3区DⅢ層 2

1. SK-2検出状況（北より）
2. 同上（西より）
3. SK-3検出状況（南より）



図版 8

2・3区DⅢ層 3

1. SK-2 土層断面
2. 同上
3. SK-3 土層断面
4. SK-3 解体状況



2



3

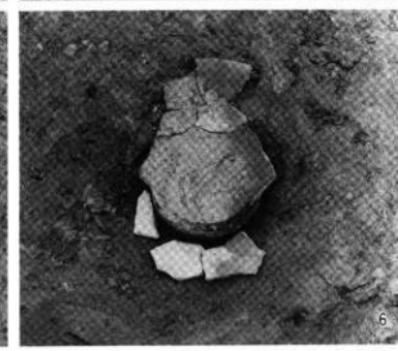
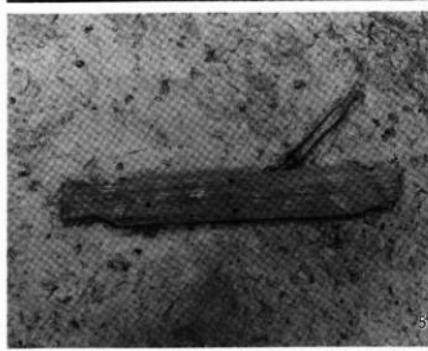
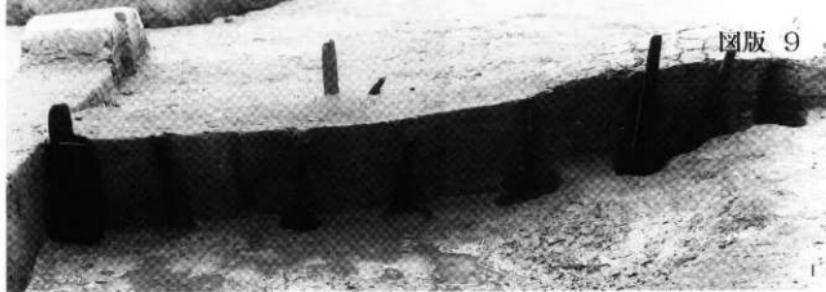


4

図版 9

2・3区D III層 4

1. SK-3杭列検出状況
2. 同上
3. 輪カンジキ型田下駄出土状況
4. 下駄出土状況
5. 輪カンジキ型田下駄出土状況
6. 須恵器出土状況



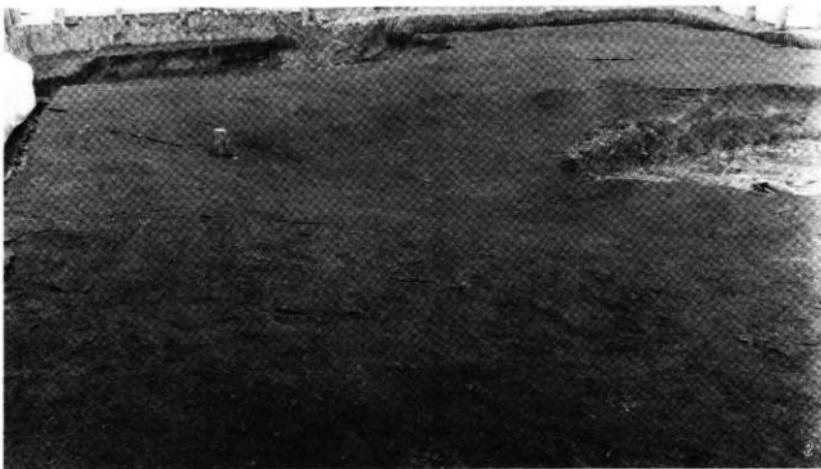
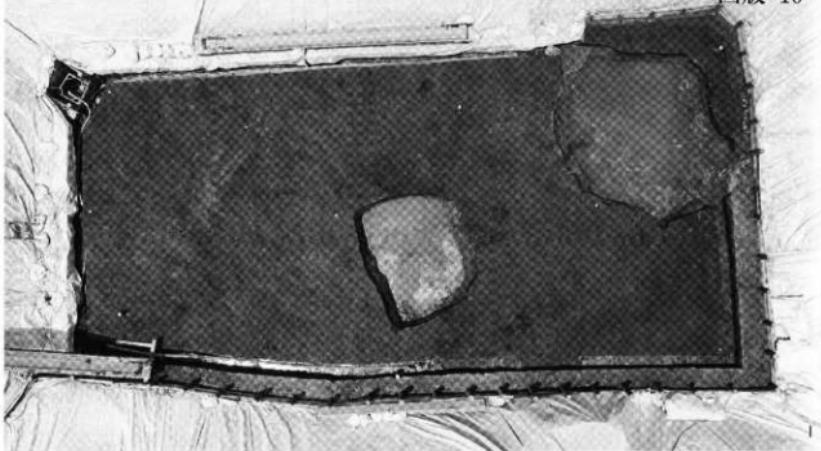
図版10

4区D I層

1. 全景

2. 遠景(西より)

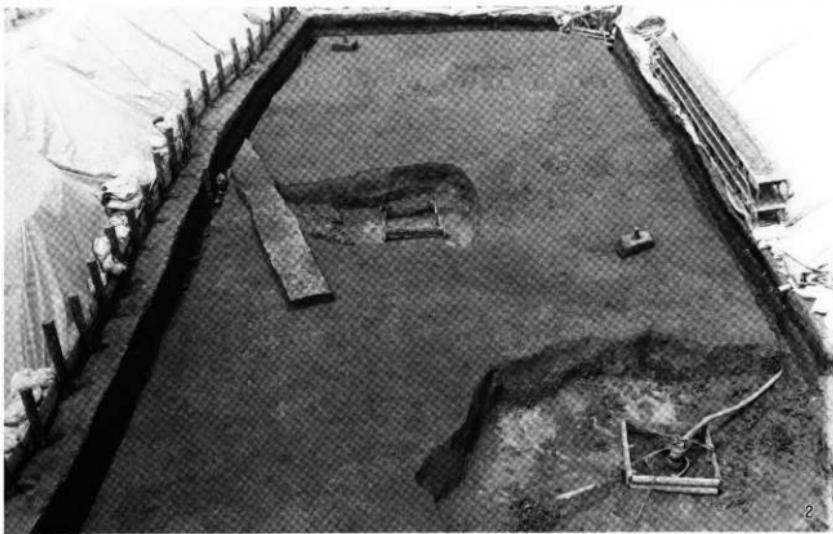
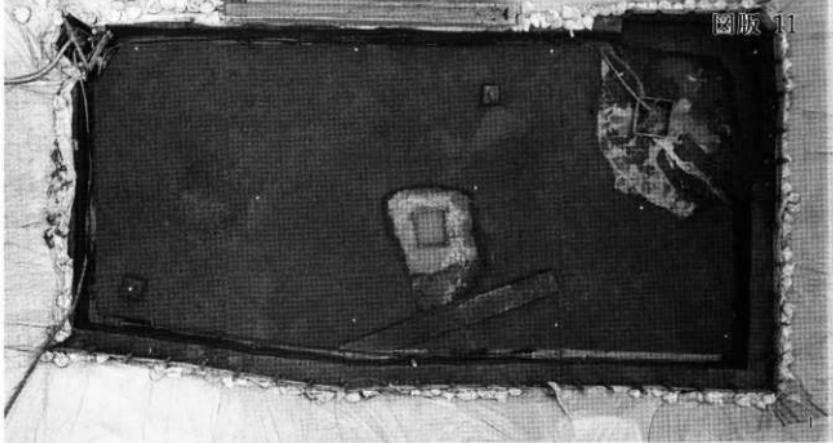
3. 同上(東より)



図版II

4区D III層 1

1. 全景
2. 遠景（東より）
3. 同上（北西より）



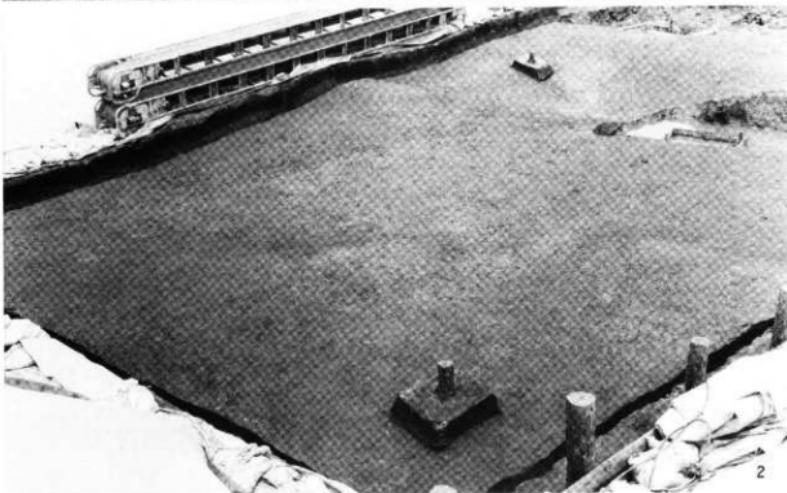
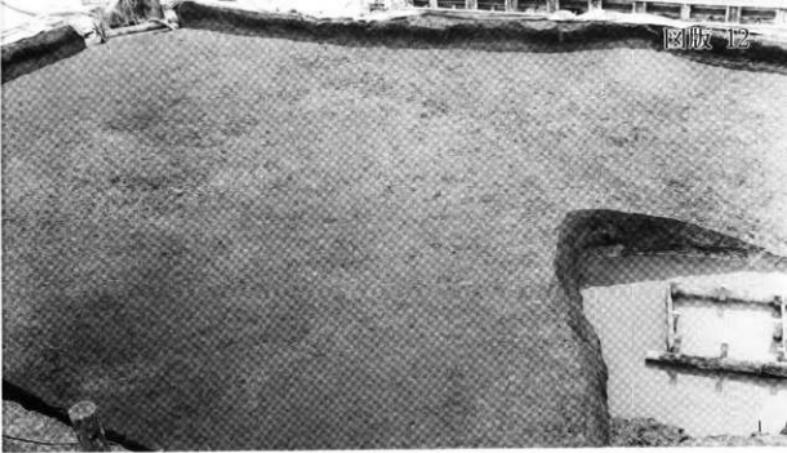
図版12

4区DⅢ層 2

1. SK-4検出状況（南東より）

2. 同上（南西より）

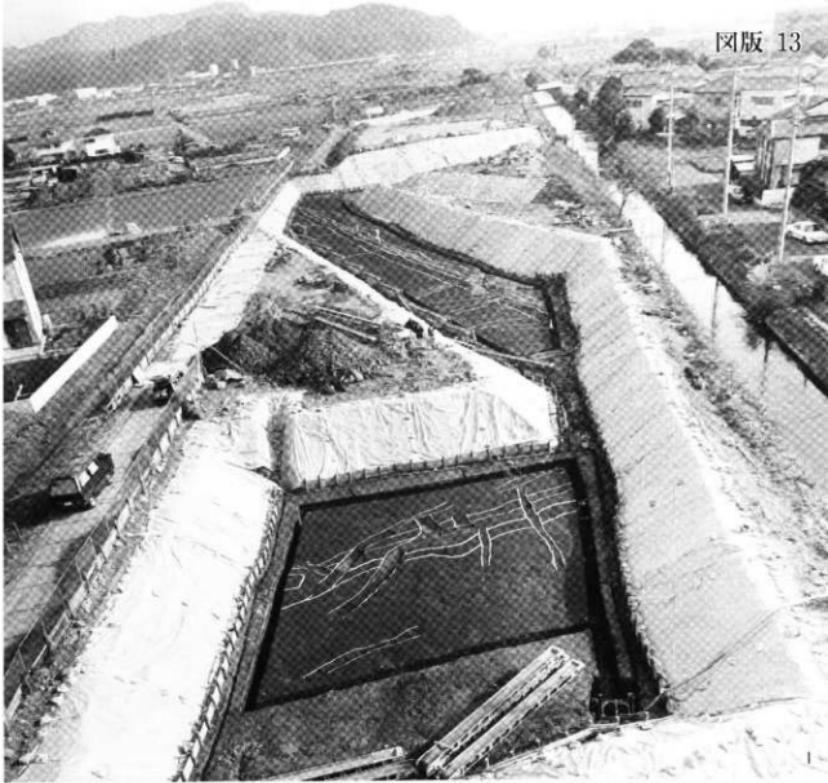
3. SK-4解体・湧水施設（SX-2）  
検出状況（北西より）



図版13

5区D I層

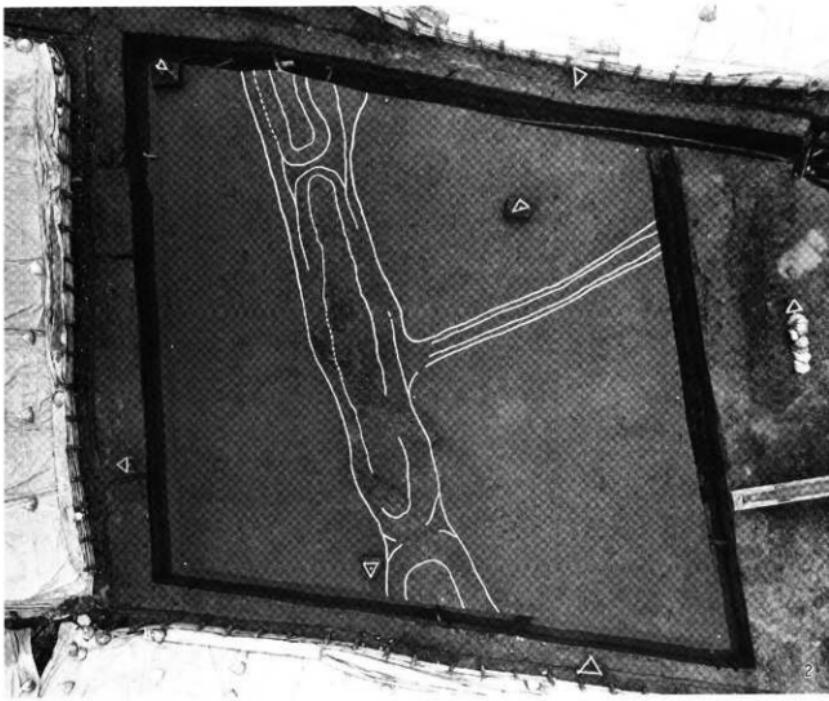
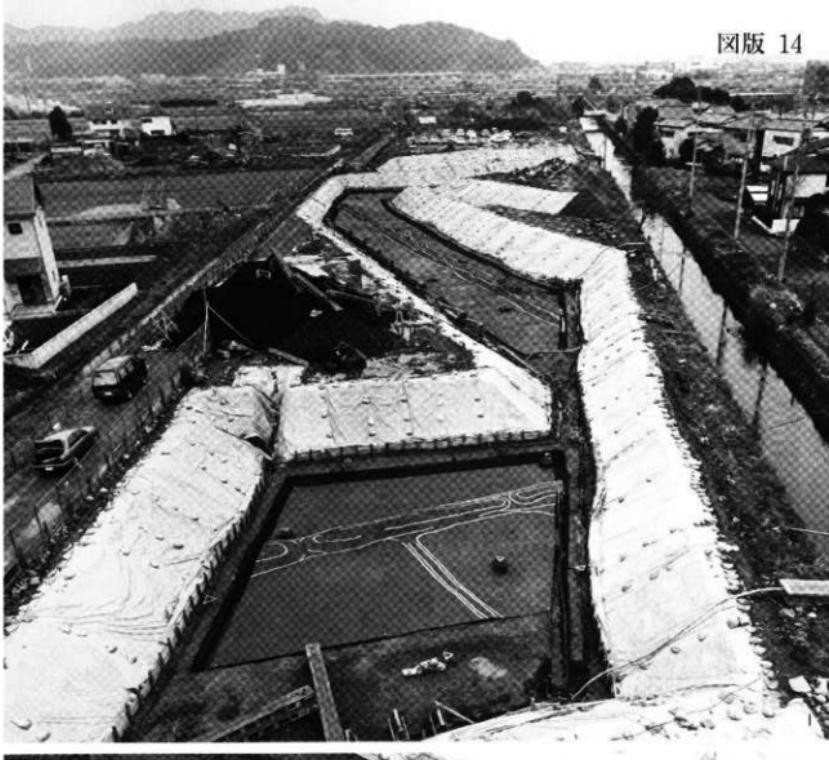
1. 遠景（南西より）
2. 全景



図版14

5区D III層 1

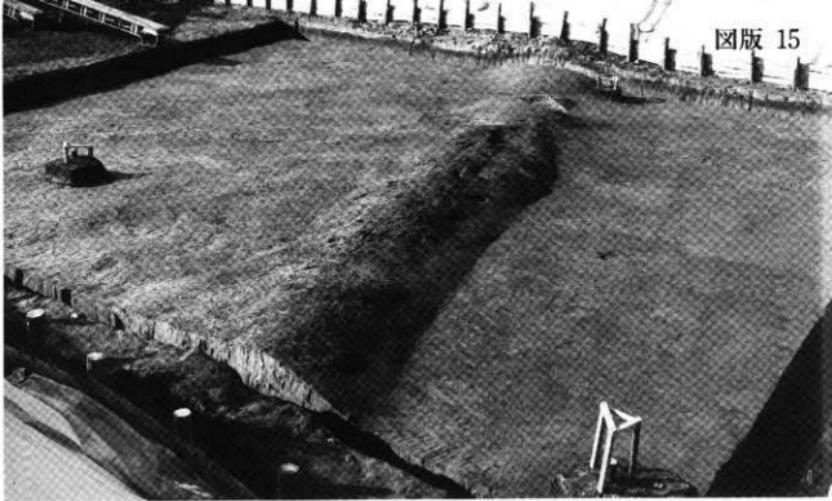
1. 速景（西より）
2. 全景



図版15

5区D III層 2

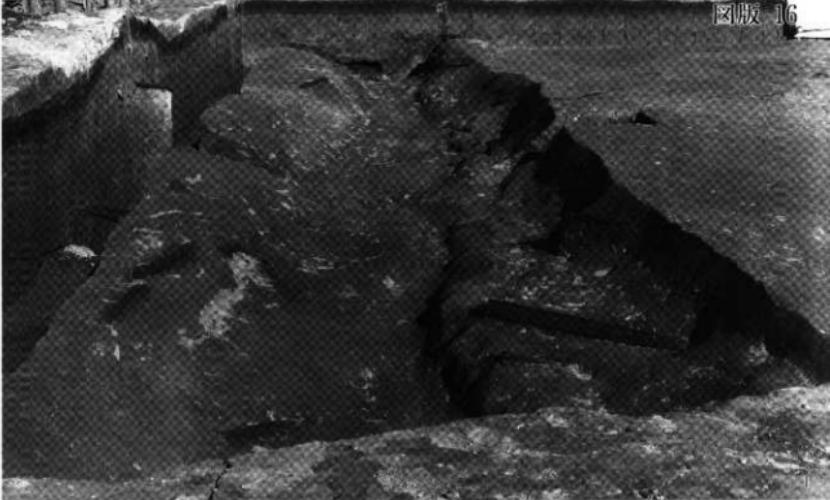
1. SK-5検出状況（南東より）
2. SK-5解体状況
3. SK-5土層断面（北壁）



図版16

5区 S R - 1

1. 検出状況（西より）
2. 同上（東より）
3. 土層断面（西壁）



図版17

6・7区D I層

1. 6区全景
2. 7区全景
3. 6区遠景（南西より）
4. 7区遠景（北西より）



図版18

6区DⅢ層 1

1. 遠景（南西より）
2. 全景



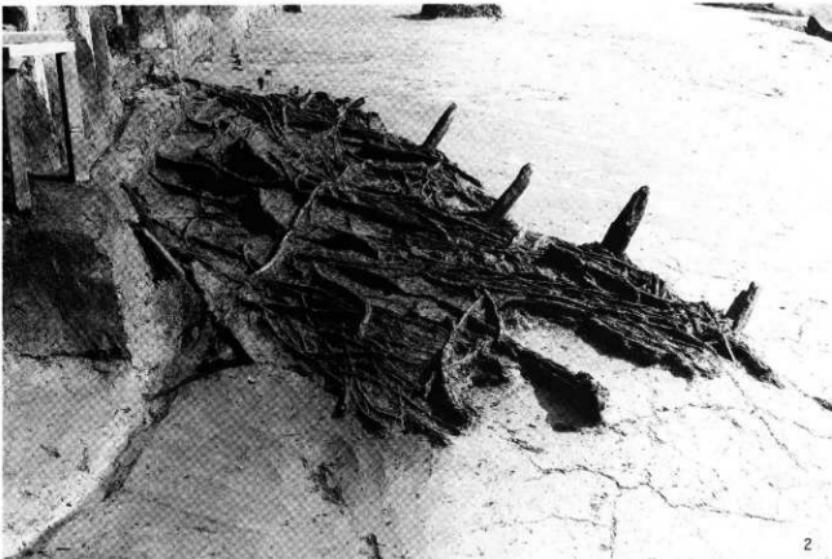
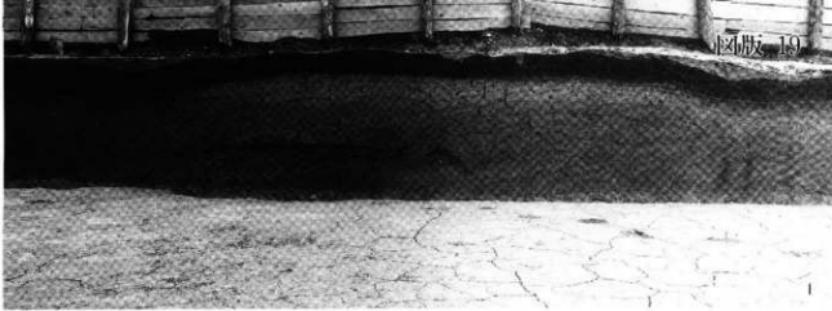
図版19

6区DⅢ層 2

1. SK-6 土層断面（西壁）

2. SK-6 解体状況

3. SR-2 検出状況（南東より）



2



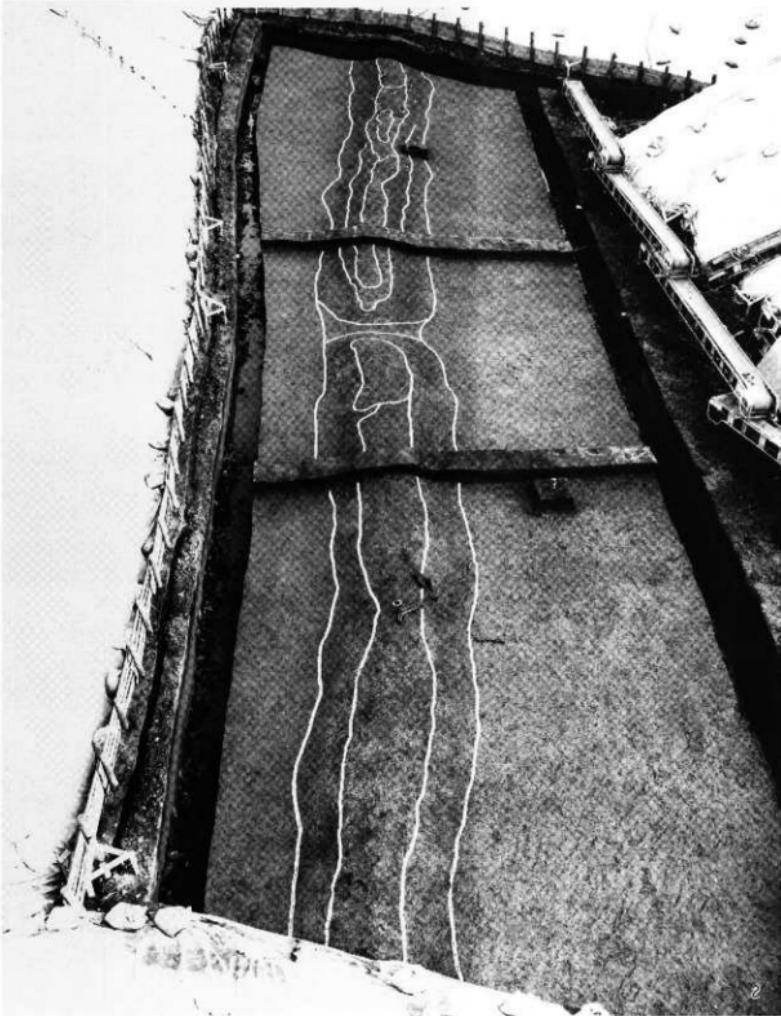
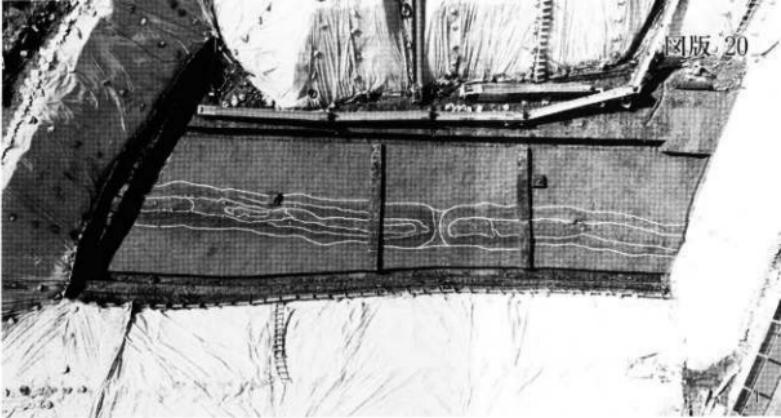
3

図版20

7区D III層 1

1. 全景

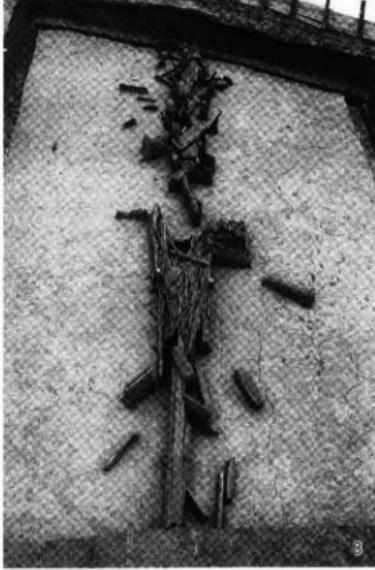
2. 遠景（北西より）



図版21

7区DⅢ層 2

1. SK-7土層断面（南壁）
2. SK-7解体状況（南東より）
3. 同上（北西より）
4. 輪カンジキ型田下駄出土状況
5. 翼状木製品出土状況



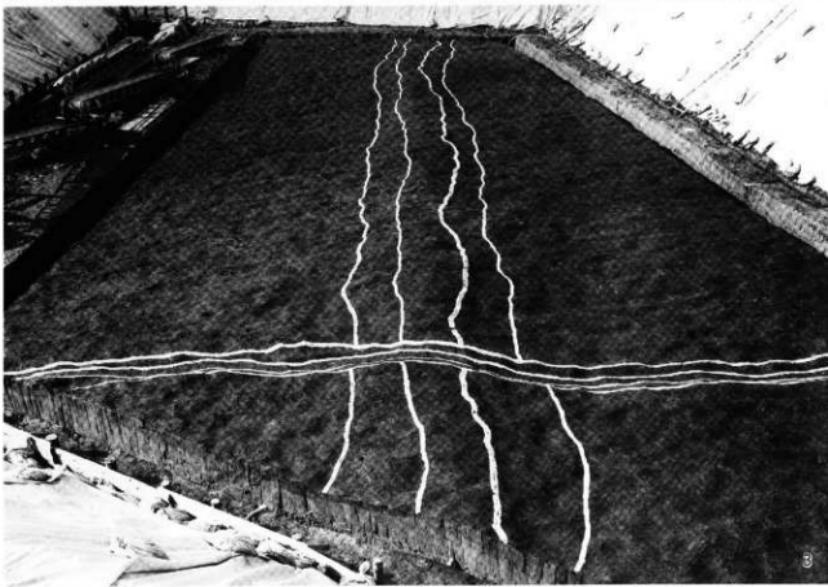
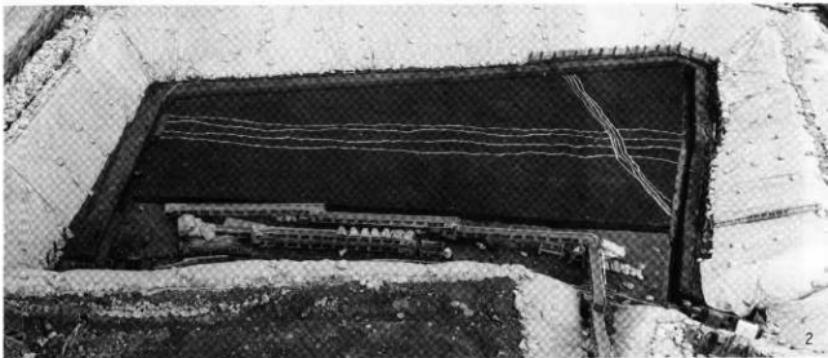
図版22

8区D I層

1. 全景

2. 遠景（南西より）

3. 同上（南東より）



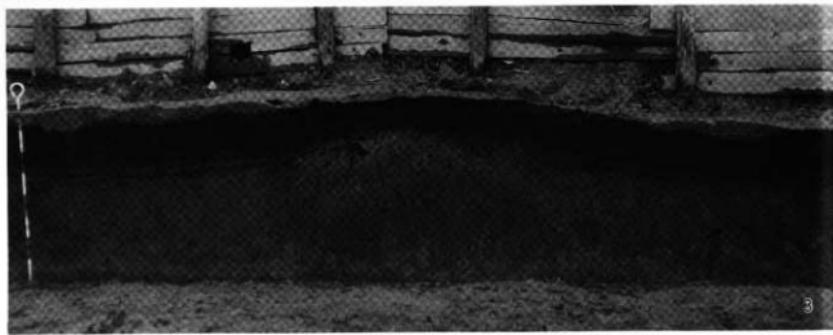
図版23

8区D III層 1

1. 遠景 (南東より)

2. 全景

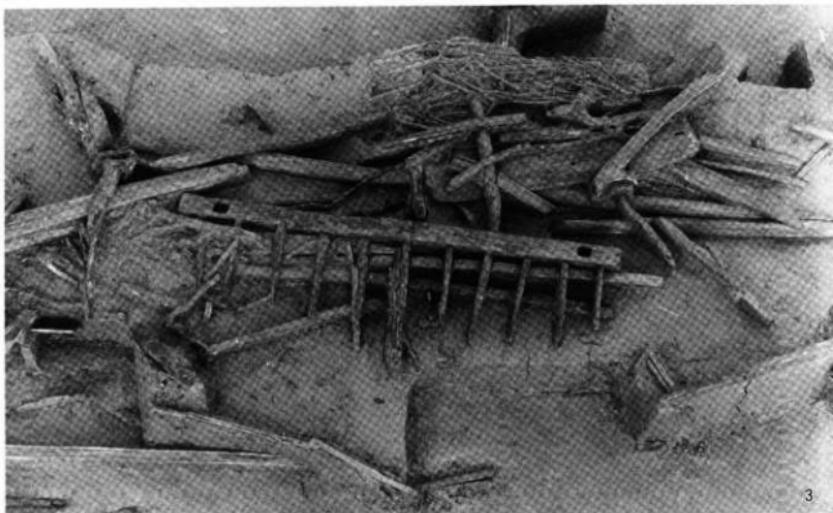
3. SK-8 土層断面 (南壁)



図版24

8区D III層 2

1. SK-8解体状況（南東より）
2. 岩上（北西より）
3. 馬糞出土状況
4. 灰釉陶器出土状況
5. 下駄出土状況



図版25

9~11区D I層

1. 全景

2. 遠景（北東より）

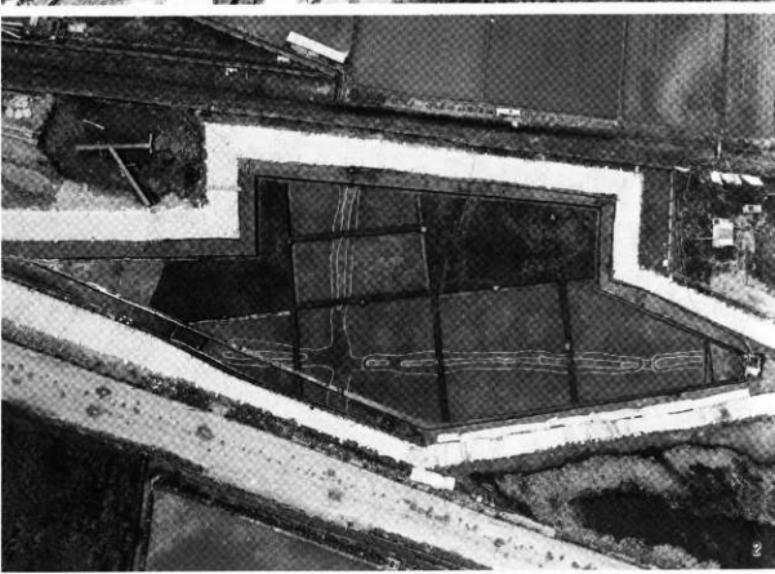
3. 同上（北西より）



図版26

9~11区D III層 1

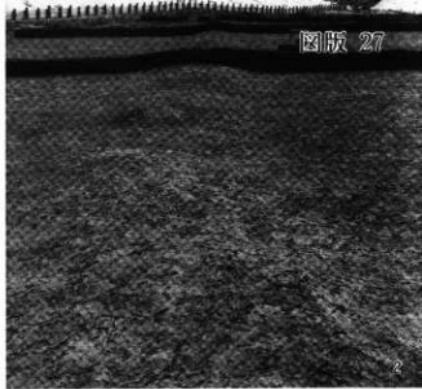
1. 速景（南西より）
2. 全景



図版27

9~II区D III層 2

1. SK-10検出状況（北西より）
2. SK-II検出状況（北東より）
3. SK-9~II解体状況（南西より）
4. SK-10解体状況（南東より）
5. SK-10解体状況（南東より）

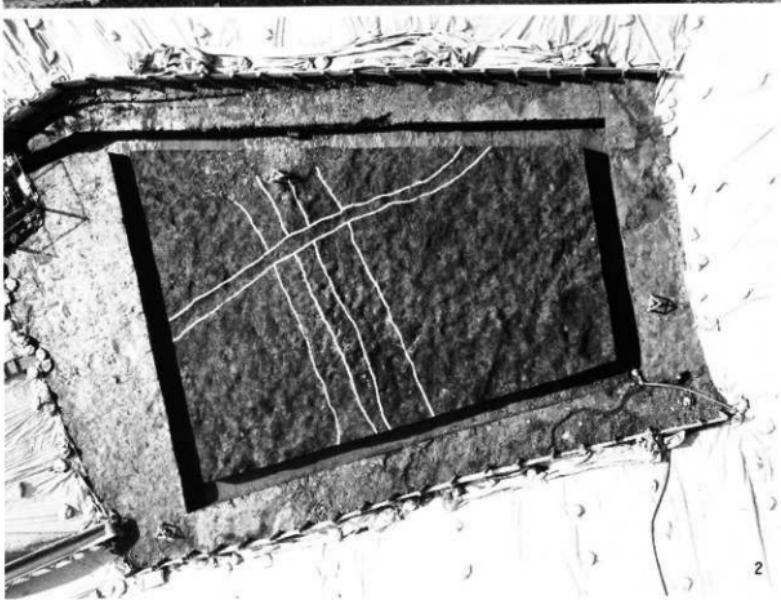
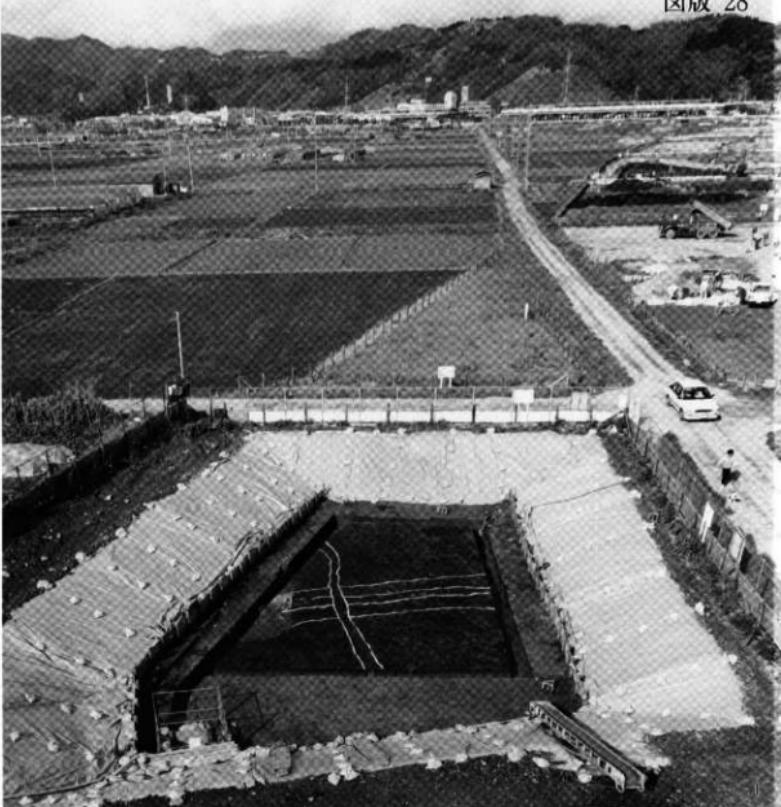


図版28

12区D I層

1. 遠景（南西より）

2. 全景



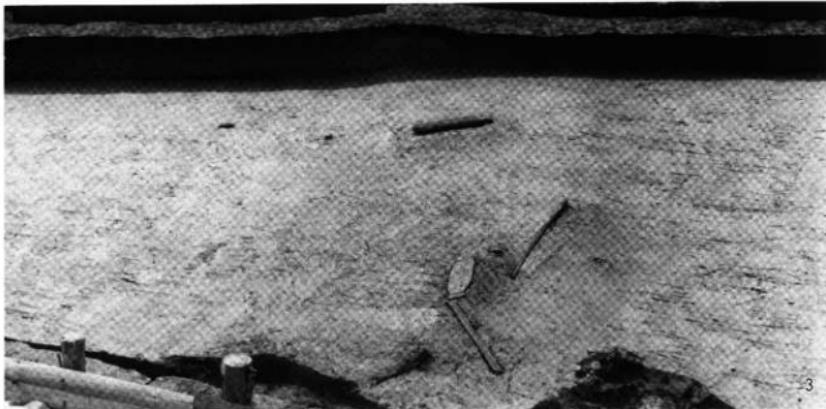
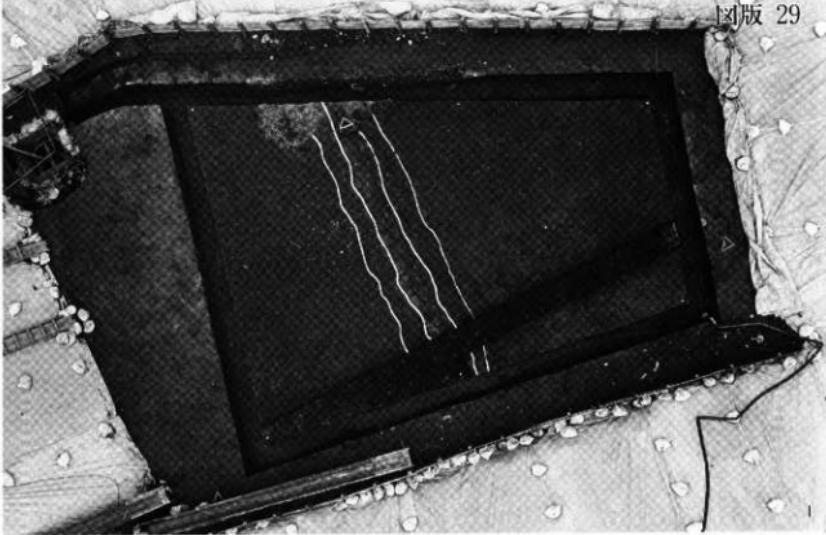
図版29

12区DⅢ層

1. 全景

2. SK-12検出状況（北より）

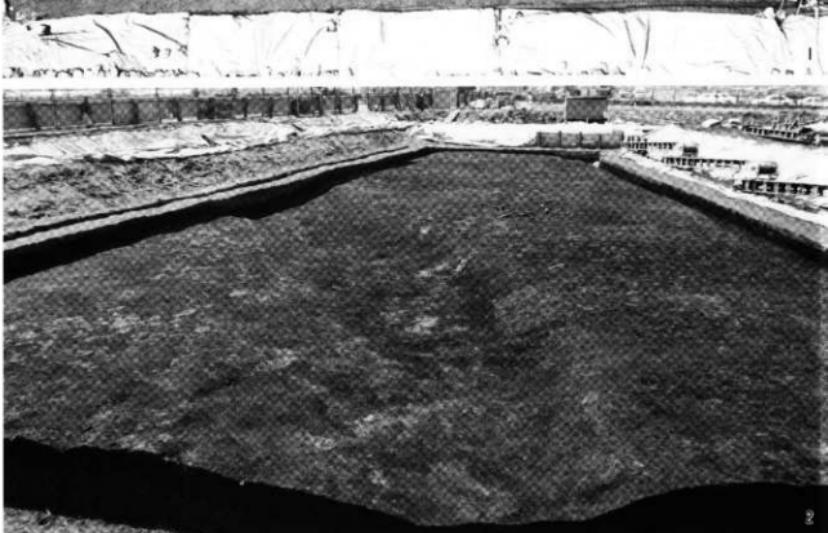
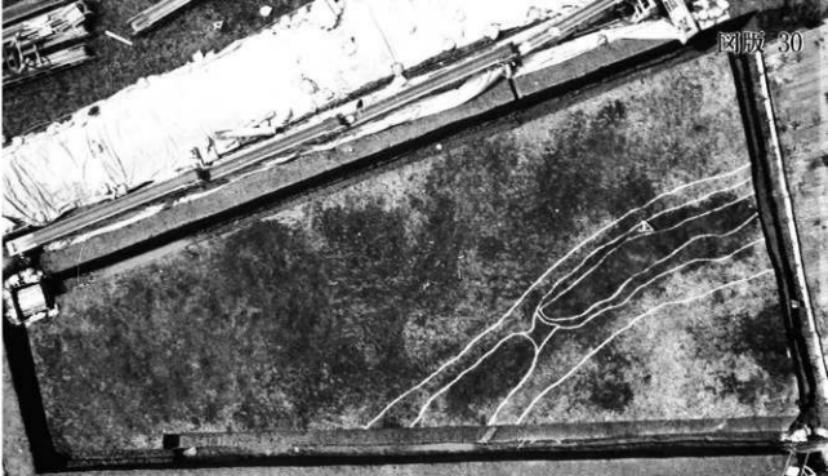
3. SK-12解体状況（北西より）



図版30

14区D I層

1. 全景
2. 速景（北東より）
3. 同上（南西より）



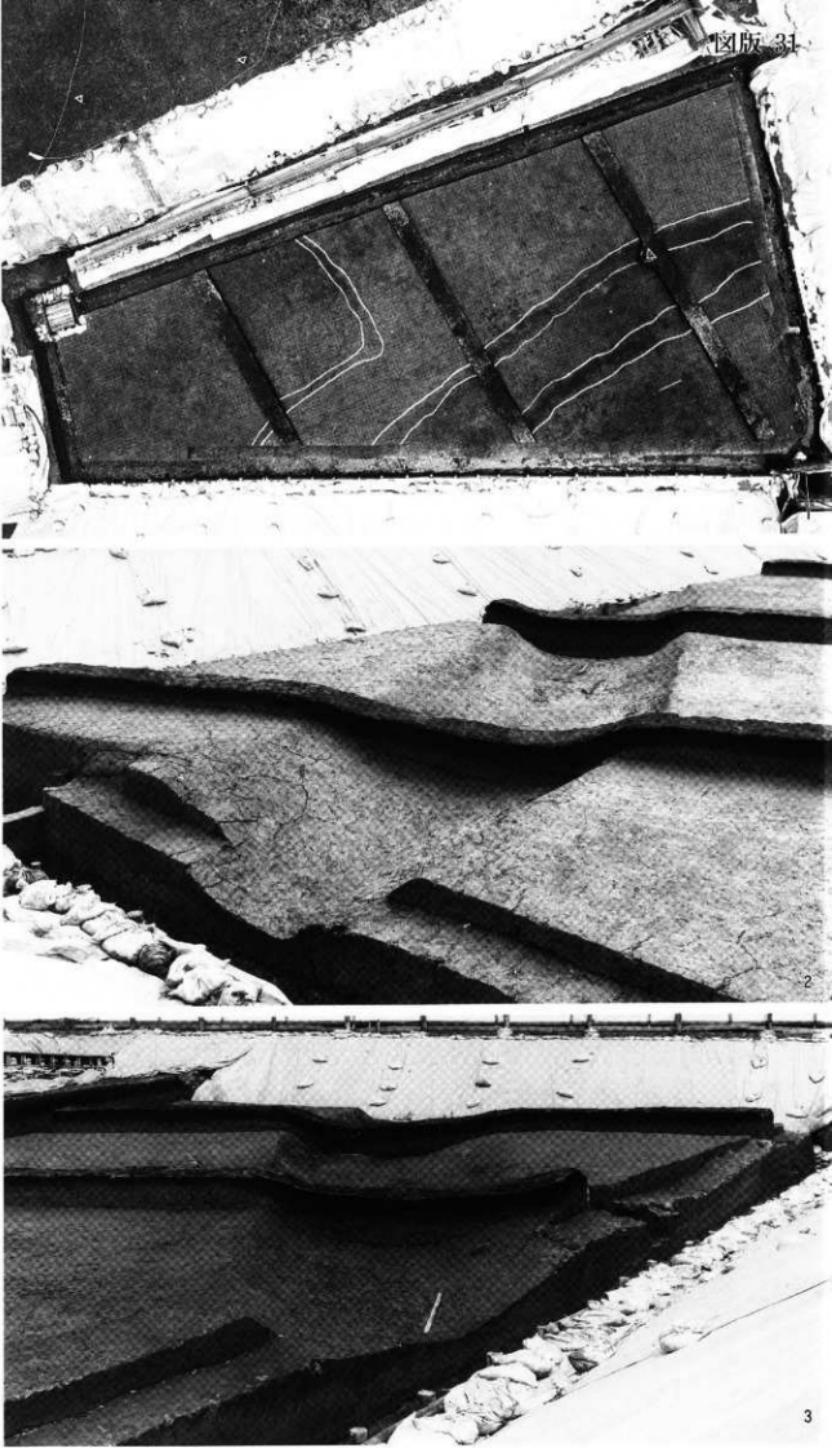
図版31

14区D III層

1. 全景

2. S R - 3 検出状況（北東より）

3. 同上（南西より）



2

3

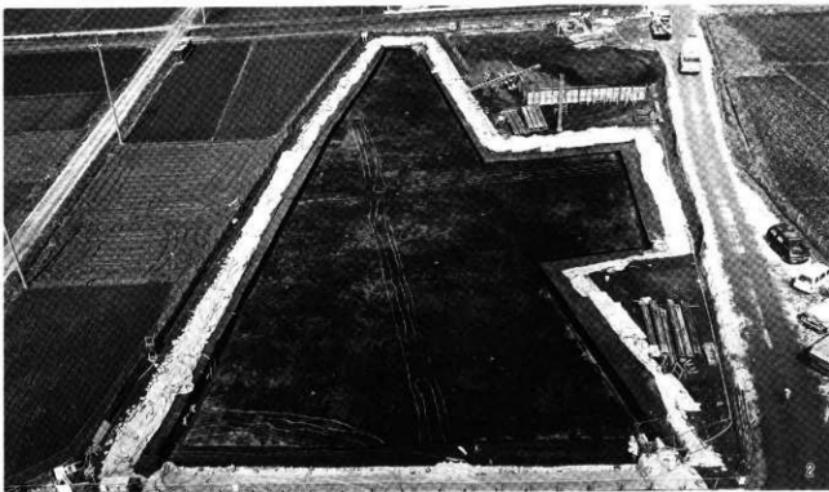
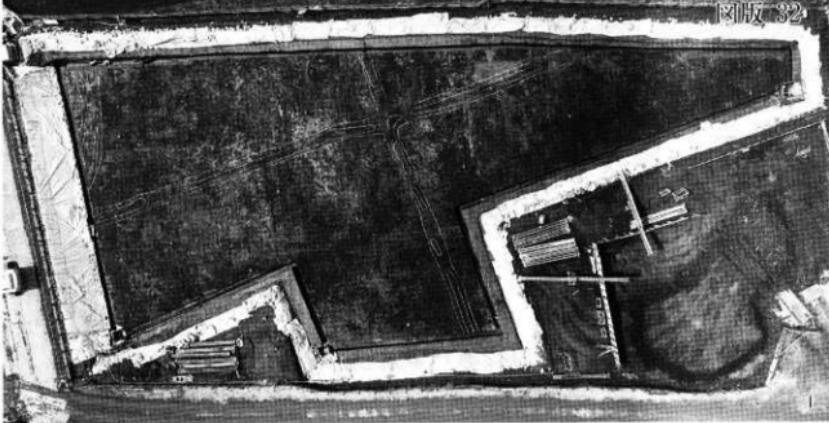
図版32

15・16区D I層

1. 全景

2. 遠景（南西より）

3. S R - 4 検出状況（南より）



図版33

15・16区D III層 1

1. 遠景（南西より）

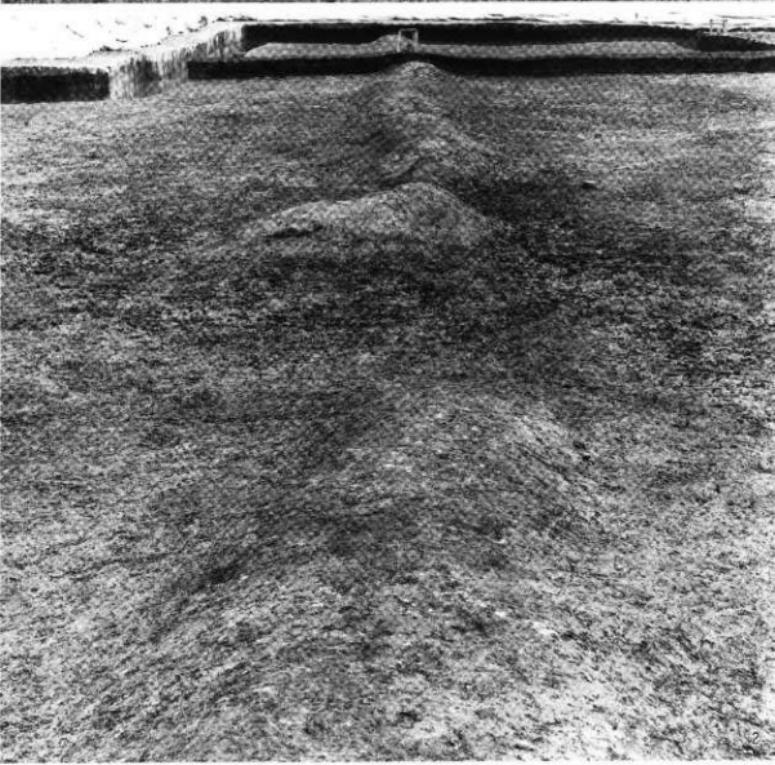
2. 全景



図版34

15・16区D III層 2

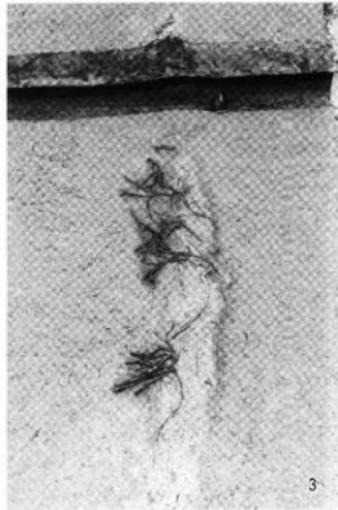
1. SK-14検出状況（南西より）
2. SK-15検出状況（北西より）



図版35

15・16区D III層 3

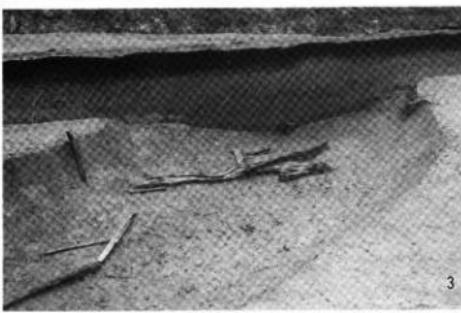
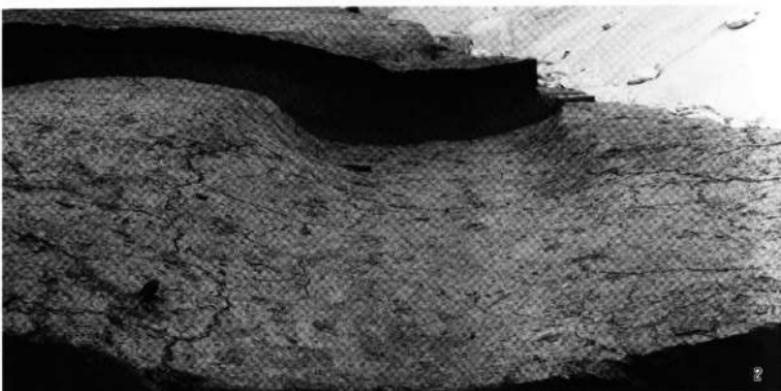
1. SK-15絞出状況（南東より）
2. SK-15解体状況（南東より）
3. 同上（南端、南東より）



図版36

15・16区 D III層 4

1. SR-5 検出状況（南東より）
2. SR-4 検出状況（北より）
3. SR-5 土層断面
4. 大足出土状況（SR-5）



3



4

発掘調査参加者名簿（順不同）

石垣 稔	杉山 衛	寺坂 正義	小林 久男	西尾 博昭	伊藤喜三郎
田村 彩司	松田 良泰	松田邦三郎	齊藤 和衛	小野田能樹	伊藤 和夫
横山 伍郎	内田 昭二	南条 信吉	佐藤 儀郎	藤沢 矩二	富永 定男
森 大介	秋元 錠一	市川喜代治	漆畠 三夫	海野 知夫	大塚 登
武田 健明	長澤乙子吉	西村 京一	福井 宏	増田 久一	松永 金吾
山本道太郎	永田 久夫	岩崎 敏郎	柿島 孝	青山 昌司	鈴木 静雄
鷲津 錦司	川口 雅也	漆畠 實	前田 文吉	牛田 高	市川 武司
平井 秀平	高村 富造	高橋 昭	山下 辻雄	杉山 信夫	畔柳 仁司
平野 広	三浦 儀作	杉山 隆	新庄 昭男	川口 信義	本多 孝之
望月 威憲	深沢 巍	菊田 智里	森田 恒史	石山 鉄次	花城 英雄
小柳 勇	柴田 誠一	太田 長男	山田 晋	山口 正人	大長 篤
村松 弘規					
望月寿三重	山本 正子	村瀬 ひさ	山下 春枝	佐藤 徳恵	久保田トク江
小林 久代	鈴木 君代	稻葉 寿枝	鈴木さえ子	佐藤よし子	武田 幸代
小林 かね	築地喜野江	海野 きみ	高柳 芳江	竹山 瞳子	齊藤奈々子
吉田 充代	道下富久恵	齊藤きく江	内田みどり	森 マチ子	小柳津あや子
根本須美子	水鳥 光枝	藤沢 泰江	海野 筆子	富永 光代	海野 澄江
佐藤 笑子	井上 和子	海野 くわ	川崎 妙子	洞口よし子	永田伊津子
川崎 充子	福田 典子	川崎 わさ	山口三千穂	山崎はつ子	海野 いね
鈴木はな江	海野しづ江	昌 治世	泉 重子	近藤 明美	小林美智子
森崎ヒデ子	山田 玉枝	村上 一枝	滝 智恵	望月 幸子	望月 いね
石谷みち代	稻葉 チエ	望月みつえ	滝 瞳子	飯塚久美子	内山 明子
鈴木 桂					

整理作業参加者名簿（順不同）

内山 明子	池田きよ子	岩石 文江	石松真理子	田村 光代	岩田 正枝
近藤 友恵	竹内 淨子	山田美代子	望月 純与	石原 美穂	伊藤 玲子
斎藤夫美子	鶴橋扶美代	堀井由利子	山村 伸子	近藤 好美	長橋ゆう子
向島 玉枝	山本 薫子				

世話役

朝波 和夫 望月弥之助

# 報告書抄録

ふりがな	たけみいせき	いこうへん
書名	岳美遺跡 I (遺構編)	
副書名	平成4・5年度静清バイパス(岳美遺跡)埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告	
シリーズ番号	第60集	
編著者名	池ヶ谷 清	
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所	
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL 0543-67-1171	
発行年月日	1995年3月31日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °'."	東經 °'."	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岳美遺跡	静岡県静岡市 北安東4丁目 岳美1丁目 立石	22201		35° 0'	138° 12"	19920401～ 19931031	延べ 15,680m <sup>2</sup>	道路(静清 バイパス) 建設に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岳美遺跡	水田跡	平安時代	条里型水田 (大畦畔) 溝状遺構 自然流路 湧水施設 (祭祀)	土師器、須恵器、灰 釉陶器、大足、輪カ ンジキ型田下駄、田 下駄、鋤、鍬の泥除 け、えぶり、馬鍬、 田舟、横樋、曲物、 剣物、挽物、火きり 臼、火きり棒、横櫛、 下駄、櫛、翼状木製 品、有頭棒、付札状 木製品、楕状木製品、 建築材、砥石、種子、 昆虫化石	静清平野北部における広域条里区画の確認

岳美遺跡 I

(遺構編)

平成4・5年度静清バイパス(岳美地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月31日

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印 刷 株式会社 三 創  
静岡市中村町166番地の1  
TEL (054) 282-4031